死にたい主人公が目覚めたのは死ねない能力でした。

ユノ・アスタライズ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生疲れて自殺したい主人公。そんな主人公が目覚めたのは……

※一応言っておきますと、ｐｉｘｉｖでも投稿してます。

目　次

人物紹介 ―― 1
番外編（つまり作者の気まぐれ）
番外編 ―― 12
番外編２ ―― 17
ＧＷ企画！番外編！ ―― 23
そこそこ大事な事が決まったので番外編！ ―― 31
番外編５　前編 ―― 37
番外編５　後編 ―― 42
正月記念　番外編６ ―― 51
第一章：終るつもりが始まった。
１話　自殺しても死ねない。 ―― 58
２話　やはり気が会わないやつと接するのはストレスがたまる。
（リベンｓｉｄｅ） ―― 63
３話　やはり遺書は死ぬ直前に書くべきだった。 ―― 69
４話　ややこしすぎる状況。 ―― 77
５話　初仕事 ―― 83
６話　黒歴史から学べることはあるが同時に精神も削れる。
91
７話　戦いは強さだけじゃないんだなと確信した。 ―― 97
８話　最初は嫌ってた奴がわりと気が会う奴だったりする。
102
９話　ある意味では僕は殺されたも同然だけど…… ―― 109
１０話　名前考えんのってこんなに苦労するものなのか……

第二章：避けられない面倒事

１１話　思い出話（リベンｓｉｄｅ）――――――120
１２話　従兄弟襲来！――――――128
１３話　どんなに言われようとやってないものはやってない！
134
１４話帰っていいですか？――――――140
１５話　え？何この状況。――――――146
１５話　僕は明らかに被害者な気がします。――――――152
１６話　逃げることは罪では無いと心のそこから思う。――――――158
１７話　人に奢ってもらった飯は妙にうまい。――――――165
１９話　ゲシェタルト崩壊――――――171
２０話　拗ねた人はめんどくさい。――――――176
２１話　殺さない縛りで５０対１！……さぁ、殺せないデスゲームを始めよう！――――――183
２２話　同じ失敗を繰り返す大人ってどうよ？――――――188
２３話　そうだ！逆に考えるんだ！サブタイトルなんて、捨ててしまっても良いさ……――――――193
２４話　職人の魂！信念！プライド！出でよ！青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）!!!――――――199
２５話　実験と遊びと不意打ち――――――205
２６話　意地と信念と最後の勝負――――――211
第三章　僕の周りには変人が多い
２７話　調査と不運と変人と――――――220
２８話　違和感と遭難と変人達――――――226

人物紹介

アルフォト・グレイロード
性別…男
年齢１８歳
身長…１７４くらい

異能『永遠の犠牲者（エターナル・ヴィクティム）』…とにかく死なない。歳も取らない。ただし、傷も治らない。（細胞分裂常時ＯＦＦだから）だけど血も出ない。ちなみにイメージ的には細胞が止まってる感じなので細胞が燃えたりもしない。なので、どこか斬られた場合（細胞そのものは斬れないが、結合部分は斬れる。）は縫ってくっつけるか回復魔法使うかポーションぶっかけるしかない。ただ、止まってるのは再生能力だけなので、それ以外は普通に稼働してる。なので、食事がなきゃ痩せる。体力も減る。筋肉痛？ポーションでもぶっかけろそんなもん。（ちなみに体細胞分裂は生きてる。）死なないという概念のため、生け贄等も弾く。（ちなみに生け贄は大抵死ぬことがセットだからこの能力持ってるやつ生け贄にすると儀式の内容がこんがらがる。）

概要…見た目は限りなく黒に近い焦げ茶。目は青い。気だるけそうな雰囲気。ちなみに髪は母親似、目は父親似。気を使いがち、しかも使うとこが間違ってる場合が多い。適応力はそれなりにはあるが、あったとしてもどうしようもないことが多い。めんどくさがりや。病的なまでの方向音痴。家が王族の分家でくらいの高い貴族だからめっちゃ金持ち。ただし、本人は父親の不倫でできた子のため、嫌がらせなどを受けたり扱いは悪い方（ちなみに家族からは受けていない）。なので、いつも胃痛に悩まされ、ついには自殺しようと考える。メンタルは結構弱いが、精神系の回避率は高い。ちなみに母親はメイド。あと、父親は女好きで、妻が何人もいる。主人公は複数人の妻以外でできた子供。そのため、めちゃくちゃ性格こじれてる。あと、人

の名前覚えるのクソ苦手（最近はその兆候が見えない）。そして母親は産まれたあとに死亡してる。武器は基本的に鎚か双剣でたまにバスーカ

名前の語源……お菓子のアルフォート

特技…回復系の魔法。『発射（ブラスト）』←Ｎｅｗ

趣味…寝る、自殺（死ねないので未遂。ただし、この設定はほとんど消えてる）

リベン・ソロモン

性別…男

年齢…１８歳

異能『穢れの崇拝（ネームレス・カルツ）』…殺した相手の情報を本に記す。（その本はいつでも出したり消したり可能。）その本の再現したい情報が書かれているページに栞を挟むことで、ページに書かれた情報（異能、その人が覚えた魔法、体術など。）をコピー出来る。

概要…神嫌いの聖職者。　教会に神嫌いを隠し続け聖職者になった猫かぶりの天才。見習いの時も救い（洗脳）を耐えきった。黒髪、目の色は赤。身長は主人公よりちょい高いくらい。武器はなんでも使えるから持ってない。性格はちょっと、いやかなり頭おかしい。基本的に嫌いなやつをどう不愉快にさせるかしか考えてない。一応助けて求められたら助けようと思うけど助ける人が神の信仰が重度だったら最低限しかしない。ちなみにアルフォトの能力みたいに神の道に反してるのは大好き（死なないし歳もとらないとなると教会視点の生物の儚さや尊さを完全否定しているので。）基本ボケ役だが、トルテと居るとツッコミに回る神嫌いな理由が作者がワケわかんなくなってるけどネタとしてる使ってるせいで余計ワケわかんなくなってる問題児。（作者目線）人の顔を見ると大体想像していることが分かると言う特殊能力がある。（異能との関係はない）

クグロフ・グレイロード

性別…男

年齢…４８歳
身長…１７８くらい
異能…無し
概要…アルフォト達の父親。イケメン。モテる。周りとすぐ仲良くなれるタイプ。が、アルフォトとは微妙な関係のためどんな顔していいかわからず(主に後ろめたさで)、アルフォトの前ではいつも無表情。本当は他の息子たちの様に仲良くしたいと思ってる。
語源…お菓子のクグロフ
フリッツ・グレイロード
性別…男
年齢…２５歳
身長…１７５くらい
異能…無し
概要…グレイロード家の長男。既婚者(ちなみに相手は一人。)髪の色と目の色は父親と同じ。若い頃のクグロフとめっちゃそっくりだが、本人は真面目でどんな人にも態度をほぼ変えないある意味では平等なタイプ。なので性格は父親にあんま似てない。こちらも父親と同じでアルフォトと仲良くなりたいと思ってる。後、結構身長気にしてる。
語源…お菓子のフリッツ
シュゼット・グレイロード
性別…男
年齢…２３歳
身長…１８０くらい
異能…？
概要…グレイロード家の次男。既婚者（相手は３人)。髪の色は桃色。目の色は黒。見た目は母親似。性格は父親とほぼ同じ。（ただし、シュゼットのほうがちょっと軽くて胡散臭い感じがしなくもない。)。父親と違うところはアルフォトに結構気楽に話しかけれること。
語源…お菓子のクレープ・シュゼット

フィナンシェ・グレイロード
性別…女
年齢…２３歳
身長…１５８くらい
異能…無し
概要…グレイロード家の長女。独身。身長は１５８くらい。髪の色は白。目の色は赤。性格は基本真面目。めちゃくちゃ男運悪い。ちなみにフリッツと同じ母親から産まれた。アルフォトとの仲は普通。会ったらたまに話しかけるかな程度。（ただし口下手。）
語源…お菓子のフィナンシェ

マルク・グレイロード
性別…男
年齢…１９歳
身長…１７８くらい
異能『剣神の加護』…手に持った剣をなんとなくの感覚で使いこなすことが出来る。が、マルクは非力すぎて木刀しか持て無い。（ちなみに加護は異能に含めて良いのか微妙なラインだが、お互いに共通点が多いため一応異能となっている。）
概要…グレイロード家の三男。独身。髪の色は青。目の色も青。髪の色は母親似。目の色は父親似。性格はヘタレチキン。アルフォトと一番仲がいい異母兄弟。足速い。めっちゃ非力。人との交流などが苦手なため、冒険者ギルトに所属している。この作品の中では意外と凄い奴だが、最近は影になっている悲しい次男。ちなみに血が少し苦手（具体的には見たら動悸が荒くなるくらい）
語源…お菓子のサンマルク

シャラン・グレイロード
性別…男
年齢…１７歳
身長…１６０くらい
異能…無し
概要…グレイロード家の次女。１７歳。髪の色は黒。目の色も黒。

見た目はクール系だが、性格は父親と同じ感じ。アルフォトとの接し方に悩んでる。（アルフォトは知っての通り肩書きがあまりよろしくないので。）よく姉のやけ酒に付き合わせられる。

語源…お菓子のシャラン

ハント・ハーペン

性別…男

年齢…２８歳（マジだった。）

身長…１８０くらい

あだ名…オッサン

異能『重力の悪魔（グラヴィタス・ガーブ）』進んだ方向と同じ方向に重力を発生させる。そのかかる重力の強さは太陽が特定の２つの位置に近ければ近いほど強い。その基準が極端で、強さを１～１０だとすると特定の２つの位置にある６０分は９～１０。その前後３０分以内は７それ以外がほぼ０。そのため、満足に戦えるのは１日合計２４０分だけ。任意で発動するタイプの異能。効果対象は自分、もしくは自分に触れたもの。かかる重力の感覚は、自分は後ろから押される感じ、触れたものは弾かれる感じ。（服などは自分の体の一部と人間の常識で自然と判定される。剣は剣も体の一部ととらえる感じの流派だったからそう認識が付いた。）満足に戦えれば攻めには無類と言っても過言ではないほどの強さを誇る。

ただ、動くことが大前提なので防御面ではかなり使い勝手が悪い。

概要…見た目のイメージは七つの大罪のエスタロッサを少しスマートにした感じ。慎重な性格。そんで恩は早めに返すタイプ。どこで剣術を習ったかは不明。そしてなぜこんな大役になったかも不明。過去に何かしらあって自分がいた記録を完全に消し、そのまま裏え……と言ったありきたりな設定。作者の無計画さを明確に表したキャラ。ちなみに年齢をいじられるとちょっとキレる。

クラレ・ブリューレン

性別…女

身長…１３３くらい

年齢…１２歳　異能…無し
概要…銀髪で青目。狼ベースの獣人の少女。珍しいから誘拐されて凶暴だから縛られてた。味方と敵で大分態度が変わるタイプ。（アルフォトに最初冷たかったのは味方だと信じきれなかったから。）ただ、拘束解いただけで信用しているので、普通にチョロい。（誘拐されたときはそのチョロさを利用された。）アルフォトを（社会的に）殺せる（今のところは）唯一の存在。普通に強く、狩りも出来る。
スピカ・シャックス
性別…女
身長…１６０くらい
年齢…１９歳
異能『不運の呪い』…こちらも異能と言っても良いのか微妙なラインであるが、もはや呪いが強すぎて加護の領域みたいな感じになっている。なので、異能と言っても良いか微妙なラインの加護のさらに微妙なラインというややこしい立ち位置にある。
概要…髪の色は緑で目の色は青。単純でチョロいそんでもってバカでアホ。防御力がバカみたいに高く、これまで呪いによるどんな不運も跳ね除けてきた。戦闘スタイルは『強化（エクレトス）』と言う上級の強化魔法で魔力以外の全能力を底上げし、真っ向からインファイトと言う明らかに魔法使いじゃなくて武闘家の戦い方。ちなみに、彼女が魔法使いになろうと思ったのは家族から才能があると褒められたから。実際魔法の才能が有り、殆どの上級魔法を使える。だが、やはり基本はインファである。（ちなみに本気を出すとインファしつつ広範囲の上級魔法をゼロ距離で放つと言う結構恐ろしい戦法を使う。）呪いのせいでめちゃめちゃ不運だが、それでも家に引きこもったり周りを警戒する様子を見せないことからも耐久の高さがうかがえる。
ナイーヴァ・グルーミィ
性別…女
身長…１５８くらい
年齢…乙女の秘密です～
概要…金髪で緑色の目で、基本髪を後ろに纏めている。かなり

ヒャッハーしてるがいい人、どこか闇を抱えてそうな人でもある。基本めんどくさがりであり、アルフォトの前ではわりとダメな大人である。ちなみに年齢を聞いたら笑顔による無言の圧力で黙らせられる。それか茶化される。人の心を読んだかのような言動が多いが一体……

ジョリー・エクトビエト
性別…（肉体は）男
身長…２００くらい
年齢…ひ・み・つ・よ♡
異能『???』…気分で作った武器に擬似的な異能のような能力を付けることが出来る。名前は非公開。
概要…武器屋であり、ガチムチのオカマ。出た当初は完ッ全にインパクト重視で作っているため、これからは精々名前が無いキャラで終わると思ったが、番外編での登場回数が多く、人気も思ったより高かったためめでたく名前が付いた。髪の色は紫で目の色は右が赤で左が青のオッドアイ。

〜〜二章で新登場〜〜

トルテ・グレイロード
性別…男
年齢…１８歳
身長…アルフォトより少し高いくらい
異能『歪曲の幻影（ノンホールター）』…自分や自分の魔力を纏ったものの存在そのものを歪ませ、あらゆるものを透過させる。風の影響をなくし射程距離を実質なくしたり、盾や鎧などをすり抜けるなどの芸当が可能。ただし、自分以外の一度透過を解除した場合、もう一度触れなければ異能を発動させることができない。
概要…黒髪黒目、アルフォトの従兄弟、プライドは結構高い（なのにヘタレチキン）。色々と残念なイケメン。口が悪く、友達が居ない。アルフォトとは性格全然違うのに相性いいボッチとボッチの謎の化学反応でめちゃくちゃ仲がいい。現にこいつが居なかったらもう１年くらい早く自殺してた。スゲー銃の名手。ちなみに、言動の割には

きちんとしてる。見た目のイメージはメガネ外した闇金木。個人的に作者が気に入ってるキャラ。後述する鷹の目の所有者。

『鷹の目』…12種類ある魔眼の一種。目に魔力を流す事で発動。発動すると目の色が金色になり鷹のように見えるという感じで鷹の目という名前が付いた。特徴として、めちゃくちゃ遠くまで見え、最大2kmまで見える。目から伝わる情報量はとても多くなるが、重心の位置や僅かな癖なども分かり、動体視力に至っては銃弾すらスローに見える。弱点と言えばその情報量の多さ故に酔いやすく、かつなれないとめっちゃ疲れる。魔眼の中で珍しく他者に引き継げるタイプで、生涯一度も引き継ぎを行わなかった場合、ランダムで選ばれる。（トルテは銃の師匠から引き継いだ。）ちなみに、魔眼の中ではどちらかといえばショボい部類に入る。

語源…お菓子のザルツブルガートルテ

アルフォト・グレイロード（未来）

性別…男

身長…174くらい

年齢…覚えてない（500までは数えた）

概要…アルフォトが将来なるかもしれない未来、だけど一番なる可能性が低い未来の姿。容姿は今のアルフォトとほぼ変わりはない。言動と戦闘スタイルが大きく変わっており、特に戦闘スタイルは鈍足重量型からあらゆる武器を相手に合わせて使いこなすバランサーに進化。あと、振り回される側から振り回す側にも進化？している。大体200年くらい生きている。武器は剣、デカイ斧、槍、銃、ブーメランを使い分ける、二つ以上の併用もたまにする。武器はギラティナの破れた世界的な場所に保管していて、たとえ過去だろうが別世界であろうが取り出せる。（元々別に管理者がいたが、普通に殺してその世界の管理権、アクセス権を奪った。）もうパーティー内で最弱であった今のアルフォトなんて比べものにならないくらい強くなっており、強さランキングトップに余裕でランクイン。ちなみに、アルフォトがこれを再現しようとすると50年でやっと完全下位互換が出来上がり、その後も血反吐吐く努力をしてさらに50年後くらいに追い付く

感じ。ちなみに、何年生きてても痛いのは未だに好きじゃないらしい。ちなみに、トルテの異能は昔聞いたけど覚えてない。むしろ覚えてたらトルテはもっとやばかった。なお、約束のことすっかり忘れて本気…つまり割と殺す気で攻撃していたらしい。自分から言ったなら守れや。

パラド・アビンス

性別…男

身長…１８５くらい

年齢…２７歳

異能『信頼の証（シンボル）』…自分が信頼している人一人につきひとつの武器を出せる（その武器は壊れると２４時間は使えなくなる。）その武器は信頼した人によって様々。そして自分のことを信頼している人一人につき発動中の身体能力が上がる。

概要…青髪で青い目。騎士団で最も社交的な部隊の団長。めっちゃ強い。なお、何かしら秘密があるミステリアス系のイケメン……って設定。

バラン・オーダー

性別…男

身長…１８０くらい

年齢…１９歳

異能『審判の剣（ジャッジメント）』…所持者が間違ってると思う外的要因を斬れる。例えば、結界等を否定すればあとは結界に向かって剣を振れば強度関係なく壊せる、何らかの概念を斬るなどが出来る。（なのでアルフォトの殺害は可能。）

概要…銀髪で青目。勇者と呼ばれる青年。マルクと同じパーティーに居る人。誰にでも優しい好青年。ただ、やっぱり最近は慢心気味で、アルフォト（未来）が軽く自分のことをいなしてた時は若干ショックだった。やっぱりイケメン。作者が苦手な優しいリア充。

ガーダ・オルフェス

性別…男

身長…１８２くらい

年齢…３５歳
概要…独身男性。金にそこそこ汚いタイプだが、割と情に厚い。見た目は作中でも言うとおりめっちゃダンディー。だから結構モテるが、彼はとりあえず金貯めて満足する金額になるまで身を固めるつもりはないらしい。意外にもギャンブル等はやらないが、高い旅費を出して一々高く売れるものを取りに行くなど、「大きく使って大きく稼ぐ」と言う思想ではあるそう。ちなみに、ギャンブル等をやらない理由は「結局は人に造られたもので夢とロマンが足りないから」らしい。
異能『仮想の現実（リアル・ミラージュ）』…自分の本物でもあり偽物でもある物を作り出し、自分の数を増やす（ちなみに持ち物なども複製される。）。正直矛盾している。意味としてはどちらも本体と同じだしどっちが本物か分からないと言う意味。実際どちらも本物で、どちらが死んでもどちらかが生きていれば大丈夫。だが、頭数は２人までと決まっており、増えた方はもう一度増やせない。それがもっと混乱する要因となっている。ちなみにどちらも同一人物なので、ハモったりすることが多い。ちなみに、能力で増えたものは消えはしないのでもっと混乱するが、２人のうちどちらかが死ねばもう一度増やすことができ、更には死体は消える。なのでもうどちらも本物と捉えたほうが認識が楽である。ガーダももう面倒くさいからそう言うことにしている。ちなみにガーダが能力使うときは必ずどっちかが死ぬ前提。そこらへんはどちらも割り切った。
アリュシナ・ホイヘライ
性別…男
身長…１７５くらい
年齢…１８歳
異能…無し
概要…黒髪で黒目。悪は絶対に許さない善。（悪と認識した人以外には）めっちゃ良い奴。でも作者から言わせると偽善。でもそんな僕でも一瞬ホントに善なんじゃ……ってなるくらいには極まった偽善。悪人を物としか見れないぶっ壊れた野郎。異能無しで異能フルに使ったリベンと渡り合えるぶっ壊れた性能の持ち主。その実力は少

なくとも連戦と泣きまくって疲れ切ったアルフォト（未来）に厄介と言わせた。見た目は弱そう。

セリュー・ゼルドナー

性別…女

身長…１７２くらい

年齢…２４歳

異能『現存する魔力（マジック・アライブ）』…モチーフは某神のレベル０。魔力により自分の命のリソースを増やす。最大１０まで増やすことができ、一度１０まで増やすと１になるまで増やすことが出来ない。なかなかのチート。一度死ぬと魔力からできた肉体を一度消滅させ、新たに再構築する。復活するときは頭から実体を得ていって少しずつ上がっていく……イメージは某神のレベル０の復活を土管を介さずに直接地面からでてくるかんじである。

概要…白髪で赤い目。性格は結構ドライ。異能のせいもあり、自分の命を捨てるのに躊躇いがない。（ただし、残機が少ないときは別。）魔術が得意で、身体能力も高いのでステゴロもある程度行ける

番外編（つまり作者の気まぐれ）

番外編

作者「はい！どうも作者です！完全にノリで始めたのでいつ終わるかは作者次第です！というわけで、ゲストとして最近何故か絡んでるトルテ君とリベン君、後勇者と未来のアルフォト君をお呼びしました～」

リベン「ゲスト多くね？」

作者「……それでは！特に話すこと無いんで君たち作ったときの誕生秘話でも話しましょう！」

リベン「誤魔化すなよ。後特に話すこと無いんなら呼ぶな。」

作者「ハッハッハ！ノリと言ったでしょうが、作者の言う事には従え。」

アル（未来）「いや、ノリにしたがったらハント・ハーペンが産まれたんでしょうが。反省しなさいよ。」

作者「……ノーコメントで。」

トルテ「それはそうと何故ゲストがほぼ2章で出てきた奴らなんだ？他の奴呼べよ。主人公とか。」

作者「いや…1章に出てくる奴ってリベンとマルクと主人公以外あんま好きになれなくて……」

バラン「……なら何で僕呼んだの？君後書きで僕の事嫌いなリア充って言ってたじゃん。」

作者「出てくるキャラでクラレ除いたら唯一僕の性格モチーフが入ってないから。それも含めて話すよ。誕生秘話に。」

リベン「まずだれ言うの？」

作者「そりゃ君でしょ。一番登場したの先だし。」

リベン「うわ、喜んで良いのかわかんねぇや……」

作者「いやぁ～最初はただ単に気分を気分で押し固めてそこに『神嫌いの聖職者』って面白くね？って事で作りました。モチーフは結構精神ヤバイときの比較的にマシだった時期の僕です。」

リベン「日本語おかしいんだけど。なんだよ、ヤバイときの比較的にマシな時って。アンタ精神病んでんのか？」
作者「病んで無いよ……多分、そう信じたい。まぁ、知人から『コイツの狂気さには勝てねぇよ』って言われましたけどｗｗｗ」
トルテ「こんな奴が多少とはいえキャラのモチーフなのか……。」
バラン「……なんか、ホッとした自分がいるよ。」
アル（未来）「さっさと次行きましょ～次誰？」
作者「なんでアンタがしきってんだよ。殴るぞ？」
アル（未来）「理不尽だぁ！」
作者「世の中は常に理不尽に溢れているのだよ。例えば刑事裁判。あれは平等にするって意味で弁護人雇えるけど、やっぱり一個人である事には代わりないし、資金力にも限界があるのに対し、検察側は税金とマンパワーのゴリ押しで証拠上げんだよ。二審にギリギリなんとかなれば良いけどそれを有罪にされたら三審の最高裁は上告はほぼ門前払いだぞ？理不尽ばかりだ。」
アル（未来）「いや、都合の良いとこだけ抜きとんなや。それは確かに被告人が本当に無罪なら可愛そうだと思うけど、そうとは限らない。って言うか実際に有罪である可能性が高いからそういう仕組み作ったんじゃない？それに…もし不当な扱い受けてたとしたら裁判起こせば良いじゃない。」
作者「……よし、次いくぞ次！」
トルテ「あ、コイツ論破されたからって露骨に話題変えたぞ。」
リベン「ガキ臭ッ！」
作者「次はトルテ君だね。トルテ君はあれだよ。元は海馬っぽくするつもりだったって前書きで書いたよね？」
トルテ「そうだな……それがどうしてこうなったのかは聞いてないが……」
作者「なんか、それだけだとつまんなそうだから一時期の調子乗ってた時期の全盛期の僕をネタと言うなのスパイスで味付けしたらそうなった。」
トルテ「……お前撃つぞ？」

作者「いや、これでも真面目に考えたよ？『残念なイケメンを目指そう』って。」
トルテ「いや、『残念』の部分が濃すぎだよ。せっかくの見せ場がお前のせいで全部ネタだよ。」
作者「安心しろ、この作品はネタキャラじゃないのがむしろ少ない。」
トルテ「安心できるか！お前ガチで撃つぞ!?」
作者「ハッハッハ！所詮君らは私の掌の上！君らを殺すことだって可能だ！」
トルテ「お前顔バレて刺されても知らねぇぞ!?そんなゲス発言してるのリアルでバレたらマジでヤバイぞ!?」
作者「……次行こう……次。」
トルテ「……なんで少し悲しげ？」
作者「次は未来のアルフォト君デェス！」
アル（未来）「テンションイカれてんのか？この人。」
作者「君を話すにはまず現代のアルフォト君の説明がかかせません。」
アル（未来）「そりゃそうだろ……僕の過去だし、主人公だし。」
作者「そもそもアルフォトの名前自体はアルフォート見て思いついたんで深い意味は特にないんです。あ、それとアルフォトのモチーフは比較的にマトモな時期をかなりマイルドにしました。どのくらいかと言うとブラックコーヒーにミルクと角砂糖５つ位放りこんだ感じです。」
アル（未来）「だよなぁ……って！そこまで薄めたの!?」
作者「で、キャラのほとんどが作者の好きな曲がテーマソング的に在るんですよ。まぁ、こんな歌が似合うキャラになったら良いな～ってイメージですけど。ちなみにアルフォトくんは電王のオープニングの『Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ』です。」
アル（未来）「へぇ～ちなみに僕らは？」
作者「リベン君は初音ミクの『ライアーダンス』、バランがオーズのオープニングの『Ａｎｙｔｈｉｎｇ　Ｇｏｅｓ！』、トルテがｅｖｅさ

んの『ラストダンス』そして未来のアルフォト君が……」
アル（未来）「いや、全員イメージと違いすぎる……そして溜めんなよ。なんだよ。」
作者「君だいぶ辛辣だね。やっぱり現代のアルフォト呼ぶべきだったか……まぁ、良いや。君のモチーフは僕の精神ヤバイときのぶっちぎりでヤバイ時期だよ。こんなのになったら良いな～って曲は実写映画銀魂２の『大不正解』。」
アル（未来）「だから印象が違い過ぎるだろ……」
作者「良いんだよ。あくまでも理想だし。」
アル（未来）「理想って言葉を免罪符にすんなよ……」
作者「免罪符は使ってなんぼだろ。」
バラン「うわ……黒い…」
作者「人間は歳を重ねる後とに黒くなってくんだよ……」
アル（未来）「あんたそこまで歳をとってないでしょ。僕より年下だし。」
作者「当たり前だろ。あんた２００年以上生きてんだもん。そんなことより次だ次。ハイ、次勇者ことパラド君。君のモチーフは僕の理性だ、それに僕の一方的なリア充のイメージを混ぜた。。」
パラド「いや、言ってたじゃん。作者の性格モチーフに入ってないって。」
作者「『性格』はね。別に僕をモチーフにしてないとは一言も言ってない。」
パラド「……ちなみにクラレちゃんは？何がモチーフ？」
作者「こんな娘がいたら良いなっていう理想の金づるの性格の像。それをマイルドに。」
パラド「……思ったより酷かった。」
作者「ちなみにスピカは絶対近づきたくないリア充を少し私好みに歪めた。」
パラド「……リア充のイメージをどのように心得ているんだい？君は」
作者「僕と真逆の友達多い男女。」

パラド「そういうタイプの人が全てじゃないと思うけどな……」
作者「大体なんだんだよ!?なんでオタク＝非リアのイメージがついてるんだ!?リアルで充実してんのがリア充ならオタク生活満喫してる奴も十分リア充だろ!?」
アル（未来）「どちらにしろあんたのはオタク生活すら満喫できてないでしょ。ただ自堕落に過ごしてるだけ。現に最近何故かよく分からない無力感に襲われるって言ってたし。」
トルテ「まぁ、オタクと言うほど趣味に打ち込んでないしな……」
リベン「そもそもどこからがオタクで、どこからがリア充って定義が完成してないんだよなぁ……」
パラド「難しい問題だなぁ……。それより原因不明の無力感って大丈夫？大分精神やっちゃってると思うんだけどそれ。」
作者「好きな歌とか聞いてるときとかによくなります。」
アル（未来）「最近結構ポジティブな曲増えたのに？好きな曲に」
作者「だから余計なんだよぁ～『Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ』とか聞いてる時に良く無力感に襲われる。」
トルテ「最悪精神科行け。そのわりと狂気入った頭直してもらえ。」
リベン「トルテ君……医者にも限界があるよ……。」
作者「お前それ結構ストレートに僕の事手遅れって言ってるよな？殴るぞ。」
リベン「僕一応この作品で強さは上位に入ってんだけど……」
作者「え～これでこの番外編終わりです。続きはやるかもしれません。もしかしたら近いうちに誰をゲストにするかアンケートとるかも。それではまたの機会に…さようなら。」

番外編2

作者「第一回、『武器屋さんが答える、質問コーナー』!!」
武器屋「???」
フィナンシェ「???」
ハント「???」
作者「さあさあ今週も始まりました」
フィナンシェ「今第一回って言ったでしょアンタ。」
ハント「そもそも質問なんて答えられないだろ」
作者「それはさておき、今回は、投票があった3人に来てもらいました～（*☒ω☒ノノ゛☆パチパチ」
作者「紹介します、まずは何故か一番票が集まったダークホース、武器屋の人です。名前つけるかどうかわ検討中。」
武器屋「さらっと失礼なこと言うわねアナタ。」
作者「次は、真っ先に投票された無計画の具現化、マジで28だったハントさんです。（*☒ω☒ノノ゛☆パチパチ」
ハント「お前、俺の年齢ネタ気に入ってんだろ。それと、俺はともかく、女性に言ったら間違いなく殺されるぞ。」
作者「最後に、何で投票があったかマジで分からない、フィナンシェさんです。（*☒ω☒ノノ゛☆パチパチ」
フィナンシェ「ホントに何であったの？アレ？家族のなかで唯一マトモなセリフなかったから？」
作者「今回もトークで盛り上げていきましょう！」
武器屋「前回って、盛り上がってたかしら？」
ハント「いや、ほぼ自虐ネタ。」
作者「今回は真面目にやるよ。また泣きそうになりたくないもん。」
フィナンシェ「それは良いのか悪いのか……どっちなのかしら？」
武器屋「悪くならないのを祈るしかないわね。こればっかりは。」
ハント「それで？トークとは具体的には？キチンとした話でなければ基本お前の独り言だが？」

作者「メタ発言やめい。まぁ、とりあえず君たち三人を出した理由でも言うとするかね。理由はね、一人だと少ないから。」
武器屋「アナタコミュ障？可愛いわね。」
作者「やめてくれ。僕はそっち系じゃない。いくら範囲が広くても男は対象外だ。」
ハント「もういっそのこと性癖の話でもするか？」
作者「ウン！そうしよう！」
フィナンシェ「誰が聞きたいのよ、私たちの性癖なんて。特に作者の性癖なんて需要どこよ。」
作者「知らん。ただ僕の性癖を話したらほとんどの人が黙るよ？」
武器屋「引かれてるじゃないのよ……」
作者「ちなみに武器屋さんって受け？攻め？」
武器屋「そうネェ～、気分かしら。」
ハント「話広げるな。需要ないって言われたばっかだぞ。」
作者「じゃあ武器屋さんにお前の穴でも広げてもらう？」
フィナンシェ「下ネタはやめなさい。一部の層に嫌われるわよ？」
作者「何で君そんなにしっかりしてんのにモテないのかな。不思議だね～」
フィナンシェ「グホッ！」バタリ！
ハント「傷口を抉るな。」
武器屋「アナタも異性からほとんど白い目で見られてるんだから人のこと言えないでしょ？」
作者「安心してくれ、ほとんどが呆れて人並みには接してくれるよ。」
ハント「言ってて悲しくならないのか……？」
作者「そんな時代はさ、とっくに過ぎたよ……ところで君は可愛い系が好き？綺麗系が好き？……そもそもノンケ？」
ハント「ノンケだ。そしてどちらかと言えば綺麗系が好みだ。」
作者「お？そうなんだ。てっきりロリコンだと思ってた。……ハッ！もしかしてロリの綺麗系が好きなのか!?」
ハント「違う！こうなるだろうと思ったから答えたくなかったんだ

！」
作者「フィナンシェは？どんなのがタイプ？」
フィナンシェ「もう顔が良ければ誰でも良い。」
作者「ワオ、見境なくしちゃったタイプか。」
武器屋「何で修学旅行の夜みたいになってるのよ。」
作者「そういう武器屋さんのタイプは？」
武器屋「グッと来た子は全員好みよ。」
作者「あ、そっすか。」
フィナンシェ「グッと来るラインは聞かないのね。」
作者「こういうタイプは聞いても同じ答えしか返って来ないのがお約束。」
フィナンシェ「なるほどね……で？ちなみにアナタのタイプは？」
作者「女性であれば特にこだわりなし。…あ、綺麗系でも可愛い系でもどっちでも行けるって意味ね。年上でも年下でも良いし、年齢は最低１０前半、最高は４０後半性癖はどちらかと言えばＳ。Ｍにも恐らく転職可能。」
フィナンシェ「ウワァ、キモい。」
作者「そういえばさ、ハントくん。」
ハント「何だ？」
作者「君って何でヒャッハーになったんだっけ？」
ハント「異能の効力が最高に高まったからだ。」
作者「ふーん。なるほどね。あ、ソイや武器屋さんの月収いくら？」
武器屋「そうネェ～、基本オーダーメイド何だけど、私の能力（第４話参照）の特性上、作り置きが多いのよ～ただ、能力が付いた武器は貴重だし…そうね、気分や依頼の数によるけど、平均は７０万くらいかしらね。」
作者「た、たけぇ！……ちなみにヒモのハントさんは？」
ハント「たかる女がいないからヒモじゃない。……仕事をしていないからない。」
作者「……あっそ、フィナンシェは？」

フィナンシェ「サァ？１００万からは数えてないわ。」
作者「ア、ハイ。」
ハント「……。」
武器屋「さ、さすが貴族次元が違うわねぇ……」
作者「ここでゲストのハントさんに質問コーナーへ移ってもらいま～す。」
ハント「まだ諦めてなかったのか質問コーナー。あと、質問はさっき答えたぞ？何を答えるんだ他に。」
作者「え～、まず、主人公のアルフォトくんに対する第一印象は？」
ハント「思いっきりぶん殴ろうかなコイツって思った。年齢ネタを連発してきたし。」
作者「ブフォｗ女子かよｗｗ」
ハント「殴るぞお前（#^ω^）」
作者「ヒエッ！（((　;。Д。)))ガクガクブルブル」
武器屋「今のは性別関係なくキレるわね。」
ハント「ちなみにアナタの性別は？」
武器屋「身体は男だけど心は女よ♪」
作者「は～ん、で？ってことは男にしか欲情しないの？」
武器屋「？不通にするわよ？両刀よ？私。」
作者「うわ、衝撃の事実。」
フィナンシェ「それより、質問コーナーどうすんの？」
作者「あぁ、そうだった。では、フィナンシェさん、主人公であるアルフォトくんの第一印象は？」
フィナンシェ「……いや、まぁ……おとなしい弟。」
作者「なるほど……では、ぶっちゃけ何回男ハズレ引いた？」
フィナンシェ「グホッ！……１０からは数えてないです……」
作者「で？バツ何？」
フィナンシェ「そ、それは……５」
作者「え？残りは？」
フィナンシェ「軽く話したら気が合わなかったりした人たち。」
作者「あ～」

フィナンシェ「同情するならアドバイス寄越せ!!」
作者「知らんよ、私は彼女いたことないんで。」
武器屋「そもそもその時点で私たちアナタにアドバイスできないもの。」
作者「そうそう、そうだよ。ね？ハントさん。」
ハント「なぜ俺に聞く。」
作者「いや、だってこの中で一番人生経験豊富じゃんｗｗ」
ハント「ヨシ、殴る（#^ω^）」
作者「た、助けてぇ！二人ともぉ！」
フィナンシェ「自業自得ね。」
武器屋「ワタシ非戦闘員だから無理♪」
作者「この裏切りもぉ！」
フィナンシェ「そもそも味方になった覚えないんだけど。」
武器屋「右に同意ね♪」
ハント「だ、そうだ。覚悟は良いか？」
作者「ヒ、ヒエッ！こ、こうなったら……未来のアルフォト派遣するしかない!!来い！」
アル（未来）「え？やだよ。自分でガンバって？」
作者「この薄情者者オオオオオオ結構優遇してやってるんだゾオオオオ!!!」
ハント「じゃあな。ちょうど今日一回目の能力の発動時間だ。じゃあな。せめてもの情で骨くらいは埋めてやる。」
作者「アアアアアアアアアアアア!?!?!?!」
バキャ！
ハント「さて、終わったな。」
武器屋「みんな～、ワタシに投票ありがとね♪次するときはまたアンケートとるみたいだからよろしくネ～」
フィナンシェ「ところで何で何で私に投票があったのかしら。」
作者「出番なさすぎたからじゃね？」
フィナンシェ「あぁ、なるほど……て、なんで生きてんのよアナタ。」

作者「フッ！何度でも蘇るさ！」
ハント「ちょうどよかった。まだストレスがたまってたんだ。せいぜい良いサンドバッグになってくれ。」
作者「え？ギャァァァァ!!!」
武器屋「次回もよろしくネ～♪」

ＧＷ企画！番外編！

番外編

アルフォト「で？これなに？」

作者「何って？鍋だよ。」

アルフォト「え？この季節に？」

作者「Ｙｅｓ」

アルフォト「もう夏も近いこの季節に？」

作者「Ｙｅｓ！しゃぶしゃぶとおでんどっちが良い？」

アルフォト「おでんで。」

作者「はいよ～。つってもまぁ、そういうと思って、あらかじめ準備してたけどなぁ…」ニチャァ

アルフォト「なぜそこでゲスな笑み…」

作者「ま、実際はボクが後で食べたいだけだけどね。オーズ見たあとだし。ちょうど伊達さん出てきて直ぐのところだったしな～、エイサイヤミーのところね。」

アルフォト「誰も聞いてないよそんなこと……で、今からおでん食べるわけだけどさ。」

作者「ん？」

アルフォト「でかくね？この鍋。」

作者「業務用のおでん鍋だからね～夢だったんだよ、誰かとこの鍋でおでんを食べるの。」

アルフォト「夢を僕でかなえないで？そんでもって人数足りなくない？デカイよ？この鍋。」

作者「業務用ですから。……んじゃ君ん家に電話して人呼ぶか。」

アルフォト「えぇ……そこは『デッド・オア・デッド』の人たちとかじゃない？」

作者「それもそうね、なら以前出たリベン抜いて穴埋めで君ん家から呼ぼう！」

作者「まぁ、これで良いでしょ。さて、待つ間におでん食うか雑談

かどっちが良い？」
アルフォト「雑談で。」
作者「ヘイヘ～イ、じゃあ君の誕生秘話でも聞く？」
アルフォト「もう知ってるよ……アルフォートみて思い付いたんでしょ？」
作者「そ。それで今も描いててなかなか筆が進まない『矛盾した世界のつまらない話』の主人公がとんでもないイカれ野郎だから方向性変えようと思って、主に僕ての理性が主軸にキャラ作ったのよ。」
アルフォト「……なるほど、今度は主人公以外がそこそこ頭がぶっとんでる思考に変えたんだ。」
作者「いや？そこまで考えてなかった。正直やりたいこと、書きたいネタを書いてただけだし。」
アルフォト「そこは嘘でもハイって言おうよ…」
作者「ハハッ、言えねぇよ。どうせバレてんだから。てかさ、君……1話はしっかり自殺志願者してたよね。それからだんだん薄まっていったよね、自殺志願。」
アルフォト「もしかして1話のＵＡがダントツで多い理由って……」
作者「多分それだね。1話と2話じゃ一気に印象最近に至っては自殺志願してた君はどこに行ったの？って感じよね。」
アルフォト「う～ん、それは良いのか悪いのか……」
作者「テコ入れする？」
アルフォト「やめといた方が良いと思うよ……どうせ迷走するのがオチ。」
作者「じゃあ4月馬鹿版でそれらしいの書く？」
アルフォト「エイプリルフールはとっくの昔に過ぎたよ？」
作者「クソ！気づいた時には過ぎてたんだよクソが！」
アルフォト「それは君のせいだよ……てか乗っかる気満々だったんだ。」
作者「何でボクは前日に徹夜でＦＧＯなんてやってたんだよ！クソが！」

アルフォト「知らないよ……いや、何日か前から用意しとけばよかったんじゃ？」
作者「は？ＦＧＯ初めたばっかで結構ハマってどっぷり使ってたわ。」
アルフォト「え？じゃあ最近投稿遅いのって……」
作者「ＦＧＯ、デュエプレのランクマなどにどっぷり浸かってたからですね……」
アルフォト「うん、恐らく更新を待ってるであろうお気に入り登録者達に謝れ。」
ピンポーン
作者「あ、きたきた。」
アルフォト「あ、話変えた。」
スピカ「あ、ごめん。待った？」
作者「セリフが完全に彼氏のだね。」
アルフォト「まぁ、女性だけど僕たちの何倍も男らしいですからね…」
作者「今そういうこと言ったらジェンダー差別になるのかな？」
スピカ「え？え？何の話してるの？」
クラレ「多分難しい話ですよ？クラレも良く分かんないです。」
作者「良いんだよ。分かんなくて。分かんないウチが花だ。……多分。」
アルフォト「まぁ、あまり気づかない方がいい問題ではありますよね……」
クグロフ・フリッツ「なぜ…俺（私）が？」
アルフォト「（おい、この野郎。僕が気まずい人２トップ呼びやがった。）」
作者「さっさとコタツ入っておでん食べましょうよ！」
アルフォト「コタツ!?この季節に!?」
作者「おでんと言ったらコタツだろうが！いい加減にしろ！」
アルフォト「理不尽！シンプルに理不尽！」
スピカ「……あの、私たちのこと忘れてる？」

クラレ「そうみたいですね……クラレは少し悲しいです。でも、アル様が楽しそうだから複雑です。」
ククロフ「楽しそう……ハッ！そうか！あんな感じで絡めばいいのか！」
フリッツ「父さん、それはあまりおすすめしません……というかあれは楽しそうと言うよりバカ騒ぎでいるの方が近いです。」
アルフォト「それより、おでん食べましょうか。……何でこの季節におでんなのかはおいといて。」
作者「全然おけてねぇｗｗ」
アルフォト「あ、ここにちょうど良い鈍器（鎚）が……」
作者「やめて！死んじゃう！前回ハントに殺されたから勘弁して！」
アルフォト「……クラレ。コイツしばける？」
クラレ「ご命令なら！クラレはやれますよ？」
作者「ヒェッ！（（（ ；Д。））な、何か寒くなってきたなぁ～、お、おでんでも食べて温まろうかなぁ～で、おでんと言えば～？」
スピカ「ま、まさか!?アレをやるのか!?」
アルフォト・フリッツ「（なぜだろう……めちゃくちゃ不安だ……）」
、…
クラレ「アレって、何ですか？」
ククロフ「サァ？だが、楽しそうなことなのだろう。で？アレとは何なんだ？」
スピカ・作者「二人羽織！」
アルフォト・フリッツ「やっぱりダチョウか……」
クラレ「ダチョウ？鳥ですか？」
ククロフ「二人羽織というのをしながら片方が片方に熱々のおでんを食べさせるというネタだな。……私は食べるなら普通に食べたいがな。」
スピカ・作者「僕（私）も食べるなら普通に食べたい。」
アルフォト・フリッツ「（ならなんで言ったんだろう……）」
作者「それより、クラレちゃんなにから食べる？」

クラレ「しらたきいただきます！」
スピカ「じゃあ私はがんもどき。」
アルフォト「僕もがんもどきで……」
フリッツ「俺ははんぺんを貰う。」
クグロフ「なら私は大根を……」
作者「じゃ、食べながら雑談でもしようか。」
アルフォト「まだやるの？」
作者「ＹＥＳ。んで、まずはクラレの誕生秘話でも話す？」
クラレ「聞きたいです！」
アルフォト「やめときな、この人のことだから絶対僕を困らせたいとかそんなだから……」
作者「え～っとね、実はこれ書き始めたときロリも良いな（二次元限定）って思い始めた頃だったからロリ出したくなって、そしたら『あ、これロリコンネタ出きるじゃん！』って、思ってね。それで、実際にアルフォトを殺すことができないけど社会的に殺せるかもしれない存在って言うのをコンセプトに、僕の知ってるロリ……っていうか比較的に書きやすそうなロリキャラを選んだ。」
アルフォト「え？でもクラレさんってだいぶ最初と印象違うよね？」

スピカ「え!?そうなの!?」
アルフォト「う…うん、最初はホントに最初は言葉にどこかとげがあったようななかったような……」
作者「え？あぁ、それね、実はベースとしてたキャラがなかった状態で書いてたからね、途中から出てこなくなって付け加えた。」
フリッツ「ちなみに何のキャラなんだ？」
作者「艦これの電の口調に雷のテンションを加えた感じ。似てないやらイメージと違うやらは感想欄で聞き受けます。」
クラレ「……私ってアル様困らせる存在なんですね……（；ω；、）」
作者「おう、そうだｎ（殴

ぶべらっ！」
ドッシャァン！

アルフォト「エ!?い、いや、そっ、そんなに困ってないからね？クラレさん自身には。ね？ね？元気だして？」
作者「痛いじゃないか！なにするんだい！」
フリッツ「いや、今のはお前が悪いと思う。」
クグロフ「私もそう思う。」
スピカ「むしろ一発だけじゃ足りない案件だわ。」
作者「え？なに？何でみんなクラレにはめっちゃ優しいの？そして何で僕には冷たいの？」
スピカ「この作品唯一といっても過言でもない癒しよ、その存在とこの状態を作り出した元凶と扱いが同じと思う？」
作者「思わないです……ハイ。それより、気を取り直して次！スピカさん！」
スピカ「え？私？」
作者「理由はね……ネタ、場を乱す、めっちゃタフの三銃士揃った人材がほしくて…別に男性でもよかったんですけど、女性の方が面白そうと思い……」
スピカ「面白そう以外でキャラ作ること無さそうねアナタ……」
作者「え？そうだけど？」
フリッツ「たまにはどんなキャラ作ったら言いかとかの意見も聞いたらどうだ……？」
作者「一応友人にキャラ案聞いてますとも、スピカもクラレも2人で頭悩ませて作りましたよ……」
フリッツ「俺たちには特に無いのか……」
作者「それはこれから話すよ……まずはクグロフさんから。」
クグロフ「私か？」
作者「クグロフさんのコンセプトは『時々ろくでなしで主人公のまえでは不器用だけど良い父親。』って言うのがコンセプト。……ぶっちゃけるとクグロフ書く描写が少なすぎてあまり表現できてないよ

うな気がしなくもないけど、シカタナイヨネ！」
クグロフ「……なら出番増やしてくれ。」
作者「ん～、章終わりかはじめなら少し出せるかな～」
クグロフ「大丈夫か？その期間内に私の黒歴史とか暴露しないか？」
作者「サァ？どうだろう」ニチャァ
クグロフ「(((；゜Д゜)))ガクガクブルブル」
フリッツ「父さん、まだあったのか……？」
アルフォト「もう知りたくないよ……」
スピカ「え？この人なんかヤバイことしたの？」
クラレ「クラレも聞きたいです！」
フリッツ「…いや、知らない方がいいぞ？」
アルフォト「う、うん、父さんの名誉のために……」
作者「あぁ、実はね……」
～事情説明中～
スピカ「……ごめん、これは流石に……」
クラレ「……殴られても仕方ないと思いますよ…珍しくないとは関係ないとは聞きましたけど……理由が酷すぎると思います。」
クグロフ「ち、違う……違うんだ…そんな、そんなつもりじゃ……」
作者「さて、気を取り直して最後！フリッツくん！」
フリッツ「もう俺も嫌な予感が……」
作者「君のコンセプトは『不器用で天然な兄』それだけ。……まぁ、天然の意味よく分かんないから偏見だけだけど。」
アルフォト「んな適当な……」
フリッツ「お、俺は…不器用だったのか…？」バタン！
スピカ「何でそんな世界の終わりみたいな雰囲気出してんのよ……別に良いじゃない。」
クラレ「これでうずくまって震えている人２人目ですね！何かあったんですかぁ～？」
アルフォト「見たくなかったなぁ、この２人のこういう姿。」
作者「さて、次は夏に夏休み記念の番外編でも書くか。」

アルフォト「てか、おでん全然食べてないんですけど。」
スピカ「確かに、最初にもらった具材以外食べてないわよね。」
クラレ「美味しかったのでもっと食べたいです！」
作者「おう！いっぱいあるからどんどん食べてくれ！おら！そこのうずくまってる2人も！」
クグロフ「あ、あぁ」
フリッツ「わかった……」
この後おでんを全員でおいしくいただきました。

そこそこ大事な事が決まったので番外編！

作者「ここで！そこそこ大事な発表！」
武器屋「何でワタシたちがいるの？」
受付の人「……あの、武器屋さんは人気でしたから良いんですけど。なぜ私が？」
アルフォト「……あの、何で僕が？」
作者「武器屋さん、受付さんは名前が決まったから。そしてアルフォト君は主人公だから。」
受付の人「……それ後書きか本編でよくありません？」
武器屋「そうネェ～、わざわざ番外編やる必要ある？」
作者「……ルーレットで番外編でやるって出てきた。もちろん、それだけじゃ味気ないから雑談するよ。」
受付の人「することあります？」
作者「君の話で稼ぐさ！ハイ！まずは武器屋さんの名前から！」
武器屋「最初ワタシからなの？」
作者「Ｙｅｓ！理由は何となく！武器屋さんの名前はジョリー・エクトビエトに決まりました！」
武器屋→ジョリー「わりと可愛い名前ね。」
作者「そうか？……そうかも！ハイ次受付の人！」
受付の人「適当にはしないで下さいね？」
作者「ＨＡＨＡＨＡ！安心したまえ！ネーミングセンスに自信がない友人と共に考えた！もちろん、僕もネーミングセンスに自信がない！」
受付の人「……不安しかないです。」
作者「君の名前はナイーヴァ・グルーミィだ！」
受付の人→ナイーヴァ「あ、思ったより良い。」
作者「貴様！僕と友人に失礼だろうが！」
アルフォト「落ち着いて……それより、残り雑談ですけどなに話すんです？」
作者「そうだなぁ…やっぱり受付の人……もといナイーヴァさんの

話？」
ナイーヴァ「まぁ、それが無難ですね…」
作者「ナイーヴァさんのコンセプトは自分に正直でヒャッハーしてるけどいい大人。ベースは僕のかなりヒャッハーしてる時期かな？」
アルフォト「かなりヒャッハーって日本語おかしくないですか？」
作者「そんなことは良いんだよ。まぁ、最初は一発キャラの予定だったけど、出しやすいから出してたって感じなんだよね。で、正直アンケートも答えたとしても武器屋さんだけかなって思ってたよ。名前付けるのは。」
ナイーヴァ「まぁ、受付ですからね。ギルドが舞台の話なら出しやすいですね。」
作者「ハッキリ言うと君のキャラ忘れてた。てか、アルフォトくんと二章で出てきたキャラ以外は全部忘れてるといっても過言ではない。……現にリベンくんは何回か見直したよ。」
アルフォト「それでリベンさんがツッコミ要因に一時期回ってたんですか？」
作者「いや？単純に面白そうだからだよ？」
ジョリー「面白そうがここまで多用される小説ってどうなのかしら……」
ナイーヴァ「それは今さらですよ……」
作者「いやあんたに言われたくねぇわ」
ナイーヴァ「そりゃそうですね！」
作者・ナイーヴァ「ＨＡＨＡＨＡ！」
アルフォト「何でいきなり肩組み合うほど仲良くなってるんですか……」
作者「フッ、よく言うだろう？類は友を呼ぶと。」
ナイーヴァ「そうですよ！」
ジョリー「アルフォトちゃん、そういう事みたいだから、この件には触れない方が良いわよ？これは先人からの知恵ね♡」
アルフォト「あ、ハイ。」
作者「あ～、話すことなくなったなぁ…」

アルフォト「やっぱり僕じゃなくて違う人読んだ方が……」
作者「それもそうね。」

カイム「え？何で俺？あんな訳の分からない過去編で殺された俺？よりによって。」
作者「いやぁ、パッと出てきたのが君なんだよねぇ……」
アルフォト「いや、それでも人選あるでしょ。絶対過去編めんどくさくて見てない人多いでしょ。」
作者「それもそうだね……特に話すこともないし。よし！帰って良いよ！」
カイム「扱いが酷い！事実だけど！事実だけども！」
ジョリー「同情するわ……」
ナイーヴァ「えぇ、ホントに……」

作者「気を取り直してｔａｋｅ２！」
アルフォト「……。」
ジョリー「……。」
ナイーヴァ「……。」
作者「なに？その間」
アルフォト「いや、もうこの際このまま終わらせたら……「嫌だ！」最後まで言わせてよ！」
作者「もう良いや、最終手段出そ。」

ハント「何故俺が？」
作者「何となくだよ、オッサン。」
ハント「ミンチにしてほしいのか？」
作者「嫌です！」
アルフォト「……この人最近優遇されてない？」
ジョリー「そうねぇ、なんでかしら？」
トルテ「年齢ネタを気に入ったんだろ。それくらいしか考えられんな。」

ナイーヴァ「いきなり現れないで下さいよ、びっくりしますから…」
作者「それでは！第２回！質問コーナー！」
アルフォト「突然すぎません？」
作者「え～、では早速ナイーヴァさんについて質問！『年収はいくら？』」
ナイーヴァ「ワタシは大体５００万ですね。」
作者「おけ！次いこう！トルテくんに質問！『家族からの印象は？』」
トルテ「う～ん、これはなんとも答えにくいなぁ～……そもそも家族とあまり話したことがないし。そもそも父親と血が繋がって無いし。」
アルフォト「あ、そういえば……」
ジョ・ナ・ハ「「マジ？」」
トルテ「あぁ、オレは母親の連れ子でな。今の父親が離婚したばかりの母親に惚れて、結婚の条件として俺を家族として受け入れるというのが入っていたからオレも一緒に住まわせてもらっているに過ぎない、その条件がなかったらオレの事ほっぽり投げてたんじゃないか？」
作者「う、うん！衝撃の事実が発覚したけど次いこう！次はハントに質問！『どうして突然異能に目覚めたんですか？』」
ハント「……いや、これは俺も気付いたら使えてたとしか…」
作者「え～、これに関しては僕が答えます。異能ってそもそも身体機能みたいな感じなんですよね。だから大体生まれつき持ってるかアルフォトみたいに気付いたら目覚めてた、リベンみたいにピンチになって目覚めることもありますし、ハントみたいに突然目覚めることもあります。素質とかは特にありませんね。何かありません？特に練習してないけど気付いたら出来るようになった事。そんな感じです。強い感情が原因で目覚めるとかもありますけどね。まぁ、どちらにせよ結局目覚めるかどうかは運次第って感じですね。」
ハント「つまり俺は運が良かったと？」
作者「そゆこと。」

ナイーヴァ「世の中いろんな事があるんですネェ～」
作者「では、次の質問！『アルフォトのグレイロード家は何代目？』」
アルフォト「あ～、確か８代目だった気がする……で、僕たちの世代が９代目。」
ジョリー「あら、そこそこ続いてるわね。」
作者「ま、この話は置いといて次！ジョリーさんに質問！『武器の輸入先は？』」
ジョリー「大体はオークションね。といっても、買うのはホントにたまにだけどね。輸入先はオークション経営しているところにでも聞いてみたら？ワタシは面白そうな武器を買ってるだけだから。」
作者「ハイ！続いての質問！『アルフォトくんの家族に対する印象は？』」
アルフォト「急にハイペースになったけど平気？」
ナイーヴァ「後でまた同じ目に合わないようにしてくださいね？」
作者「それよりさあさあ！質問答えて！とりあえず上から順にクグロフから！」
アルフォト「父さんは苦手かな…後フリッツ兄さんも……シュゼット兄さんは…うん、なんと言うか…嫌いではないけどたまにイラッとする時があるかな…」
作者「あ～、オタクがパリピに謎の抵抗を覚えてるのと同じ感じ？」
アルフォト「??まぁ、良いか。続けるよ？」
ジョリー「良いわ、続けて？」
ナイーヴァ「作者の意味分からない例えは忘れてください。」
作者「何か当たり酷くない？毎度ながら。」
ハント「当然だな。」
作者「ア？なんだよオッサン。」
ハント「そうか、覚悟しとけ？」
作者「え？ちょまｔ」
作者「ギャァァァァァ!!」
ジョリー「続けて？」
アルフォト「あ、ハイ。フィナンシェさんは…」

ナイーヴァ「え？何でフィナンシェさんだけさん付けなんですか？」
アルフォト「何か変だから本人にそう呼べって。」
ジョリー「あぁ、なるほどね……」
ナイーヴァ「まぁ、続けて下さい。」
アルフォト「まぁ、苦手ですね。マルクくんはまぁ、仲が良いとは思います。シャランさんは…ハイ、特に話したこと無いんでなんとも…」
ジョリー「なるほどねぇ……そろそろかしら？」
作者「ハァ、ハァ、お、オレ！生きてるよ！」
ナイーヴァ「あ、帰ってきた。」
ハント「生きてるのか。まぁ良い。次はないぞ？」
ジョリー「ホラ、アナタが始めたのよ？アナタが締めなさい。」
作者「さて、今回はありがとうございした！番外編ばかり更新してすみません！本編もなるべく早く出します！以上！」

番外編５　前編

番外編５　前編

アル「……あのさぁ、困ったら番外編ってムーブ止めない？番外編書いたからってネタが降ってくるわけないし

、て言うか書き溜めしときなよ。」

作者「たわけ！雑種がなに言ってる！書き溜めしたところで溜めてる間に話が出てこんわ！ストック作るにしても何日かかるのか分からんのだぞ!?」

アル「…て言うか何で僕が常連になってんの？番外編始めた頃は意図的に避けてたじゃん。」

作者「書きやすいし、何より主人公だから。それよりなんか僕に当たり強くない？」

アル「じゃあ君図体でかいんだね。」

作者「当たり判定な、それ。……まさかツッコミに回るとか思わなかった。まぁ良いや。さっそくコーナーに移ろう。」

アル「え？」

アル「もうなれたなぁ～、このご都合主義。」

作者「『第三回、質問コーナー！』このコーナーは今までと違い！アンケートの五人の中から４人が質問に答えて貰ウゾ。残り一人は司会のジョリーさんです！理由は特に質問がないから！」

ジョリー「アラ？そんな理由？酷いわネェ」

作者「だってだってあくまでもインパクトのあるぽっと出キャラのつもりだし……そんなことより、この質問コーナーは知っての通り私の友人からもらった質問に答えてます。司会は私作者と、主人公のアルフォトくん。そしてゲストのジョリーさんでぇ～す！」

アル「ど、どうもぉ～」

ジョリー「もうなれ始めてきたわね、コレ……」

作者「そして！質問に答えて貰うのは！」

アル（未来）「久々の登場！みんなのアイドル！ちょっと未来のアル

フォトくんだよ～」
リベン「神嫌いの聖職者とは僕のこと！リベン・ソロモン！」
トルテ「俺こそは白黒いる魔弾の名手の黒い方！音に聞こえたトルテ・グレイロードだ！」
ハント「なんだこのイロモノ集団は……そして白い方って全然聞き覚えないんだが？魔弾の名手も初耳だぞ？」
トルテ「当然だ。今作った。」
作者「何か闇金木の見た目で言われるとイメージ壊れるなぁ～…そんでもってたってる時間はちょっとどころじゃないだろお前。しかももうくんって言う年代じゃないし。」
アル（未来）「アッハハ～、そりゃそうだ。ちょっとふざけただけじゃないか～固いなぁ～」
作者「さて、そこで張っちゃけてるジジィはおいていて……さっそく質問に移ろう！まずは…アルフォト（未来）くんに質問！『最後の時のなぜいきなり消えたんですか？』」
アル（未来）「あ～、それ聞いちゃう？あの終わりかた結構気にしてたのになぁ…理由は知らね。」
アル「知らないの!?」
アル（未来）「そりゃ知ってたら対抗策考えるでしょ、知らないからこそ取り乱したんだし。」
作者「それについては僕から。」
ハント「結局それかよ。」
作者「え～、消えた理由ですが、単純にここにいるアルフォト（未来）になる、もしくは近い存在になる確率が上がった、もしくは下がったからです。」
アル「ハッキリしないなぁ～」
アル（未来）「君作者でしょ？ちゃんと考えておきなよ。」
作者「辛辣！……詳しく言うと、未来っていうのは常に枝分かれしてて、それはそのときになるまで分からない…って言う感じにしてるんだよね。この作品では」
トルテ「なるほど、で？」

作者「で、逆にいえば未来が枝分かれしてるなら過去も枝分かれしてるのではと思った訳ですよ。」
リベン「てことは、一種のパラレルワールド、もしくは……」
ハント「ｉｆの世界ってことか？」
リベン「さらっと人のセリフ取らないでくれたまえよ。」
作者「そ、そしてそれぞれの世界を座標として並べたとすると当然それぞれの世界同士の距離がバラバラになる訳だ。」
ジョリー「まぁ、座標みたいにするとどうしてもそうなるわよねぇ……」
作者「で、アルフォト（未来）くんが頻繁に時空に穴開けまくるから座標で程よい距離にある所に行ったってこと。」
アル「つまり原因は未来の僕だと？」
作者「Ｙｅｓ！」
トルテ「時空に穴って……あぁ、あの黒い穴か……」
リベン「教会が聞いたら発狂しそうだなぁ……（ニヤァ」
ハント「発狂してるとこ想像して笑うとかどれだけ教会が嫌いなんだ……」
作者「話戻すけど、要は程よい位置から外れたんだよね、今までギリッギリ双子で検問すり抜けられたけど、自分になる可能性が低くなればほどよい太さの線たどって存在出来てたのが切れて存在の証明が出来なくなるし、可能性が高くなったらなんでお前いんの？って世界が判断してはじき出されるし。……そんな感じ。ガバガバなのは認める。ただこれが精一杯だ。許せ。」
アル「アッハイ」
ジョリー「ま、さっさと次の質問に行きましょ♪えーっと、次は……何々、『リベンとトルテは発射（ブラスト）使って腰が死んだのにアルフォトはなんで平気なの？』ですって。」
作者「なんでさらっとしきってンの？……まぁ良いや。理由はね、ポーションの力。」
リベン「僕も本編でポーションが使えたらなぁ……」
トルテ「仕方ない、医者に言われたらな…」

～回想中～
リベン・トルテ「ポーション飲んで良いですか？」
医者「最悪腰の骨が歪むからダメです。」
リベン・トルテ「（；ω；）」
～回想終わり～
アル「いや、短っ！」
トルテ「短いって言われても……なぁ？」
リベン「うん、すぐ切られた。そもそもアルフォト君がポーションくれって言ったときにくれなかったのが悪いじゃないか！」
アル「いや、僕もポーションだけは渡すなって釘刺されちゃって……」
リベン「クソ！あんのクソ医者！」
医者「何か言いましたか？」
リベン・トルテ「ウェ!?」
アル（未来）「なんで医者いるの？作者、どゆこと？」
作者「……ヨシ！次行こう！」
アル（未来）「話の変え方露骨だなぁ…」
作者「続いては、トルテくんに質問！え～っとね『グレイロード家全体の印象を教えてください』だって。」
トルテ「ぶっちゃけて言うと残念な人が多いと思った。」
リベン「ぶっちゃけたね～……」
アル（未来）「否定しきれないんだよなぁ……。」
アル「ハハ……いつもって訳ではないんですけど……まぁ、確かに最近は残念な時が多いですね……。」
作者「まぁ、さっさと次の質問にイクゾ～！次はハントに質問！『なんで目覚めたばかりの能力を十分に使うことことできたんですか？』」
ハント「知らん。使えたとしか言いようがない。なら逆に聞くが、お前はいつ腕の動かしかたを覚えたと聞かれて答えられるか？それと同じだ。」
トルテ「何かフワッとしてるな……気持ちは分かるが。」

ジョリー「まぁまぁ、良いじゃない、フワッとしたことに関しての議論は。そろそろ次いくわよ～、アラ？次が最後ね？え～っと、『ハントとアルフォトが再開するのはいつか』……そういえばまだ本編では再開してなかったわね、番外編の常連だから気づかなかったわ……」

ハント・アル「作者に聞（け）いて？」

作者「何勝手に進めてんだい！まぁ、それは良いとして……えっとね、未定。」

ハント・アル「だろう（な）ね。」

作者「僕に将来のビジョンなんて聞くな！」

ハント「まぁ、その結果が俺だからな。」

アル「あぁ……それに僕も自殺志願がいつの間にか頭の片隅にある程度になっちゃいましたし……」

作者「最初の作品の主人公がイカれてたからね～今度は路線かえてわりと常識人な主人公が周りに振り回される路線に三話目くらいから変えた。それまでは思い付いたのを殴り書きしてた。……なんならもうちょっと真剣に自殺未遂の頻度増やす？検討するよ？」

アル「わけわかんなくなるからやめて下さい。」

ジョリー「ワタシもそれが言いと思うわ。」

リベン「僕も」

トルテ「当然オレもだ。」

アル（未来）「僕もそう思う。」

作者「そこまで？まぁ良いや。今回はこれで終了！続きは後編で！」

番外編５　後編

番外編５　後編

作者「夏だぁ！ってことで海行くぞ!!」

アル「急すぎない!?」

作者「うるせぇ！とにかくもう暦じゃとっくに夏なんだよ！そして夏といえば海だろ。」

ジョリー「確かにそうネェ」

ハント「……このメンバーで行くのか？」

作者「当然だよ！」

リベン「いや……大丈夫？」

作者「大丈夫！」

トルテ「いまいち信用できないな……」

アル（未来）「僕もいるけど？」

リベン・トルテ・ハント「「なお不安だわ！」」

作者「まぁ、現インフレ環境トップだもんね君。……てかじゃなかったら退場させないよ。」

アル（未来）「???インフレトップがついてくと何が不安なんだい？寧ろ良いじゃないか。」

ジョリー「まぁ、そんなことはおいといて……行くんでしょ、海。さっさとしましょ？」

作者「あい～」

アル「まぁ、やることないですしね。」

リベン「そうだね」

トルテ「そうだな」

リベン・トルテ「「そうしよう！」」

ハント「なんだコイツら……（引き）」

アル（未来）「あの二人ってこんなイロモノコンビだったっけ？」

ジョリー「それはあなたにも言えるから実質イロモノトリオじゃないかしら？」

アル（未来）「そうか？……まあいいか。」

アル「暑いな～」
アル（未来）「そうだね～」
トルテ「ヒャッホォウ！海ダァ！泳ぐぞぉ！」
リベン「ちょっと、先に準備体操しないと！」
ハント「いや、それは良いんだがな？……なんでお前は３ＤＳやってるんだ？作者。」
作者「え？動きたくないからだよ。」
ジョリー「アラ？あなたから誘ったんじゃなかったかしら？ノリノリで。」
作者「……誘ったね。」
ジョリー「なら日陰でゲームはおかしくない？」
作者「……」サッ（目そらし）
ハント「おい、人誘ったならせめてお前も日陰を出ろ。そして間違ってもゲーム何かするな」ガシッ
作者「えぇ～？肩痛いな～、そんな強くつかまないで？ネ？ネ？」
ハント「却下だ。このまま日陰出るぞ」
作者「いやダァ！僕は泳ぎたくない！」
ハント「黙ってろ」ズルズルズル
作者「止めて！ひきずらないで！砂がジャリジャリして地味に痛い！」
ハント「よし、分かった。俺は足持つからジョリーは上半身持ってくれ。」
ジョリー「は～い」
作者「え!?ちょ!?そういう問題じゃっ!?」
ハント・ジョリー「「じっとして（なさい）ろ？」」
作者「アアアアアアアアアアアアアア！」
アル「何か悲痛な叫びが聞こえたんですけど？」
アル（未来）「気のせいじゃない？それよりも僕たちもそろそろ行こう。……連行される前に。」

アル「アッハイ」
トルテ「お、全員来たな。」
リベン「なら一緒に体操する？」
アル（未来）「良いよ、キレッキレのラジオ体操見せてやる」
アル「ラジオ体操にキレって必要有ります？」
ハント「知らん。」
ジョリー「まぁ、でもちょっと見てみたいわ。」
作者「じゃあ僕は日陰で……」
ガシッ
アル（未来）・ハント「「逃がすと思う（うか）？」」
作者「アッハイ」
アル「（なんで未来の僕も作者引き留めるのに参加してるんだろう？）」
アル（未来）「（面白いからさ！そしてファミチキ食べたい！）」
アル「（コイツ、直接脳内に⁉？そしてなんで今ファミチキ⁉）」
～体操した後～
ジョリー「ホントにキレッキレだったわね……」
アル「思ったよりシュールでした…」
作者「なんで出来るんだよ…アレ意外と難しいのに…」
リベン「あ、やろうとしたときあったのね？」
作者「もちろんさ～」
トルテ「ということで……泳ぐぞ」
作者「え」
ハント「そうだな」
アル「あ、僕はカナヅチなんでパスで」
アル（未来）「ハッハッハ！僕もだ！」
作者「僕も……てか泳ぎ方分からない。分からないから中学の頃意地でも水泳の授業サボってたし……怖かったなぁ、あのときの体育の先生。だんだん言葉に怒りを感じるようになってたから、心のなかで涙目になりながらサボってた。それ以来も体育の選択で水泳は意図的に避けてたし。」

リベン「僕も泳げないって訳じゃないんだけど、あんまり得意じゃないな。そしてそんな思いするならもう参加しろ授業に」
ジョリー「カナヅチ多いわね……そして作者のわりとどうでも良い過去は必要かしら？」
作者「当たり強くない？ジョリーくん？……そんなことよりボツネタ紹介しようぜ！」
トルテ「あぁ、そういえばそんな予定だったな。」
リベン「なんでじゃあ海に来たのかって話だけどね。」
作者「は？夏なら海だろ？海にろくな思い出ないけど夏なら海だろ？溺れたりしたけどやっぱ海だろ？」
ハント「お前、コレが現実ならどうしてた？」
作者「家でゲームしたいからパスするよ、最近色違い厳選がはかどってきたから。」
アル（未来）「さっきからたいして興味ない作者の情報垂れ流しなんだけど」
作者「そんなことよりまずはこの作品をを進めるにいたってボツにした設定、ネタなどを紹介するぞ！」
リベン「もはやそのボツ集もいるのかすらわからないんだけど…」
作者「何、不評なら金輪際やらないさ。そしてまずはボツにした設定から…実は最初デモンギアって言うなまじファイズギアのパクリ的な物出そうとしたんだよね……」
ジョリー「アナタ、なんてものを作ろうとしていたの……？」
作者「でもデモンギアを出すに当たる布石は撒いてあとは書くだけだ！ってときに気付いた。……これ、無理じゃない？って」
アル「逆にそれまでなんでできると思ったんですか？」
作者「今はその布石を回収するか放置するか悩んでます。」
ハント「もう放置してくれ……お願いだ…」
アル（未来）「おお……！さすが作者の気分で大分立ち位置が困って動かしにくい人が言うと重みが違うな！」
作者「ちなみに言うと、ここにいるジョリー以外は最低３つはボツネタ・設定あるよ？」

トルテ「だろうな。」
作者「と、言うことで作品のボツ案件はもうないからいいとして、次は個人のボツネタ・設定を紹介するよ！最初はアルフォト！」
アル「なんで!?そこは他の人でしょ!?」
作者「いやぁ、主人公ってことでお手本見せてくださいよ。」
アル「いや僕が言うわけじゃないからお手本って言ってもね……」
作者「君のボツ設定はね、最初はもうちょっと主人公っぽくしたかった。」
アル（未来）「というと？」
作者「つまり、良くも悪くもまっすぐで融通の効かないやつにしようと思ってさ。」
リベン「めんどくさそうなやつだなぁ…」
トルテ「今もわりとめんどいけどな」
アル「そうなんですか……？」
ジョリー・ハント「ワタシ（俺）はあんまり知らないからなんとも」
作者「まぁ、それは置いといて……これはボツとか関係無く…最近この小説見返して思ったけどアルフォトくん、君丸くなったね……ちょっとデンジャラスになったけど」
アル「デンジャラスとは？」
作者「危険な、危ない、有害な、重大な等。」
ハント「誰ががグってこいと言った」
作者「私だ」（。∀。）ドヤァ
リベン「何かちょっとイラッときた」
トルテ「オレも」
作者「とにかく、アルフォトはこれで終わりね……次はリベンくん。君はね……ほんとはもう少し冷酷というか冷めてる奴にする予定だった、ついでに言うとアルフォトとバトらせるつもりだった。」
リベン「なぜに？」
作者「いや、何かうまく書けなくて今の性格に直して、だけど異能だけはだいぶ前から決まっててさついでにバトらせるのも直前までその予定だったのよ……途中で思ったんだよね、これ主人公逃げれる

？って。絶対捕まるよね？って。」
アル（未来）「勝てない前提なんだね。」
作者「当たり前だバカ。君ならともかく今のアルフォトくんがリベンに勝てるわけ無いでしょう。」
アル（未来）「それこそ逃げるだけなら『発射（ブラスト）』使えば良くない？」
作者「当時『発射（ブラスト）』の案出てなかったんだよね……それ思い付いたの『発射（ブラスト）』初登場する三週間くらい前だし。」
ジョリー「これ聞いてるとホントに作者が思い付きで描いてるって分かるわね……」
作者「でも良い案だろ？『発射（ブラスト）』からの人間大砲。強そうだし誰も予想しないって。」
トルテ・リベン「「そのお陰でオレ（僕）は腰イッてんだよ！」」
作者「ま、それも良いとして……次はエピソードだけど……これは没と言うよりミスだねただの。過去編もう少し内容しっかりしたかった……」
アル「さんざん迷ってたのを深夜テンションで書き上げてそれをやけくそ気味に送ったらそらそうなるでしょ……」
作者「……ハイ……次行きましょう……」
ジョリー「さっきと比べて気持ち悪いくらいにテンション低いわね？あげましょ？余計に辛くなるわよ？」
作者「ジョリー……お前……」
ジョリー「良いのよ、困ったときはお互い様でしょ？」
作者「ジョリー…お前ってやつは！」
ガシッ！
トルテ「なんだそのいつ育まれたか分からない謎の友情……」
作者・ジョリー「「ノリ」」
ハント「お前ら実は仲いいだろ。」
作者「さ～て！続いては！作者のノリで作った偶然の産物！ハント、貴様ダァ！」
アル（未来）「待ってました！」
リベン「撮影準備完了しました！」

トルテ「照明もＯＫです！」
ジョリー「スタァァト！」カンッ！
ハント「なぜ撮影風なんだ？…雑だし。……そして何かジョリーからいつもからは信じられないくらいの野太い声が聞こえたんだが…？」
ジョリー「カァァァァット！ちょっと、ハントちゃん!?私語はダメじゃない!?」
ハント「あ、スマン…（オレはなんで謝ってるんだ？）」
アル「（気にしない方がいいですよ…）」
ハント「（コイツ、直接脳内に!?？）」
作者「ま、キミの没設定はみんなご存じハントくんは噛ませ犬の予定だったってことね。気になる人は五話～七話まで見てみよう！アルフォトくんが思ったより印象変わっててビックリするから！」
アル「いや、そんなには……いや、結構変わってたわ。」
作者「前は話してるときは丁寧語で思考は丁寧語ほぼなかったもんね。ま、そんなことより話戻すとね、ホントは一回目にアルフォトくんが倒して金輪際出てこない予定だったのよ。」
リベン「あ、出てこない方の噛ませ犬ね。」
作者「でもね、もう一人の僕が言ったのよ…『このまま綺麗？に主人公勝たせて良いのか？お前が見たいのは主人公が苦しむ姿じゃないのか？』と。」
トルテ「うわ、最低だ。」
作者「それで、復活させて異能つけてみたらさぁ～、動かしにくいし戦闘描写が面倒なキャラに生まれ変わりやがって！ふざけんな！」
ハアルント「それは俺の意思じゃないんだが？」
作者「次に没ネタね、それはね、逃げるんじゃなくていっそのこと覚醒指せたあとにリベン出てきて一騎討ちで相討ちにしようとか考えてた。」
リベン「……」
ハント「……」
全員「「「「「……は？」」」」」それは正解。だったのか？

作者「な？理由は分かるだろ？僕でもそれは無理やり過ぎるなと思ったからだよ。」
アル（未来）「あぁ、うん、それは正解。寧ろ大正解。」
作者「だろ？」
アル「そこドヤるところじゃないでしょ…」
作者「まぁ、さて、急ぎ足で次行くぞ！次はトルテ！トルテの没設定はみんなご存じ海馬みたいにするつもりだってこと、でも結局止めたんだよね、だってそうするとなんか違うって僕の勘が言ってたから。」
トルテ「それは正解だったのか？」
作者「僕的には正解だよ。カッコよく（作者目線）登場してヘタレるって流れが出来たから。そのせいで戦闘の緊張感というか真面目感が一気に伝わらなくなったけどw」
ジョリー「元々なかった気がするけど？」
作者「ハハッ！違いない！まぁ、それはそれとして！他の没設定はねぇ…実は銃のところはクロスボウのつもりだったんだよね。」
アル「あんまり変わらない気がしますけどね。」
作者「ばか！クロスボウは猟師っぽいけど暗殺者感だしたいから銃にしたんだよ！分からんのか!?」
アル「アッハイ、スミマセン」
作者「さて、次はボツネタだけど…無い！よって次だ！」
トルテ「ないのか!?」
作者「君は書きやすいからキミが主要人物の話は比較的早く終わって没が少ないんだ！しかもキミに関するボツは1個もない！よって次はアルフォト（未来）！キミの没設定は扱う武器だ！キミの元々の武器は銃と斧と剣を足して三で割った武器だ！」
アル（未来）「ヤバイな…ここまで説明聞いてもパッと出てこない武器は始めてだ…」
作者「ボツにしたい理由はシンプルにこんな武器扱える奴はマジで変態じゃない？ってなって。で、あんな感じに武器をどこからでも時空に穴開けて出せるように変更したの。『王の財宝（ゲートオブバビロン）』に触発されてな

いと言えば嘘になるけど…」
アル（未来）「まさかのパクリ？」
作者「パクリじゃない！オマージュだ！もしくはリスペクトと言ってくれ！そんなことよりボツネタだ！キミ関連のボツネタはね……今のところダントツで多い。まぁ、二つ位紹介しますか……一つ目はアサートナスデスゲームの回だね。この回はまずやり投げなんてしてない。ひたすら斬るって予定だった。それこそ斬撃飛ばしていっそうとかしても良いかなとか考えてた……でもさ、かんがえた。それよりは槍投げしたほうが面白くね？と。よって変更。」
アル「ひどい理由だ……」
作者「二つ目は雑魚（主人公より強い）を全部倒してアリュシナが出てくる回で実はアサートナスデスゲームの進化版出してついでのようにラピュタ出す予定だったんだよね。」
リベン「なにしてんのぉ……」
作者「当然止めた。……展開詰まったから。」
ジョリー「デショウネェ～、あなた、序盤にネタに走りすぎると後半展開詰まりやつくなる謎のジンクスあるから～」
作者「まぁ、ざっとこんな感じかな……ってことで諸君！また今度～次回から本編は三章に向かいマ～す！」
アル（未来）「なお、いつ投稿するかは未定らしい。」
作者「余計なこと言うな！…よし！最後は全員でだ。」
全員「「「「「「せ～の！それでは皆さん、また来週～」」」」」」
ハント「このシリーズ毎週やるのか？」
作者「……ムリ…」

正月記念　番外編６

番外編６
アル「…もう正月か～」
こたつに入り、紅白を見てるときに唐突に思った。
ドガァン！
アル「ファッ!?」
物音がしたので、急いで音がする方向に向かった。

サンタの格好をした作者が炭だらけでいた……
アル「……何やってんの？」
作者「…いや、もうクリスマスだし…」
アル「季節感イカれた？もう正月だよ？」
作者「マジで!?クソッ！クリスマス当日に急いで衣装用意したのが間違いだったのか……ッ！」
アル「ちなみにどこで用意したの？」
作者「○ｍａｚｏｎ」
アル「間に合う分けないでしょ!?バカなの!?……それより、何で炭だらけなんですか……アァ、良いや。大体分かりました。」
作者「いや、クリスマスと言えばサンタ、サンタと言えば煙突から不法侵入だろ！」
アル「それは言ってはいけないよ……」
作者「……着替えよ」
シュッ！
アル「うお!?なんか一瞬で着物になってる!?……ってあれ僕も!?何で!?」
作者「ご都合主義☆」
アル「知ってた…」
作者「……何しよっか…」
アル「決めてないの!?」

作者「もちろんさ～」
アル「えぇ……」
作者「てのは冗談、今回は愉快なゲストをお呼びしました～」
アル「は、はぁ……」
作者「今回読んだのは～、コチラ！ドロン！」
アル「ウワッ！なに!?何がどうなってんの!?」

そういうと、どこから出てきたかわからない煙に包まれ、そこから出てきたのは……

ドギツイ服装をして震えている父さんだった……

は？

クグロフ「……。」プルプル
アル「……父さん？何で？」
作者「ん？なにかおかしいところでもあった？」
アル「……何でフリフリのゴスロリ着て、さらにはプリ○ュアとかで出てきそうなステッキもってンの？」
作者「惜しい！魔法少女をイメージしました！」
アル「……何で？」
作者「いやぁ、分からん。もしかしたらハロウィン回作ろうとした名残かも」
アル「……おっさんの魔法少女ってドギツイだけじゃない？」
クグロフ「私もッ！そう思うッ！」
アル「めちゃくちゃ震えてるし……元に戻してあげよう？」
作者「おもしれぇじゃん、しばらくこうしようぜw」
アル「鬼かあんたは！」

作者「大丈夫だって、アイツＳＭプレイ大好きだし、しかも受けだし。」
アル「そんなこと聞いてないし関係ないでしょ！」
クグロフ「な、なぜそれを……ッ！」
アル「マジだったのかよ……」
作者「な？だからコイツだんだん気持ちよくなってきてるから。」
クグロフ「クッ……！否定できないッ！」
アル「そこは意地でも否定してッ!!アンタ仮にも当主だぞ……ッ！」
クグロフ「ッ！そうだったッ！危うくコイツのペースに飲まれるところだったッ！」
アル「（もうたぶん飲み込まれてると思うんだよなぁ……）」
作者「あ～、面白かった。さて、服装変えるか」
クグロフ「や、やったぞ！」
作者「はい、ドロン！」
アル「また!?ふつうに着替えればよくない!?」
どこからか煙が出てくる…そこにいたのは……

次の服装は……メイド服？
クグロフ「……ま、またかッ！」プルプル
作者「ブッフォ!!」
クグロフ「男のメイド服に何の需要があるのだァァァァ!!!ウワァァァァァ!!」
アル「父さんが壊れた！」
そりゃぁそうだよなぁ！
作者「あ～、楽しかった。ということで君、帰っていいよ？」パチン！
クグロフ「…は？」

作者「じゃあね～」（＾ｏ＾）／～～
ガコン！
クグロフ「……は？」
そう言うと、父さんの真下の床が開いて父さんは下に落ちておいった…どうなってンの？この家……。
＜フザケルナァァァァァ!!!
作者「ヒヤァッハッハッハァ！アァ、イイゼェ、いい響き声が聞こえる……ッ！」
アル「……アンタ悪魔みてぇだな……。」
作者「それほどでも～」
アル「褒めてない…ッ！」
作者「さぁ～て、次は誰で遊ぶか……アッ！アイツ呼ぼ。ドン！」
アル「毎回思うけどそれなに!?」
どこからか（以下略
ジョリィ「あら～、どうしたのぉ～？」
アル「」ヒュッ！
作者「どうしたの？」
アル「正気か!?あの人にやるのか!?」
ジョリィ「……アラ、なにかヤりたいことでもあるのかしらぁ～？」
作者「コイツには何が有効か分からん！まさにブラックボックス！だからこそ……やりがいがあるってもんだろ……ッ！ハイッ！ドッ（ヒュン！
あれぇ？」
作者がなにかをしようとしたとき、作者の真横にジョリィさんが投げたであろうナイフが掠った後があった。
ジョリィ「やっぱりなにか悪～いことを考えていたようねぇ……でも、ワタシ、これでもそこそこ強いのよ～？」
作者「あ、アァ……すっ、すみませッ！」
ジョリィ「逃げようったってそうは行かないわよ～、そうねぇ、悪い子には、お仕置きが必要よね？というわけで……抱かせろ……ッ！」

作者「う、ウワァァァァァ!!!!」パチン！
ガコン！
さっきのように、床が開いて落ちていくと思ったが……
ガシッ！
……まさか片腕でしがみつくとは……しかもめっちゃ安定してる！なんて筋肉してやがる……ッ！
ジョリィ「ん？アラァ～、ワタシに抱かれるのは嫌かシラ～？」
作者「…ッ！」コクコク
ジョリィ「ならそうねぇ……今後こういうことしないって誓う？」
作者「ちっ、誓います！」（ノ；＿＿）ノ
ジョリィ「なら今回は許すわ、ただもし次子のようなことがあったら……容赦しねぇぞ……コラ…」
作者「は、ハイッ！肝に命じておきます！」
パッ！
そう言うと、ジョリィさんはしがみついていた手を離し、下に落ちていった……
＜ジャアネ～

作者「…こ、怖かった……」
アル「僕も怖かったです……」
作者「……もうおとなしく雑煮食おうぜ」
アル「……そうだね、寒気がしたし……二つの意味で……」
作者「アッ、雑煮……作ってネェや……」
アル「アッ……あなた作れます？僕は無理です」
作者「僕も作ったことないんだよなぁ～適当に鶏肉と大根とニンジン切ってダシ作って煮れば良いんじゃね？」

～アルフォトキッチン～
注…今からやるのはその場で適当に考えて適当に書いたレシピで

す。真似はおすすめしませんし責任はとりません。
アル「ならのせないでくださいよ……てか何で僕の名前使ってるんですか!?」
作者「あ、俺の名前使う？〇〇〇（ピー）キッチンって」
アル「ダメでしょ!?」
作者「でしょ？許せ」
アル「……分かりましたよ……」
作者「あ、これ読んで」ピラ
アル「え～っと、まず、水に各種お好みの調味料を入れて……」
アル「その後お好みの具材を入れて……」
アル「しばらく煮て……」
～しばらく後～
グツグツ
アル「餅入れて……」
アル「またしばらく煮ると…」
～またしばらく後～
アル「完成～。」
アル「……って雑すぎるダロォォォ！なに!?雑煮と雑に煮るをかけたのか!?ちっとも面白くないし内容薄いよ！」
作者「いや……大真面目なんだけど……てかなんだよｗ雑煮と雑に煮るってｗおもしれぇこと言うなぁｗ」
アル「ぶっとばすぞ!?」
作者「あ～ｗ、ゴメンゴメン。ふざけすぎた……」
アル「しかもなにあの注意書き!?こんなレシピ真似できねぇし真似しようとも思わねぇわ！」
作者「逆に真似したらやべぇだろ……だからこそ書くのよ」
アル「話聞いてた!?…まぁ、もういいや。とにかくこれ食おう、せっかく作ったのに冷えたらもったいない……」
作者「餅食い終わったらそばかうどんいれようぜ」
アル「…そんなに食べれるかなぁ……」
作者「食べれるだろ……たぶん」

ノリと勢いで作った雑煮は意外と旨かった……

第一章：終るつもりが始まった。

1話　自殺しても死ねない。

1話

こんな人生クソだ……。さっさと退場しよう。グッバイ我が人生！

と、思って首吊ったんだけど……なんで生きとるん？え？おかしない？なんで生きとるん？首吊ってんのよ!?今も吊ってんのよ!?呼吸できないのよ!?なんで生きてんのー!?

…なんか自殺する気失せてきたなあー見られたら絵がシュールだし首吊セット片づけよ。の前にこのロープ外して……

ドシン!!

「痛ッ！」

クッソ、痛えな。まぁ、いいや。片づけよ。怒られても困るしな。

しゃあ！気を取り直していきまーす。次は手首斬ります。

ザシュッ！

「痛ッ！」

痛え。でもなんで血が出ねぇの？ッチ、どうしょうかなぁー。ポーションでもぶっかけるか、ちょうど消費期限ギリギリのがあったはず……。あったあった。これをぶっかけて……。普通にくっついたな……。あれ？まさか……死ねない能力でも手に入った？ハハハ、まぁさか、そんなことないよなぁ？落ち着け落ち着け。深呼吸だ深呼吸。

コンコン

考え事してるとノックされた。なんだ？

「ハイ、なんでしょう。」

「アルフォト様、朝食です。」

ああ、朝食か。そいやまだ食べてなかったな。

「分かりましたぁ。今行きます。」
僕は話しかけられたメイドさんに対して言った。そいや、このメイドさん名前何だったっけ？小さいときからずっといたけど全然名前覚えてないんだよな……。前に一回聞いたことあったんだけど……まいっか。飯食べよ、飯。自殺と考え事はそれからだ。

あ、やべっ。首吊セット片付けてなかった気がするわ。まぁいいや。見るやついねぇし。
「アル、お前最近元気か？」
最近やたら父さんが元気かって聞かれるな……なんて答えりゃいいの？これ。まさかこれで自殺しようとして2回連続失敗したので元気ですけど気分は良くないですって言えるほど肝座ってないぞ？僕は。
「まぁ、ボチボチだよ。父さん。……それより、他のみんなは？」
この家は確か父さんの子供が僕抜いて5人いたはずだ。僕抜くのはなんでだって？僕が不倫してできた子だから入れていいか微妙だからしか言いようがない。何自問自答してんだろ。馬鹿らしい。ちなみに従兄弟とか入れたら7人だね。当然僕抜いて
「他のみんなは仕事に行っている。お前もそろそろ家手伝うか冒険者やるか決めたらどうだ？」
家手伝うのやだなぁ、人の名前覚えるの苦手だから会食とかできないし。書類仕事も向いてない。
となると……残るは冒険者か、回復系得意だし、チーム入れてくれる人いるかなぁー。
「一応、冒険者になる予定です。」
「そうか、ならいい。」
てか、もう死ぬから関係ないんだよなぁ。仕事……ま、登録手続きくらいはしとくか……

「さて、ここらへんでいいんだっけ……あ、間違えた。」
結局飯食ったあとすぐギルド目指したわけだけど……

……ここ、どこ？
どないしよ、完全に道迷ったわぁ。
えーと、えぇーっと。
「あっ、すみません、道聞きたっ……」
ガン！
通行人に道を聞こうとしたら後頭部にかなり強い衝撃を感じた。

ここ、どこ？
なんか縛られてんだけど。しかも変な魔法陣の上で。
もしやこれ生け贄ってやつでは？ヤッホーい!!これで死ねる！
「我ら救世主の悪魔よ！この少年の魂を糧に、復活せよ！」
キィィィィン
「おぉ……！」（不特定多数）
「順調だ、このまま行けばな……。」
ピシッ‼
ん？なんだ？魔法陣が崩れて……え？崩れんの？
「な?!まずい!?みんな魔法陣から離れろぉ！」
「ガハァァァァァァ！」（不特定多数）
……え？何やってんの？この人たち。なんかバカらしくなってきた、帰ろ。

ええ、やっぱ道わかんねぇ。
人いねぇし。道聞けねぇし。
「おや？君はこんなところで何をしているんだい？」
「あっ、ハイなんでしょう。」
なんか神父の服装した人に声かけられた。見た目の年齢僕と同じくらいだなぁ。
「なんか困り事かい？」
「実は道に迷ってしまって……」
「あァ、なるほどどこ行きたいの？」
「……ここですけど……。」

「君凄いねぇ、こんな間違えかたしたやつ始めてみたよ。」
「よく言われます。ハイ」
「良いよ、ついてってあげるよ。」
「ありがとうございます。神父さん」
　そういうと、なんかすっげぇ嫌そうな顔された。なんかした？僕
「えっと……どうかしました？」
「嫌……、僕が神が嫌いなだけだよ。」
　ああ、それで……じゃあ神父やろめろや!!なんて言えないけど……。
「君今絶対なら神父辞めたらって思ったでしょ。」
「いや……その……」
　バレてたよ。
「いいよいいよ。気にしないでよ。よく言われることだ。もうなれた。」
「一応聞きますけど。なんで神嫌いなのに神父やってるんですか？」
「嫌いだからさ。」
「???」
「意味わかんないか。もうちょい簡単に説明すると、神を信仰してる聖職者、神を信じてないけど詐欺の手段として使う聖職者名乗ってるやつはいるけど、神嫌いな聖職者は聞いたことないよね。」
「まあ、そうですね。」
　そんなやつなかなかいないぞ。強制されてなくても嫌いなものに手を出すやつ。
「だったら、一人くらい神嫌いな聖職者がいてもいいかなって。それに……」
「それに？」
「いたほうが神不愉快にさせられるだろ。」
「……。」
　思ったより、てかかなり勝手な理由だったな。
「ほら、ついたよ。ここがギルドね。」
「ありがとうございます。えっと……」

「?……ああ、名前ね。僕の名前はリベン・ソロモン神嫌いな聖職者っていえばだいたい通じるよ。むしろ名前よりそっちのが有名。」
　でしょうねぇ!!絶対噂になるは!そんなバカみたいな話。
「じゃあね。君とはまた会いそうだ。そういえば、君の名前は?」
「アルフォト・グレイロードです。」
「君があの有名な汚点か」
　聞き飽きたその名前。もういいや。
「ハハ、ごめんよ。ついついね。」
「いえ、別に……もうなれました。」
　石投げられたり蹴られたり固め技かけられるよりはマシだ。
　あともの盗まれたりな。服やらなんやらガキの頃どんだけ盗まれたか。そいやあのガキ、僕の割と気に入ってた砂時計盗んで知らんぷりしてやがった。何なら友達の前でいいだろーって自慢してやがってぇ。明らかに僕のだからな!?見た瞬間わかったよ!?でもそれ追求するとえ?違うよ?何言ってんの?俺がお前のもの盗むわけ無いじゃ～んって友達ヅラしてきやがったからな!?それにみんっなそいつの味方するし。何、僕君たちになんかしたかぁ?苦手になりそうなことは下覚えあるけど嫌われるようなことはしてないからねぇ!?クソ!思い出したら腹立ってきた。あいつ一発ぶん殴ってから死のう。あいつ引っ越してどこにいるかわからんけど!でもぶん殴ってやる!一発くらいは許されるはずだ。だよな?神様よぉ。
「……あの、大丈夫?」
「ああ、すみません。」
「いや……別に……いいけど……」
　なんかさっきの殺気を感じ取ったのか微妙な表情してるなぁー。
「ああ、ごめんつい長話しちゃったね。じゃ、僕はここで。　」
「ありがとうございました。」
　……さて、行くか、ギルトにそんでその後死のう。
……今までさんざん嫌がらせしてきたやつできれば一発だけでもぶん殴ることができたらいいなぁー。

２話　やはり気が会わないやつと接するのはストレスがたまる。（リベンｓｉｄｅ）

２話

僕は神父になった。なるまで辛かったなぁー。まず教会に認められるまでがまずきつかった。言いたくもない言葉を頭おかしいやつらに猫かぶりながら言わなきゃなんなかったからなぁー。認められた後も救いと言う名の一種の洗脳受けるし。なんなの？ホントに。はあ、めんどくせぇなぁー。なんだっけ？えっと確かここら辺にある教会に反してるやつらの住みか見つけて悪魔召喚止めろ。だったっけ。……時と場合によっちゃ、その集団上手く使うか……

「えーッと、ここか。」

そこにはだいたい民家の大きさの古い小屋倉庫みたいなものがあった。

「あらら、誰やったの？これ。」

そこには割れた魔法陣と大量の人間の死体があった。

「うわ……ま、つまるところ生け贄の選択でも間違えたんだろう。」

結構信仰心高い聖職者選んじゃったとか。神は信仰心高いやつほど高い力分けてくれるからねぇー。僕？僕は神の力なんか借りなくても十分強いから大丈夫。

はあ、このこと報告して、さっさと帰ろ。

ん？なんか人がいんな。僕と同じくらいの歳の

珍しいな、こんなとこにいるなんて。

「おや？君はこんなところで何をしてるんだい？」

「あっ、ハイなんでしょう。」

いや、何をしてるのか聞いてるんだけども……

ま、このタイプは困り事聞いた方が早いな。一応これでも聖職者だ困り事くらいは聞こう。それに……なんかこの子オモシロイ気配がするし。
「なんか困り事かい？」
「実は道に迷ってしまって……」
「あァ、なるほどどこに行きたいの？」
そういって彼はポケットへしまっていた地図を出して指差してくれた。
「……ここですけど……」
ヤバい、どこから突っ込んでいいかわかんない。
何で真逆どころか全く接点のないところくんの？そもそも何で地図見ながら来なかったの？
こいつ逸材だ……
「君凄いねぇ、こんな間違えかたしたやつ始めてみたよ。」
僕なりに言葉を選んだつもりだよ？これは。
「よく言われます。ハイ」
「良いよ、ついてってあげるよ。」
この子また迷いそうで怖いから。
「ありがとうございます。神父さん」
うわぁ、やっぱ言われた。てか、僕こと知らないのかよ。赤い目と黒髪って珍しい組み合わせだぞ。
「えっと……どうかしました？」
「嫌……、僕が神が嫌いなだけだよ。」
あッ、この子絶対今神父やめろって思ったわ。もう視線でわかる。困惑度合いでわかるよ。僕レベルになるとね。
「君今絶対なら神父辞めたらって思ったでしょ。」
「いや……その……」
図星だなこの反応は。ま、だからどうと言うことはないけど。
「いいよいいよ。気にしないでよ。よく言われることだ。もうなれた。」
「一応聞きますけど。なんで神嫌いなのに神父やってるんですか？」

やっぱ聞かれるかその話題。ま、でもストレス解消になるかも知れないから話してもいいか。
「嫌いだからさ。」
「???」
だよねぇー、意味わかんねぇよなぁー。僕も意味わかんない。
「意味わかんないか。もうちょい簡単に説明すると、神を信仰してる聖職者、神を信じてないけど詐欺の手段として使う聖職者名乗ってるやつはいるけど、神嫌いな聖職者は聞いたことないよね。」
「まあ、そうですね」
ま、こんな間違え方するやつもかなり珍しいけど。
「だったら、一人くらい神嫌いな聖職者がいてもいいかなって。それに……」
「それに？」
「いたほうが神不愉快にさせられるだろ。」
これは心のそこからの本音。あいつを不愉快にさせるためなら思い付く限りのことをする。
「……。」
「ほら、ついたよ。ここがギルドね。」
そうこうしてるちについたな、ギルド。
「ありがとうございます。えっと……」
「？……ああ、名前ね。僕の名前はリベン・ソロモン神嫌いな聖職者っていえばだいたい通じるよ。むしろ名前よりそっちのが有名。」
あ、こいつ今そら絶対噂になるだろって思ってる感じの顔してる。なら反論ではないが言わせてもらおう。こんな間違え方してるやつも充分噂になると思う。
あ、そういえば名前聞いてなかった。聞いとくか。オモシロイことになりそうだし。
「じゃあね。君とはまた会いそうだ。そういえば、君の名前は？」
「アルフォト・グレイロードです。」
ああ、あの有名なグレイロード家の汚点か。そら世間あんまり知らなくても無理ないわ。あんまり外だしたくないから監禁されてるっ

て噂だし。この様子じゃガセだろうけど。それに近いのは間違いないか……現にここら辺じゃ結構有名な僕知らないみたいだし。
「君があの有名な汚点か」
その名前は聞き飽きたって顔してるな。そら聞き飽きるか、僕も神嫌いの聖職者って言われんのそろそろ聞き飽きて来たし。
おっと、それはそうと謝らないとな。彼のは僕のと違うし。
「ハハ、ごめんよ。ついついね。」
「いえ、別に……もうなれました。」
はは、聞き飽きるまで聞いたなら同時になれてくるからね。そういうのって。……なんか尋常じゃないような殺気感じたぞ。こわっ、
「……あの、大丈夫？」
この子も苦労してんだなぁ。
「ああ、すみません。」
ここでコメントしずらい回答しないで、それ言われたらもう僕ほぼ何も言えないからぁー。
「いや……別に……いいけど……」
このくらいのことしか言えなくなるからぁー。
「ああ、ごめんつい長話しちゃったね。じゃ、僕はここで。」
さっさと報告済ませよ。そんで寝よ。
「ありがとうございました。」
……さて、行くか、あのクソ教会の人一人くらいはぶん殴れないかなぁー。ま、そんなことがノーリスクでできたらとっくにやってるんだけどな。

「では、リベンよ、報告を。」
そう言われたので僕は目の前のかつて僕の教え（洗脳）を担当したクソジジイに報告する。バレたらクビだな、こりゃ。
「えぇーと、私が見たときにはもう儀式は終わっており、術者も全員死

んでいました。」
「そうか……それだけか？」
いや、それだけっすよ。それ以外何報告しろと？アルフォト君に会ったことも報告しろと？
「はい。」
「なるほど……確か、彼らの儀式の内容は確か生贄を捧げ、悪魔を召喚するはず……だがそれに術者は入っていないはずだぞ？」
んなもん知ってるよ。
「恐らく、生贄の選択を間違えたのだと思います。」
「そうだな……それが一番つじつまが合う。だが、妙な胸騒ぎがする。今後とも注意を徹底的に。」
この爺さん、もの分かりはいいんだよなぁ、それにある程度は話通じるし、大抵の聖職者は嫌いだが、この爺さんはまだマシかもしれんな。
それにしても、相変わらずこの爺さんは慎重だなぁー、そう言うところは素直に感心できる。
……他の奴らは神にひたすら祈るか、権力にあぐらかいてるかのどっちかだもんな。
「了解しました。」

「もう下がっていいぞ。」
あ～やっと帰れる～
「ああ、そうだ。最後に言い忘れていたが、」
「？」
下がっていいんじゃないんかい。
「神のことが嫌いなのは私としては仕事さえきちんとしてくれれば結構だが、神が嫌いなことをあまり噂にしないほうがいいぞ？世間知らずであまり周りを気にしないそこらの聖職者なら別に害はないが……私のように情報網が広い相手だと大きな痛手だぞ？」
あ～やっぱ前々から思ったけどこの爺さんには勝てないな。

「とりあえず聞きますけど、貴方は神様好きですか？」
「好きではないな。だが信仰はしている。」
「なら、なんで僕を追い出さないんですか？」
　こんなやつ残すのは教会の得にならないし、何なら神信仰してるやつからしたら迷惑以外の何者でもないぞ。
「確かに私はお前のような聖職者はあまり好きではない。だが、そんなくだらない理由で、お前のような優秀な人材を失いたくもない。だからそのままにしてるんだ。」
　なるほど、使えるもんは気に入らないやつでも使う……か、その考え、嫌いじゃない。むしろ割と好きだ。
「では、失礼します。」
「ああ、気をつけて戻れ。」

3話　やはり遺書は死ぬ直前に書くべきだった。

3話

「冒険者ギルトでございま～す。見ない顔ですね？新規登録ですか？」

「あっはい。そうです。」

なんか陽気そうな女の人に話しかけられたなぁー。苦手だこういう人。

「では～さっそくステータスの確認からしてもらいま～ッス！」

うわ、テンション高ッ！そして地味にウゼェ。後肩組まないで！初対面だよねぇ！君！しかも君は女性でしょ！後さっきから思ったけど当たってるから‼（何があたってんのかは察せよ。）

なお、そんなこと言える勇気がない僕であった……

「あの……ステータスってなんですか？」

「ああ、ステータスはですねぇ～簡単に言えば」

「自分の能力を数値化してぇ～それを平均と比べて評価するんです。その評価はS～Dまであってぇ、Bが平均です。評価されたやつは見たら思ったより低くてやめちゃったり傷ついたりする人多いんで～本人の許可があったときのみ閲覧可能です。なので～それを理由にサボったり辞めたりするとこはできませ～んよ？」

傷つくなら見んなよ……自分のステータスの評価が思ったより低いことくらい範囲にいれてろよ。

「本当にめんどくさいッスよね。」

あの……僕声に出してないよね？

「声には出してないッすね～顔には出てましたけど。」

「……。」

何でリベンさんといいこの人といい、心読める人結構多いね。

「話戻しまして……ステータスの確認しましょー！この紙に触れてくださ～い。」

「えっ、あ、ハイ。」

僕は言われたとうり紙に触れた。なんか文字浮かびあがってきた

な。

アルフォト・グレイロード
Ｌｖ　９
体力２９　筋力２２０　魔力１１０　防御３９　素早さ１１
『……絶対に死なない。歳もとらない。だが傷は治らない。ただし、血も出ない。

「ッぷ。イヒッｗ、イヒヒヒヒヒヒヒｗｗレベル低ッｗ一桁は初めて見たｗ」バン‼バン‼
背中叩くな！地味に痛い‼いや、それもそうだがそうじゃなくて……
「あの、一番下のやつって何ですか？」
「ああ、異能のことですねｗ」
まだ笑ってんの!?いや、でもそれより……
「異能ってなんですか？」
「異能って言うのは、その人によって違う特殊能力ですね。産まれつきのものと後天的なものがあります。そこら辺しかわかってません。」
「その異能を解除する事ってできます？」
「それも人によりますね。あなたの場合は永続だと思いますよ。」
「そうですか……」
最悪だ……死のうと思ったら死なない能力手に入るってなんなの？ホントに神様ぶん殴りたくなって来た。よし、決めた。僕も聖職者になろうかな。……まあ、無理だろうけど。
「ちなみにこれ本来は名前表記されるんですけど。なんで空白なんですか？」
「多分、目覚めたばかりだからと僕が自覚してなかったからだと思います。」
「そうですか～なら今決めましょ～ハイハイどうぞッ！」

ええ……いきなり？えーっと、ならー、若干の皮肉を込めて……

「じゃあ、永遠の犠牲者（エターナル・ヴィクティム）で……」

「ちょｗｗ　絶対皮肉込めましたよねｗｗ　」

「わかるんですか？」

僕がそう言うと、彼女は何故か真剣な顔になって……

「ええ、とてもね。」

な、なんか意味深だなぁー。

「あ、忘れてましたけど評価見ます～？」

いきなり戻ったな!?そういえばそんなんあったなぁ、忘れてたけど。ま、興味あるから見てみよ。

「はい。お願いします。」

体力Ｄ　筋力ＳＳ　魔力Ｓ＋　防御Ｂ　素早さＤ

「え？このＳ＋ってなんですか？」

「その名の通り最高であるＳ超えてるってことですよ。たまにいるんですよ。そういう人。」

「な、なるほど……」

「じゃあ、ＳＳって……」

「それよりも更に上ってことですね。私も流石にここまでの人は聞いたことありません。」

「特化型は見たことありますけど、ここまではっきりしたのは初めてです……」

「そ、そうなんですか……」

「それより、手続き進めましょ～。ここからは長くなるので場所移しまーす。」

「っと、これで、手続きは終わりで～す。」

な、なんか思ったより仕事が丁寧だった、この人。

「ありがとうございます。」
「いえいえ～仕事ですので～。それでは……気をつけて帰ってくださいねー。」
「は、はい。」
道迷わなきゃいいけど……

ん？待て、よくよく考えりゃ地図あんじゃん。地図見て帰りゃいいじゃん。てか行くときもみりゃよかったじゃん。バカだ僕。どうりでなんかリベンさん地図出したとき微妙な表情してたのか

……。

無事着きましたよ、家に。
「なあ、アル。」
「なんですか？フリッツ兄さん。」
珍しくこの家の長男であるフリッツ兄さんに話しかけられた。なんかあんのかなぁ？
「ちょっと父さんの部屋に来てくれ……。」
父さんの部屋に？何故？
「……はい。分かりました。」
呼んでるって事なんだろうか？……とにかく、行ってみるか。
「……アル、そこは違う方向だぞ？」
え？そうなの!?
「なぁ、年々ひどくなってないか？お前の方向音痴。」
「そう、かもしれませんね。アハハ……」
「仕方ない。ついていってやる。」
「いいですよ、別に。」
家の中適当に探せばあるだろ。……それに、悪いけど結構気まずいし。
「俺も呼ばれてるからな。ついでだ。」
なら、お言葉に甘えよう。
「そうなんですね。ありがとうございます。」
――数分後
シーン
気まずっ。
「……。」
「……。」
「ア、アル。」
「な、なんでしょう？」
なるほど……。この気まずい雰囲気なんとかしたい気持ちはすっ

げぇわかる。よし、フリッツ兄さん。どんなマニアックな話題でも反応するからカモン!!!
「その……な。」
「「……。」」
オイイイイイイ!!!話題持ってないんかい?!余計気まずくなったやないかい?!何しとん!?フリッツ兄い!?
「……つ、ついたぞ。」
「は、はい。ありがとうございます。」
「き、気にするな……俺も呼ばれていたからな。」
コンコン
「「失礼します。」」
「……入ってもいいぞ。」

ガチャ
なんか異母兄弟全員揃ってるなぁー。
「えっと……これは?」
なんかちょっと言い方失礼な気がするけど仕方ないよね。なかなか揃わない人達大集合だから。
「皆には、あることを話し合うために集まってもらった。」
「あ…あることってなんですか?」
三男…マルク・グレイロードが緊張してるのか若干どもりながら言った。
「それはな……これだ。」
パサ
そう言って父さんが出したのは白い封筒だった。
ん?なんか見覚えあるなぁー……
あ、思い出した。先に遺書書いたんだ。忘れないように。でも置いてたらどっか消えてたんだよなぁー

ん？これ、なんか見られたらやばいやつじゃね？
「なになに〜？これ」
そう言って、次男であるシュゼット・グレイロードが封筒を開けようとする。
「ちょ！」
それ見られるのはまずい！ただでさえややこしい状況が整理される前にさらにややこしい状況になってしまう!!
「ん？何だこれ手紙？……………………うん。父さん、流石にこれ本人の前ではキツくない？」
見られたアアアアアア!!!!!
「やっぱり、そう思うか？……なら、アルフォトを外に………」
「父さん、それ余計キツイよ。今から自殺しようとしたことバラすことわかった上で追い出されてんだから………」
あ…………。
「「「はぁ!?自殺!?」」」
終わった……………。

4話　ややこしすぎる状況。

4話

……終わった……

「あ、やべっ」

やべっ。じゃないですよ。なぜ言うのだ……これなら出してくれたほうがマシだったなぁー

「ね、ねえ、自殺ってどういうこと!?」

そういったのは長女のフィナンシェ・グレイロードだ。たまに話しかけてきて変な事言うから少し対応に困る人。

「えっと……その……」

「ほ、ホントなの？」

「いや……その……マルク君。なんというか……」

ホントになんて言えば……

「あちゃーこりゃミスったなぁ。」

ホントだよ!!!

「もしかして……!!……グレイロード家の汚点っていじめられてたのが原因じゃ……」

次女のシャラン・グレイロードがズバリ正解言い当てた。

「そう……なのか？」

「フリッツ兄さん……いや……それは……」

「図星だね～。」

そうですよ！図星ですよ！言っとくけど結構キツイからな。あんたらでもきっと耐えられんぞ！

「すまなかった!!!!」

「「「「えぇ……（困惑）」」」」

いきなり謝られても……何に対して？

「私が…私が、君の母親と関係なんて持たなければ、こんなことにはッ……」

「え？とりあえず聞きますけど……アルの母さんと父さんの馴れ初め（仮定）って……」

今そこ聞く!?フリッツ兄!?
「そうだな………あれは…………18年前――――――――――――――――」
「ちょいちょいちょいちょい待ち、長くなりそうだからその話やめて?言うとしたらもっと手っ取り早く言って?」
めんどくさいのはゴメンだ。
「手っ取り早く言うと、私が彼女会って、そん時しばらくは平気だったんだけど酒飲んだとき、妻と間違えて襲っちゃいまして…………。」
「「「「「……………………。」」」」」
え?そんな理由?思ったよりくだらなかった。それより、皆同じ事思ってんだろうな~僕も同じだよ。
「…………………。」↑アッ、ヤベッって感じの顔
せ~のッ‼
「「「「「何やってんだ!!!このクソ親父ぃぃ!!!!!!」」」」」
その日、僕、いや、僕たちは初めて、父さんを一発ずつぶん殴った…………
―――――次の日―――――
朝、父さんとは一度も会話せず、マルク君と一緒にギルトに行った。
「にしても、意外だったなぁー、アル君も異能者だったとは………」
結局あの後能力のことを説明して死なないことを言った。皆微妙ーな顔してた。
「ねえ、僕もってことは、マルク君も持ってるの?」
「ま、まぁ。一応。」
「どんなの?」
それが一番気になる
「それより、アル君って、もうギルトでパーティー組んだ?」
あ、露骨に話題そらした。
「いや、まだだけど………マルク君は?」
「僕はもう組んだかな………」
僕よりコミュ力ないのに凄いな、この人。

「そうなんだ。ちなみに、その人たちは？」
　僕と一緒に行かなくてもいいと思う。パーティーの人いるんなら。
「いや、まぁ。それがね、ウチのパーティーの人って、皆基本自由だからさ、集合かければ集まってくれるけど、そうじゃないときは基本バラバラなんだ……で、まぁ僕一人で暇してまして、それで、アル君の初仕事くらいは手伝おうかなぁーって。」
　なるほど、ありがたい。ここはお言葉に甘えよう。
「ありがとう。よろしく頼むよ。」
「あ、そこ道違うよ。」
　え？マジで？
「ゴメン……」
　この後、なんやかんやで、到着予定ちょっと遅れた……

「そういえば、アル君のステータスってどのくらい？」
「ほい。」
　そう言って、僕は昨日もらったステータス書いてある紙を渡した。
「僕のもみていいよ。はい」
　マルク・グレイロード
　体力Ｂ　筋力Ｅ―　魔力Ｂ　防御Ｓ　素早さＳＳ
『剣神の加護』……剣を扱うとき、すぐに使いこなせ、自分に最もあった型で常に動ける。

　マジで？強くね？筋力めっちゃ低いけど。
「強いんだね。割とマジで、」
「よく言われるよ、でも、まぁ非力過ぎて木刀しか満足に使えないけど。」
「すぐ折れそうだね……木刀。」
　それに思ったよりキツイ弱点背負ってんなぁー
「心配御無用。常に強化かけて折れにくいようにしてるし、予備何本かあるし。」
　なるほど、よくよく考えりゃそうしなきゃとてもじゃないけど恐く

て扱えねぇな。
「あ、着いたよ。ここ」
そこにあったのは、割と年季入った店だった。
「ん？ここギルトじゃないけど……」
ギルトもう少し先だけど……
「ここ、武器屋だよ。ここで、アル君にあった武器探すんだよ。」
確かに武器持ってなかったな。
「なるほど……」
「早速入ろ？」
「あ、はい。」
ガラガラ
「失礼します。」
「ハイハ～イ」
店番やったのはゴツいオカマだった。
……ッハ！一瞬脳がショートしてた。あぶね。
「何を探してるのかしら～」
「この人に武器買いたいんですけど……」
「そう。ならステータス見せて？」
「ど、どうぞ……」
「なるほどねぇーならこれね。」
渡されたのは小型の槌だった。
「なんですか？これ」
「それね、自在にサイズ変えられるの。使いこなせたら便利なんだけど、大きくすると結構重くて、誰も扱いきれないのよ。」
「なるほど……」
だから馬鹿力の僕に、か……
「あ、あとこれね。」
次はでかいバズーカ渡された……
「これは？」
「それ、買い取ったものなんだけど、射程長いし、威力高いし、範囲も広いんだけどね、なんか威力だけを求めたらしくて、重いし、反動で

かいらしくて、面白い武器なんだけど、使える人がいないのよ～でも、ちょうど良かったわ、あなたのような不死であれば、反動で死なないでしょ、バズーカはサービスであげるわ。」
「あ、ありがとうございます……」
「良いのよ～邪魔だったし。」
「それで？いくらなんですか？小槌は。」
「あ、いいよ、自分で払うよ。」
「あ、そう……」
「１０万よ。」
「割と安いですね。」
「欠陥品だからね。」
　その欠陥が僕にとっては全然そうでもないんだけどな……
「どうぞ……」
「はい、ちょうどね。」
「「失礼しました。」」
「また来てね～待ってるわ～」
　バタン
「なんかいい人だったね。」
「そうでしょ。まぁ、ちょっと対応に困るけど……」
「うん……」
　そうこうしてるうちに、ギルトに着いた。てか、すぐ隣だった。
　ガチャ
「おはよ～ございまっす！」
「おはようございます……」
　やっぱり、まだ担当の人のノリについていくのは難しい気がする……
「あの人、アル君の担当？」
「まあ、そうだね。」
「そっか、ならさっさと依頼受けよう。」
「すみません。依頼受けたいんですけど……」
「おや？あなたも一緒に受けるんですか？」

「まあ、はい」
「わかりました、初めてなら、迷子の捜索とかどうです？」
「いや、彼重度の方向音痴なんで、迷子捜してる途中で一緒に迷子になりそうで怖いです。」
　そんなに!?そんなにひどいの僕の方向音痴!?
「なるほど……なら、これなんかどうです？」
「えっと、洞窟の調査ですか？」
「ええ、最近、何も無いはずの洞窟から物音を感じるって噂です。火のないところに煙はたたないってことで、念の為調査しろってことらしいですよ？」
「調査ってことは、魔物が住み着いていた場合はその性質を調査と……」
「他には、生活感はあったかとかも調べますね。」
　……あれ？これ僕が受ける依頼だよね？なんでマルク君が受けるみたいになってんの？
「なら、それにします。アル君もそれでいいよね？」
「あ、はい……。」
　どうしよ、スゲー不安……。

5話　初仕事

5話
はい、というわけで早速調査しましょー、って言いたいところだけどマルク君とはぐれました。
終わった…………………

――――――――数分前

「えっと、洞窟まではたしかここらへんを真っ直ぐでいいんだよね？」
「確かそのはずだよ？」
駄目だ、なんか違和感が凄い。さっきから嫌な予感しかしない。大丈夫だよな？簡単な仕事って言ってたし。うん、大丈夫！
「どうかしたの？早く行こうよ。日が暮れる前に。」
「そうだね……。」
やばい。どうしようもなく不安だ…………
「どうかしたの？」
「いや、なんか嫌な予感がするなと…………」
「エッ、やめてよ君の勘意外と当たるんだから。」
そうなの!?初耳だよ!?
「そうなの!?」
「うん、ほとんど当たってるよ、君の勘は。だからさ、不安になるようなことできるだけ言わないで？」
「わかった…………」

――――――――

で、そのまま真っ直ぐ進んだらこれかよｗｗｗ
ｗｗｗｗｗｗ
……………いや笑えねぇよ!!!!!!!!笑うしかないけど‼僕の方向音痴ってここまでひどいの!?なんで!!!!??
「チクショー!!!!」
僕は思いっきり叫んだ。喉が痛くなった。
「おい！そこで何をしてる！」
なんか剣持ったオッサン数人に話しかけられた。

……これ、やばくね？
落ち着け、話せば分かる。ここは隠密に行こう。
「えっと、道に迷ってしまって、困ってたんです。決して怪しいものではありません。」
一応洞窟の調査の件は黙っておく。説明した状況はあながち間違えてはないし……
「な、何故だ、何故人避けの結界が作用しない！」
「おい！貴様は黙っていろ!!」
なんか勝手に喋ってくれたんだけど。まあいい、好都合だ。えーっと人避けの結界だっけ？じゃここは薄暗い奴らのアジト、もしくは取引場所か……

……うわ、帰りてぇ。
「とにかく、今の話を聞いたからには返せないな。ここで死ね。」
死なねえーよ。てか死ねねーよ。
「こっちは話聞いたってより勝手にそっちが喋ったのが聞こえただけなんだけなんですけど？」
「関係ないな。どちらにしろ、ここにたどり着いたやつは全員殺す。」
「怖い怖い、でもそうはなりませんよ？僕は不死なんで。」
少なくとも殺せはしないよ……殺してくれるならしてほしいけど……
「そうか、本当にそうだったら切り刻むだけで許してやるよ。」

いや、だったらいっそ殺せや。殺せなくても殺せや。そっちのがこちとら好都合だわ。

……ん？待って、終わってね？これ。負けて斬り刻まれてどっかに捨てられて放置って未来しか浮かばへん。むしろそれ以外何浮かぶん？

「いっせいに仕掛けるぞ!!」

「オー!!!!!!（不特定多数）」

ダッ！

「!!」

そうこう考え事してるうちに、何人かが襲ってきた。

あークソ！ぶっつけ本番だ！

「オラッ！」

ブォン！

とっさに槌を巨大化させて襲ってきた奴らを薙ぎ払った。何人かがキレーにぶっ飛んだ。

「ククッ、なるほど、面白い武器を使う。」

ちなみにさっきまで会話してたオッサンは襲ってこなかったから普通にいる、てか喋ったのがその人。（それ以外は全員ぶっ飛んだ。）

「意外と慎重なんですね？貴方は。」

「薄暗い商売やっていると、慎重じゃないといつ足すくわれるかわからんからな。」

「意外に説得力ありますね。」
ヤバいどうしよう。この人絶対僕より強い。さっきの人たちはいっせいに襲ってきてくれたから一気になぎ払えたけども、この人は無理っぽい。

ジリジリ
少しずつ距離を詰める。まだ仕掛けちゃ駄目だ、格上相手に不用意に距離詰めたら一気にバラバラにされる、それは普通に嫌だ！
……落ち着け、僕の今ある手札を整理しろ、１つ目は不死。血は出ない、でも痛覚はある。再生もないけどポーションぶっかけりゃ治る。２つ目は自由にサイズ変換可能な槌。３つ目は僕の馬鹿力。僕のタイプは強いて言うなら超重量型アタッカー、あっちは剣を扱ったり比較的軽装であることから推測すると、スピード特化のアタッカータイプ。僕がこの人に勝ってんのは筋力と魔力ぐらいだな。でも魔法は回復と強化しか練習してないから攻撃はできない。
……どうする？

ダッ！
ヤベッ！仕掛けてきた！‼クソ、こうなったら！
ザクッ
「なっ！」
僕が選んだのは、あえて受ける！でもそれだけじゃジリ貧で負ける。なんたってこっちは引きこもりで体力ないからな。
だから！受けた瞬間に、剣が完全に僕の肉を断ち斬る前に強化魔法で全身の筋肉を硬化＆圧縮！そんでもって、斬られたとこから引き抜かれないように回復魔法でくっつける!!
「痛えんだよこんちくしょう‼!!」
ドゴッ!!
「グホッ！」
とりあえず痛かったし、めっちゃ集中して疲れたからその怒りに任せて拳で腹ぶん殴った。剣離してくれた、ラッキー。
「そんじゃ、おやすみ。」

バコンッ‼
念の為槌でひっぱたいて気絶させた。
これ、念の為縛ったほうがいいか？吹っ飛んだのはどうしよう……
……ま、いっか。

ふう、縛るの終わった、ポーション飲も。
ゴクゴク
アーッ！生き返るぅ！
……って、オッサンか僕は。まだ１８だぞ、そんな歳いってないぞ。しかも体力回復するだけで所詮味はただの水だし……水は普通に美味いけどさ。
あ～、駄目だ。よくわからんこと言ってんな。さて、調査行こ。

「えっと……ここが洞窟か……」
さっさと入ろ、そんで帰ろ。あっ、でもマルク君いなきゃ道に迷いまくって帰れないな……いっか、別に。
確かに何か違和感あんな、さっきの出来事あって違和感なかったら逆にキツイけど……
そんなことはどうでもいいや、さっさと進も。
ウー！ウー！
「は？え？」
「侵入者だ！捕まえろ！」
アーッ、いっけねぇ、そりゃトラップくらいの物は用意しないとこんな商売できないや！怖くて。
ま、最悪槌ぶん回して逃げればいいか……

……あ、ここ狭くて槌満足に振れねぇわ。バズーカも持ってきてないし、そもそもこんなとこであんなもん打ったら恐らくここ崩れて調査どころじゃないし、今から逃げる？足遅すぎて論外。

終わった……（本日三回目）

「いたぞ！捕まえろ！」

抵抗だけでもしておくかッ！

ガシッ！

「は？」

とりあえず掴んで……

ブォンッ！

どっか適当に投げとこ……

「ハァァァァァァァァ!?マジで!?（不特定多数）」

アッ、ここ洞窟だった……

ゴキンッ‼

ドゴォン！

「うわっ、痛そう……」

今結構鈍い音したぞ……バウンドしたし……

「うわぁ……（不特定多数）」
……あっちサイドは全員引いてんな、これは。
地味に傷つく……
アッ、なんか記憶が蘇ってきた……
――――――――――――黒歴史再生（１０年前）
「お前、いいもん持ってんじゃん。ちょっと見せろよ。」
あ～懐かし、こんなのいたなぁー。見せろとか言いながらそのまま借りパクする典型的ないじめっ子。
「エッ、えーっと……」
アッ、そいやこの時から人間観察とかやってたなぁー、むしろそれが間近で出来るのがいじめの唯一のメリットだって思ってたし……思ってた？今も思ってんか、普通に。
「いいから貸せよ！」
「え、ちょ！」
いや、なんか見せろから貸せよに変わってんじゃん、てかこれ奪い取ってるよね？
「か、返してよ！」
ガシッ！
「何すん……」
ブォンッ！
ガサッ！
わぁー、運良く木に引っかかったぁー、そんで取られた水晶落ちたぁー、割れたァ……。
――――――――――――
嫌なもの思い出しちゃだったなぁー、僕。（この間だいたい１秒くらい）
「とッ、取り押さえろぉー!!」
あ、思い出（黒歴史）に浸ってる場合じゃなかったな……
「イテッ。」
アッ、取り押さえられた、地味に痛い……
最悪鎖引きちぎって……

ガチャンッ‼

アッ、手錠か。でもこの手錠なかなか硬いな……時間かけきゃまず壊せない、んで、時間かけてる間に気絶させられる可能性が高いなぁ、隙を見てやらないと……

6話　黒歴史から学べることはあるが同時に精神も削れる。

6話

ハイ、というわけで捕まっちゃいました～。マルク君も一緒でーす‼いやぁ～、探す手間省けて助かりましたよ～。あはは……

「何で君も捕まってんの？」

「いや……その……実は……」

「さっさと言ってくんない？めんどくさいから。」

「君ちょっと僕に対して当たり強くない？」

「ソンナコトナイデスヨー。」

「何で片言？まぁ、いいか、実は……」

「何で最初からそう言うふうに話さないの？マルク君。」

「君僕にホントに話聞きたいの!?聞きたくないようにしか聞こえないんだけど!?」

「いいから、早く早く。」

「君ホントにどうしたの？なんかやなことあったの？まぁ、いいか、実は……」

――――――――――――――――――――数分前

「ハッ、え？ここどこ？」

え？まさか僕の方が迷ったの？ヤバッ、アル君も絶対迷ってる‼早く行かなきゃ！

「いたぞ！捕まえろ！」

え？

え？

「で、現在に至るわけ。」
「いやわかんねぇよ、語彙力無さすぎて。」
「ひどっ、ホントになんかあった？君。」
「あんたの語彙力こそなんかあるでしょ、それこそ。」
それでよくパーティー組めたなと思うよ。
ああ、あの黒歴史思い出したら腹立ってきた。あのガキィ、割れたのは僕に非があったとしても、少なくとも奪い取ったことは謝るべきだろうがぁ、しかも都合いい所だけ抜き取って親に知らせやがってェ、お陰でこっちだけみんなの前で謝るって言う羞恥プレイ受けたじゃねぇかよぉ！ぶん投げたことは悪いと思ってるよ！てか、全体的に見たら先に手を出した僕が悪いよ！だけどよぉ！謝ってくれてもいいじゃない！なんならもう軽く頭下げたり形だけでも謝ってくれてもいいじゃない！

泣きそうになってきた……やめよ。
ああ、そうだ、自傷しよ、なんなら自殺（未遂）しよ……
「マルク君、炎の攻撃魔法って君使える？」
「初級なら……何をするの？」
「ストレス発散。」
「???」
「とにかく教えてくんない？」

「えっと……ぼわぁ、ってある自分の魔力をグーンって集めて炎をイメージしながら、ドバーって魔力を出す感じわかった？」
うわっ、何一つわかんねぇ……
「おい！さっきから何を喋ってる！」
ヤベッ、監視が様子見に来た！おそらく会話を一部聞かれたな……何を喋ってるかって？こっちも知らない。
……いいや、もう、ぶっつけ本番だ！
ボゥ！
とりあえず、僕は魔法を成功させた、そんで今火だるまになってます……
「熱い。普通に熱い。」
てか、皮膚燃えないんだな……まぁ、そのお陰であんまり痛くないんだけど。
「うん、だろうね？」
「う、ウワァァァァァァァ！！！！」
なんかびっくりしたみたいで逃げ出した。んで転んで頭打って気絶した。
（ダサっ。）
「アル君、それは僕でも逃げるよ……」
「そんなひどい？」
「うん、いきなり燃えてんだもん。それより熱いからもう少し離れて……」
「あっ、手錠取れた。ってか溶けた。」
「物理に弱くする代わりに魔法に弱いのかな？ってことは錬金術か。」
「ふーん、で、僕裸だけどどうしよう……」
ストレス発散したいという
「そこの気絶したダサい人から剥ぎ取れば？冗談だけど。」
なるほど、その手があったか……
「わかった。ちょっと着てくる。」
「え？まじでやんの？」
「え？そうだけど？僕犯罪者になりたくないし。君だって犯罪者の身

内ほしくないでしょ？」
「いや、まぁそうなんだけども……」
「ほら、さっさと行こうよ。」
「う、うん。」

ヤバい、後悔した、何であの人から服剥ぎ取ったんだろう、僕あの人に対してなんにもされてないのに……
そういえば前にもこれに似たようなことしてしまったような――

――いや、思い出すの止めよ。悲しくなる。
「おい！しっかり歩け！」
「……。」
そこには鎖で繋がれたたくさんの子供たちと、数人の大人がせっせと移動していた。
なるほどね。調査に来たから拠点を移すわけか。
「どうする？アル君。」
「いや、どうするって言われても……」
「僕はあの子達を助けに行くよ。アル君はどうするの？」
「……。」
それ絶対暗についていけってことだよね。……行くしかないか、ストレス発散もしたいし。
「で？どうやって攻め込む？」
「正面突破は止めた方が良いよね……。」
「まあ、あっちは6人こっちは2人で明らかに分が悪いからね。」
「だよね……。」
「まあ、だとしても今出来る手が正面突破しかないんだけどね。」
「やっぱそう？」
「うん。ここからじゃ、凝った策はたてられないし。強いて言うなら弓矢とかで狙撃だけど今弓矢ないし、あったとしてもどっちも使ったことないからキツいしね。」
そう。さっきまで僕たちは洞窟の下に出来たスペースにい

て、今はハシゴに捕まりりながら入り口の様子を見ている。結構入り口が広かったからマルク君は僕の背中に捕まってる。だから絵にするとかなりシュール。
「もう行って良い？君結構重い。」
「……アル君。それを女性に言ったら絶対ダメだよ？」
「？わかった。」
あ。ヤベッ！目があった！
「おい！何やってんだ！」
「ヤベッ！」
「もう良いよ！やけくそだ！」
ダッ！
「イテッ！」
コノ野郎。僕を踏み台にしやがった。具体的に言うと僕の背中よじ登って肩に足乗せてジャンプした。普通に痛かった。多分このハシゴ錬金術使ってるな。じゃなきゃ耐えきれなくて僕落ちてると思うし。
などと考えてるうちに上に出てみれば…
「オラッ！」
「ッ！」
シュッ！
「へぇ、素早いじゃないの。でも得物がそんなじゃまともに殺りや得るわけねぇだろっ！」
なんか木刀と大剣が戦ってた。あと、3人位はやられたらしく気絶している。これ手助けするべきかなぁ、って思ったけど。下手に横槍いれたってマルク君が満足に動けないだけか……僕も動きづらいし。先に子供達優先しなきゃな。ハァ、めんどくさい。
「おっと、その子達は大事な商品なんでね、簡単にはやりたくはないかな。」
「あんたは……さっきのオッサンか。」
「ご名答。といいたいことだが、俺はまだ28だ。オッサンじゃない。」

いや、知らねぇよ。興味もないよ。てかさっき気絶させて縛ったんだけどなんでいんの？
「あんた、疲れているせいか老け顔ですよ？ちょっと寝て休んだらどうです？」
「やかましい、さっきので十分寝た、お前もちゃんと寝たらどうだ？不死野郎。」
煽りも効果無しか。さっきは僕が不死って事を知らなかったから勝てたけど。かなり厳しいな……。
「また縛ってＳＭプレイでもしてやりましょうか？」
「結構だ。俺はホモじゃない。」
「って事は僕が女性ならされても良いんですか？」
「ああ、もともとその趣味はなかったが、それが絶世の美女なら良いと思い始めてきたところだッ！」
ヤベッ！この距離じゃかわせねぇ！
ボンッ！
とりあえず、槌の頭部だけでかくして、盾代わりに使うッ！
ガィンッ！
金属音が響いた。何とかギリギリ防ぐことができたな、ふぅ、危機一髪。
「なるほど……そんなことが出来るのか…便利だな、その槌。」
「使い勝手と重さが売りらしいですからね。この槌はッ！」
僕は槌で剣を受け止めたまま持ち手を伸ばし、体制を変えて槌を振り切った。
「おっと、危ない。やはりすさまじいな。お前の馬鹿力。」
どうやら振り切る寸前に後ろ向きにジャンプして勢いを殺したらしく、ピンピンしている。
「昔から良く言われますよ。それは。」
とりあえず、今は観察だ。そこから取ったデータから癖や、性格を割り出して、アドバンテージを得る。それくらいしか勝ち目ないな。
……シビアだな、中々。

7話　戦いは強さだけじゃないんだなと確信した。

7話

……さて、どうするかな。

「おいおい、何を考え事してるんだ？そんな余裕あるのか？」

そんな余裕ねぇよ！無いけど考えなしじゃ勝てないんだよ！あっちの手札は完全にわかんねぇ、僕の手札はさっきのやつで全部切った。さっきの火だるまでも使うか？

……いや、リスクがデカすぎる！それに、殺しちゃったら気分悪いだろ。服も燃えるし、相手が攻撃系の魔法使えたら詰み。勝っても服がどうしようもないしな。この時間でやってる店ないし、やってたとしてもマルク君に代わりにかってもらうのは気が引ける。……勝っても負けても社会的に死ぬ！肉体の死は大歓迎だが、社会的な死は絶対に嫌だ！だから火だるまは最後の手段として取っておく。

となると……

「余裕何て無いですよ。でも、勝ち筋は探さないと……自称２８歳。」

「自称じゃない、本当に２８だ、そろそろぶっ飛ばすぞ。」

会話の反応で探る。……あと、煽りは集中散らせれたラッキー程度で考えよ。

「おー、こわいこわい、（棒）、でもそんな頑なに否定されると余計疑っちゃうなー（棒）」

「お前は意外と人をイラつかせるの上手いな。」

「ハハ、じゃあそう言う仕事あったら転職した方が良いですかね？自称２８歳さん。」

「そんな仕事あったらクソだろ。裏の仕事でもないぞ、そんな仕事ッ！」

２８歳が一気に距離を詰めて斬りかかってきた、でも煽りでイラついてはいるけど冷静な動きで隙が無いし早い。こりゃ中途半端煽っちゃった気がする。

「ッッ！」
ガキィン！
超ギリギリでガードする。ただ、踏み込みが浅かったせいで後ろに吹っ飛んだ。
ゴシャ！
「ガッ！」
イッテェェェ!!!!なんだよこの威力!!!!馬鹿みたいにイテェ！
……でもなんだッ！この!!違和感、いくら踏み!!込みが浅かったとはいえ、こんなにパワーあったか？この人。
「ハハ、驚いたろ！ついさっき使えるようになったんだ！この異能！」
やっぱ隠し玉もってやがった！
「は？何かキャラ変わってませんか？後、使えるようになったんなら何でさっさと使わないんですか？自称２８歳」
「ハハッ！俺は今ハイってヤツなんだ！だから教えてやるよ！俺の異能は！特定の２つの位置に近くなればなるほど能力が強くなる異能！その能力は！俺が進んだ方向と同じ方向にに重力を発生させる！その名を！『重力の悪魔（グラウィタス・ガープ）』！」
……わーい。タダでさえシビアなのがもっと難しくなっちゃった！＼（＾ｏ＾）／
「ちなみに、先ほどのお前の質問に答えてやると、あれは使わなかったのではない、使っても意味がなかったんだ。」
……あ、ちょっと戻った。この人。
「そして、後３０分後にＭａｘまで強くなり、Ｍａｘの持続時間は６０分だ。そしてこの能力が大した力を出せなくなるまでは後１２０分もある。効果対象は自分、もしくは自分に触れたもの。ついでに、俺は剣も体の一部ととらえる事で剣に触れたものにも重力をかけることが可能だ。」
……あ、まだハイだなこの人。自分の能力ペラペラ喋ってるし。
「そんなペラペラ言って大丈夫ですか？自称２８歳。」
「そろそろその呼び方をやめてくれ、俺にはハント・ハーペンって言う

名前がある。」
「名前ッ、さらしちゃっていいんですか？僕は敵ですけどッ。」
「問題ない。俺の名前、戸籍、履歴は全てを消した。これを知ってるのはお前だけだ。だからお前を消さなきゃならない。だが、お前にはこの能力を得る原因を与えてくれた。その感謝の証として、お前を今回だけ見逃す。」
　それはありがたい……でも、一応確認として……
「見逃さなくてもッ、僕は不死ですよ？持久戦では無敵なんですよ？」
「それは半分嘘だな。お前は確かに不死だ。だが、持久戦で無敵は嘘だろう？なぜなら……お前は死なないだけで体力は無限では無いのだろう？現に、お前は今かなり息が上がっている。今さら変な嘘を付くな。せっかく見逃してやると言っているのに。」
　ゲッ！面倒なことに気づきやがった！どうせ殺すなら今やって欲しかったのにッ！
「まあ、良い。能力の余裕があるうちに逃げるぞ。俺は。俺は必ずお前を殺す方法を探し、次会うときにそれを実行し、殺す。」
「ああ、楽しみに待ってるよ。」
　…いや、割りとマジで。
「ではな。俺に殺されるまで死ぬなよ？」
「大丈夫ですよ。不死ですから。」
　タッ！
「はやッ。」
　もう見えなくなっちゃったなぁ……
「ネェ！手が空いたんなら手伝って！」
　ボロボロの木刀を持って思いっきり走りながらマルク君が切羽詰まった様子で言った。どうやら先ほどは1対1だったのが2対1になっている。劣性だなぁ、
「おいおい、兄ちゃん。よそ見してて良いのかな！」
「ねぇ、とりあえず手伝って！このままじゃ僕死ぬよ！君みたいに不死じゃないの知ってるよね!?」
　……とりあえず、ポーション飲も。それまでは……彼の

生存本能にかけよう！
「……。」ゴクゴク
「何を呑気にポーション飲んでるの!?僕の状況良く見て!?ウワァ！」
会話？中に攻撃を受けても、これまたスレスレで避けてた。
スゲ。
「チクショオオオオオ!!!!やってやるッ！」
ヤケクソ気味になったマルク君は大剣降ってる奴でなくその後ろで強化の支援をしているであろう黒装束の男をボロボロの木刀で叩き斬った。……斬れてないけど。不思議だよね、斬れないのに斬ったって表現するの。ただ、鈍い音はしたからかなり痛いと思う。
「カフッ！」
「ハハ、やるな、お前。でもそいつ気絶させても俺を倒さなきゃ意味ねぇよ！」
……ふぅ、休憩終わりっ！さてと、とりあえず良さ持ちてだけ長くして、頭部は……大きくしなくていいか、今回は。
思いっきり振り落としてッ‼
ドゴォ！
「うぉ‼危ねっ！」
……死んでなくて良かった。でも出来れば防いで欲しかった。
「大丈夫？まだ動ける？だったらさっさと倒して子供たち預けて帰ろう。」
「助けるのがッ、遅過ぎッ。もう……ム……リ……。」
バタッ
「おーい、起きろー。君がいなきゃどうやって帰るんだー。」
「ゴメン……ブランク長いのに無理しすぎた……。」
オイオイ、嘘だろ!?ここで頼みの綱を失うの!?
「ブランクって言ったって、そんなにないんでしょ!?なら動いてくれぇ！」
「ゴメン……3ヶ月のブランクは割と大きかっ……た……。」ガクッ

いや割と少ねぇじゃねぇかァァァァァ!!
「このやろう!よくもマルク君を!」
「いや、俺は確かに攻撃したけど、アイツ避けてたし。体力切れだろ?そんなこと俺に言われても……」
「そうさ!その通りだ!!正論だよ!だけどさぁ!アンタにやられたって思わないとアンタを倒すモチベーション上がらないんだよぉぉぉぉぉ!!!」
「そうか!そんなことでモチベーションが上がってくれるなら結構!」
コ、コイツ!意外と器がデカイッ!よし、この器のデカさを利用しない手はないッ!
「えっと……実はさっきまで戦ってて……ヘロヘロなんだ?だからさ、ハンデ位……良いよね?」
「ん?なんだ、それくらいなら許してやろう。で、どんなハンデだ?」
ヨシッ!コイツなら行けると思うッ!
「じゃあ、まず目潰し禁止。あと、ダウンした相手の攻撃を禁止。それと、投げ・絞め等の極め技禁止。その他非紳士的行為一切を禁止。以上を君だけに守ってほしい。」
流石に自分でも引くくらいのハンデの数だが、どうだ?
「殺すのはアリか?」
「うん、アリ。」
大前提に僕死なないから大丈夫。
「なら良いだろう。そのハンデを受け入れてやる。」
「マジで!?」
競技にできるくらいにはギチギチにしたよ!?それを殺すの許可するだけで受け入れてくれんの!?……ここまで器がデカいと悪く感じて来た……。
「さあ、始めようか。戦いをッ!」

８話　最初は嫌ってた奴がわりと気が会う奴だったりする。

８話

「ッ！あぶねっ！」

僕は頭部だけを大きくして大剣を受け止めた。

……正直、めっちゃ攻撃が重いッ！

僕は槌の頭部だけを大きくしたまま思いっきり降り、大剣を弾かれた相手の体が浮いた。

この間に攻撃…いや、時間がない、なら持ち手を太く、長く伸ばして当てるか…。

ガキィン！

大剣で防がれた。こっちは長さを伸ばしていたから勢いが若干ついて火花が軽く散った。ちなみに、相手は吹っ飛んだ。

「ハハッ！なかなか面白い攻撃の仕方をするな、お前。良いぞ！興が乗ってきたッ！」

そう言って、大剣の男は思いっきりこっちに突っ込んできた。

……ここはカウンター狙い、相手がここまできたら槌の頭部だけを大きくして思いっきり振りかぶる！

……来た！ここだ！

「オラッ！」

ガクッ

来たと思って思いっきり振りかぶった瞬間、そこに相手はいなかった。正式には、普通にバックステップで避けてた。僕は避けられて重心が前のめりになっていた僕の体は前に傾いた。

…あー、こりゃ読んでたな。僕がこう出ること。

「なかなか面白い戦い方だったぞ。だが、終わりだ！」

相手が僕めがけておもいっきり大剣を振り下ろす。

……しゃあねぇ、多少痛いのは我慢しよ。まだ不死って事に

確信与えたくないし。
僕は槌の持ち手を太く、長くした、先程と同じ要領だが、今度は自分に対して使った。
グォン！
ドンッ！
……イッテェェェ!!さっき程じゃないけど！でもイテェ！
……何か勢いをつけすぎたらしく、普通に壁一枚貫いた。具体的にどのくらい飛んだかと言うと６００ｍくらいは飛んだんじゃねぇか？一応腹貫いたら痛いから強化魔法を腹を重心的に全身にかけたらそれが仇になって吹っ飛んだ。というか洞窟にこれだけのスペース作ってんの？文明レベルスゲェな。
……ちなみに槌は持ち手を伸ばしてる間に元の大きさに頭部らへんの持ち手を短くした。分かりにくいよなぁ、普通に。とりあえず、手元に槌はある。後めっちゃ疲れた。甘いもん食べ行きたい。
……マルク君はどうしよう。……あの人がハンデを守ってくれることを祈るしかないな。これは。
……ん？
「ヴー！ヴー！」
……何か手足を鎖で頑丈に拘束されててなおかつ口枷つけられてる１１、２歳の狼型の獣人の女の子がいるんだけど……
とりあえず、鎖だけとるか。
「ヴー！ヴー！」
……うわ、めっちゃ敵意丸出しだなぁ、目も血走ってるし少し、いや、かなり怖い。これ、口枷は後ではずした方が良いか？いや、やっぱ口枷から外そ。コミュニケーションは大事だからね。コミュ力自信に無いけど。
「えっと、口枷だけ取るから、騒がないでよ。」
カチャカチャ
バキン！
あ、割りとすぐ取れた。

「ッハ！」
「……大丈夫？喋れる？」
「……嗅いだこと無い臭い、てことは新しい人？」
うわ、明らかに不機嫌そうだなぁ、声だけで分かる。
「違うよ。僕はここの調査に来た人。じゃなきゃ吹っ飛ばされてここに来ないでしょ。」
「……確かに。」
「ハハ、とりあえず鎖外すよ。」
……もう良いや、最初から壊す気で行け。
ガチャガチャ
うわ、スゲェ頑丈だなこれ。
仕方ない、本日大活躍の強化魔法使いますか。
バキン！
ヨシッ！ギリ行けた！

……とりあえず全部壊したか。
「お兄さん、力強いね……。」
何か、軽く引いてね？
「良く言われるよ。」（苦笑い）
「そうなんだ、でも、ありがとう！」
……ん？さっきとキャラ若干変わってね？
「私、クラレ・ブリューレン！お兄さんは？」
「ああ、僕はアルフォト・グレイロードだよ。」
「わかった！何かして欲しいことある？助けてくれた恩は返したい！」
……やっぱさっきとキャラ違うよね。ま、良いや、気ばらしに言うだけ言ってみよう。
「え？じゃあ、僕を殺してくれ。」
「え？」
……そりゃそうなるよね。僕もわけわかんなくなってきた。頭おかしいんじゃない？僕。普通何でもって言われて殺してっ

て頼むか？敵国に捕まった捕虜位しか言わねぇよ！きっと。
ドゴン！
「ハハッ！やっと見つけた！まさかあんな避け方するなんて！さあ、立て！ラウンド2だッ！」
何だぁ？こんな戦闘狂だったっけ？コイツ。……よくよく思い出してみるとそんな素振り見せてたわ、コイツは。
「???」
「いや、何かコイツと戦ってて避けるときにブッ飛んだ。」
おいおい、僕もうマルク君のこと語彙力どうかしてるって言えねぇぞ？そのくらい語彙力無かったぞ？今。
「とにかく、さっきまでアイツと戦ってたって事。」
「なるほど。わかった！何すればいい！」
……この子ホントに同一人物？さっきと比べたらエラい態度の違いだけど。
「ヒャッハー!!!行くぜぇ!!」
コイツもコイツでキャラのブレ幅半端ねぇな!!!さっきからキャラがグラグラだぞ!!!冷静なのか狂ってるのかハッキリしてくれ!!!
「ッ!!!」
それはそうと、僕は大剣の攻撃をけっこうスレスレで避けた。クソ！ツッコミなんかに気を取られてる場合じゃなかった！
「また回避かぁ、やる気あんのか？」
やる気？ねぇよ!!そんなもん!!
「ハハッ!!オラッ!!」
ドゴンッ!!!
「ッッッ!!!」
今度は避ける自信がなかったので、槌で受けた。相変わらず重いッ!!!
「辛そうだな、疲れたんなら避けたり防いだりするのをやめて受けたらどうだ？楽になれるぞ？」
なんかもうそれでいい気がしてきた……って、思ったけどだめだな、コイツラほっといたらだめなきがする。だからあえて受ける

なら勝つための道筋が見えて、その道筋にあえて受ける事が必要だった場合だけだ。めっちゃ痛いし死にもしない……うん、最悪以外の何物でもないな。
「楽に殺してくれるならありがたいですね。まあ、ヤレればの話ですけど。」
「言うねぇ、ハハッ！威勢が良いのは結構！」
……またキャラ変わってない？コイツ。さっきからコロコロキャラ変わりすぎだろ。何？病んでんの？コイツ。
「……!!」
……なんか、いい事思いついた。
ダッ！
僕は、思いっきり距離を詰める……
「は？ふざけてんのか？」
……目を瞑ってるけど。流石にこれはふざけてるように見えるよね。とりあえず、手を前に出して……
「ッッッ!!!」
ピカーン!!!
その瞬間、目を瞑っても分るくらいの光が発生した。そして、目を開けたら割とカオスな光景が待っていた……
「……。」
「～～ッ!!」ジタバタ
「チクショウ！油断した～ッ!!!」ジタバタ
……とりあえず、男は気絶させるか。
バコン!!
「グホッ！」チーン
後はクラレさんだけど……
「～～ッ!!!」
「目、大丈夫？送ろうか？」
「～～。」コクコク
ハア、なんかどっと疲れてきた。マルク君、生きてるといいけど……

僕は、洞窟にいた人を全員拘束して、マルク君とクラレさんを抱えてギルドに報告し、家に帰った……

結局、クラレさんは家がわからなかったから家に泊めた。僕は、人生で一番寝付きが良かった気がした。

「いやぁ、昨日は災難だったね……」

僕は、改めて報告をしにギルドに行っていた。

「そうだね……もうなるべくあんな面倒ごとには付き合いたくないよ。」

「アハハ……。」（苦笑い）

ガチャ

「おっはようございま～すっ!!」

「「お、おはようございます……。」」

テンション相変わらず高ぇーなぁー。

バダン

え？なんの音？

「アル様ーッ!!!」

ドゴン！

「ぐぶほっ！」

イッテェェェェェェェェ!!!!!思いっきりタックルされた!!

「え？え？え？」

「あ～、その、あれですか？」

「え？あれって？で、なんで様付け？」

「え？言ってませんでしたっけ？私住むとこないんで、住まわせてもらう代わりにアル様のメイドする事になったんです!!」

あっれぇぇ？聞いてないなぁ、そんな事。

「やっぱあれでしたか、アルフォトさんは。ロリコンでしたか……。」

「いや違いますよ!?何でそんなことに!?」

僕はロリコンではないよ!?……悪く無いとは思うけど。

「大丈夫ですよ……アナタがどんなになっても受け入れてあげます。

私は、いつまでもアナタの担当ですよ……。」
何で僕がドロップアウトしたみたいになってんだよ!!!!
「ヒソヒソ」（不特定多数）注・諸事情により、省略してます。
そして何故か周りからの視線が痛い!!!

9話　ある意味では僕は殺されたも同然だけど……

9話

駄目だ、視線が痛すぎて胃が、胃がァァァァァァァ!!!胃がとてつもなくイテェェェェェェェ!!!何だこの胃の痛さは！半端ねぇぞ！もう半端ねぇぞ！……まさかロリコンと誤解される事が、こんなにも胃に効くものなんて……。

「？……どうしたんですか？アル様。」

どうしたのじゃないよ……君のせいでこうなってんだよ、クラレさん。いつか殺せと言ったけど……誰も社会的に殺せとは言ってない、頼み方間違えたのかなぁ……（；ω；）

「えっと、その……何してるのかなぁ、君達。」

……そこには、こないだ会った神嫌いの聖職者――もとい、リベン・ソロモンが居た。

「それは災難だったねぇ……。」

もう受付さんがわざわざ事情を説明するのが面倒だからとリベンさんが報告を一緒に聞く事になった。ホイホイ情報もらしちゃって大丈夫なんでしょうか……それだけが心配です。

「とりあえず、アル君。僕は先に家に帰るね。元々パーティー違うし……じゃあ、頑張って。」

ダッ！

「じゃあね……って速っ！」

「いやぁ～速い（です）ねぇ～」

割と仲いいなこの人たち！ホントに初対面か!?

「いや、さっき会ったばかり（ですよ？）だよ？」

怖ッ！揃いも揃ってエスパーかよこの人たち！

「あ、それよりさ、ここで会ったのも何かの縁だし、どうせならパー

ティー作らない？アルフォト君とクラレちゃんだっけ？今何処にも入ってないよね。」
「いや、僕は入ってないですけど……」
「私は……そもそもギルドに登録してないなぁ、って……」
「大丈夫です！そう言うと思って、登録しておきましたーッ!!!」
「流石だねぇ、でも、ステータス確認はいいの？」
「それも大丈夫です！」
「その根拠は？」
「そんなもん後回ししても良いからです!!」
　えぇ……。
「なるほど……。」
　いや、なるほどじゃねぇよ!?納得したらダメですよそこは!?
「よし、早速パーティー作ろ……」
「いやダメでしょ!?」
「だよねぇ……どうせ嘘でしょ？後回しで良いって。」
「当然ですよ。当たり前じゃないですか。」
　そう思えないところがこの二人の怖いとこなんだよなぁ……
「クラレちゃん、この紙触れてみて？」
「これで良い？」

クラレ・ブリューレン
Ｌｖ３０
体力Ｃ　筋力Ａ　魔力Ｃ　防御Ｄ　素早さＳ

Ｌｖ３０……だと!?いや、それも気になるがもっと気になるのが……
「何で数値が消えてるんですか？」
「いやぁ、実は…もう評価だけあれば良くない？って意見が出たんで、とりあえずアンケート前からアンケート取ってたんですよ。そうしたら、昨日結果見たら評価だけあれば良いって意見が多かったんで……変えたんです。」

なるほど……。
「で、登録だけは終わったでしょ？」
「ハイ。説明はまだですけど。」
「なら、パーティー作ろう。」
どんだけパーティー作りてぇんだこの人。
（面白そうだからだよ。）
コイツ、直接脳内に!?
「では、早速パーティー作りま……」
「ちょっと待ったぁ！」
デカイ声が響いた。僕は直感した。この人も面倒くさい人だなと。
「えっと、アナタは？」
「私はスピカ・シャックス！そこそこの有名人だァァァァ!!!」
「ホントなんですか？」
なんとなく一番情報網広そうなリベンさんに聞いた。
「うん。物理でゴリ押す魔法使いで有名だよ。めちゃくちゃ浮きまくって何個ものパーティー追い出されたとか。」
じゃあもう武闘家になれよ。何でわざわざ魔法使いやってんの？意味わからんわぁ～。
「それで……そんな有名人がなんの用ですか？」
「うん！君達の話を少し聞かせてもらった！面白そうだから君達のパーティーに入れてくれ!!」
やっぱり予想通りだぁ。面倒くさい感じがするぅ～
「うん！良いよ！面白そうだし！」
だよなぁ、そう来るよなぁ！
「うん！クラレも面白いと思う！」
クラレさん、君もそっち側なのか……
「いやぁ～一気に賑やかになりましたねぇ～。」
当然アンタもそっち側だな。
「「「……。」」」ジー
え？何これ、ジッと見つめられても……
「ハァ、……別に良いんじゃないんでしょうか。」

「よろしくなッ！」
「こちらこそよろしくお願いします……。」
何故か、出た言葉には力が全然こもらなかった。

「そういえば、スピカさんのすてーたす？ってどんなの？」
受付の人がクラレさんに説明が終わったあと、パーティーを作った。だが、名前が思いつかないので明日まで待ってくれということで、あくまでパーティー（仮）である。何故帰り道が同じかと言うと、それは単純に僕の家でパーティー名を考えるからである。
「ああ、こんな感じよ！」

スピカ・シャックス
Ｌｖ５１
体力Ｓ　防御ＳＳ　筋力Ａ　魔力Ｃ　素早さＡ
『不運の呪い』…遥か昔に一族にかけられた呪い。５０代後の最初に産まれた者にかかるタイプの呪い。これを受けたものは無茶苦茶不運になる。

なんか、こんな呪い抱えてたらズバ抜けた防御力がなければ生き残れなかったんでしょうね。現にさっき不運のオンパレードでしたし。
「そういえば、リベンさんのも見てませんでしたよね？」
「ああ、そういえば……ハイ、どうぞ。」

リベン・ソロモン
Ｌｖ６０
体力Ａ　筋力Ｂ　防御Ｂ　魔力Ｂ　素早さＢ
『穢れへの崇拝（ネームレス・カルツ）』…殺した相手の情報を本に記す。（その本はいつでも

出したり消したり可能。）その本の再現したい情報が書かれているページに栞を挟むことで、ページに書かれた情報（異能、その人が覚えた魔法、体術など。）をコピー出来る。

なんかサラッととんでもない能力隠し持ってません？この人。

「あ、着きましたよ。」

そんなこんなで、我が家に着いた。

「ただいま帰りましたー。」

「帰りましたー!!」

「「お邪魔しまーす！」」

「おかえりなさい！よく来たね、君達！いやぁ～嬉しいよ、アルフォトが友達連れてくるなんて……」

そこには、空気読めそうで読めない次男もとい……シュゼット・グレイロードが居た。

「シュゼット兄さん、皆は？」

「マルクは、昨日の疲れがまだ残ってたみたいで寝ちゃった。父さんは他の貴族との付き合い、フリッツ兄さんは嫁の家、フィナンシェは男探しのパーティー、シャランはフィナンシェの巻き添えね。従兄弟達や叔父さんも来てないよ。屋敷に残ってんのは、僕の嫁２人と、後はアリスくらいかな。」

「アリス？誰でしたっけ？」

うーん。どっかで聞いたことがあるような……

「ホラ、君の１人目のメイド。クラレが来るまで殆ど一緒にいたじゃない。」

あ～、あのメイドさんかぁ～アリスって名前なんだ。とりあえず覚えとこ。

「いや、それより僕達がアポ無しで来たのにまるで分かっていたかのように玄関にいたことは指摘しないんだね……。」

「……いつもの事なんで、慣れました。」

この人は何考えてるのか分かんないからな。それに、未来予知と

言ってもおかしくないくらいの事はいつもやってる。何故か嫌がらせとか受けた時は玄関で待ってんのの大体シュゼット兄さんなんだよなぁ～。

「それより、僕の部屋行きましょう。そこでパーティー名を考えるんでしょ？」

「それもそうね！行きましょう！」

こうして僕達は、僕の部屋に向かった……。

１０話　名前考えんのってこんなに苦労するものなのか……

１０話

「それで、名前どうする？」

僕の部屋に入った３人は、これから作るパーティーの名前を決めるための会議？をしていた。

「やっぱり、どうせならカッコイイ名前にしたいな！」

それは同意。でも、そのセリフが女子のスピカさんから出たのは意外……いや、そうでもないや。

「ハイ!!」

何か良いのを思いついたようで、クラレさんが大きな声を出して手を上げた。……ちょっと微笑ましいと思った自分がいた。

「どうぞ、クラレちゃん。」

「『デストロイヤーズ』がいいと思います！」

いや、確かに少年が好きそうな名前だけど！物騒過ぎるわ！

……待てよ、よくよく考えたらそんな物騒な奴らの集まりじゃね？僕達。僕→先の依頼では持ち前の怪力で何人か気絶させた。中には全治３ヶ月くらいの中々の重症もいた。　リベンさん→神嫌いの聖職者。仮にも神に使えている人とは思えないくらい物騒な能力を持っている。　スピカさん→まんまそんな感じらしい。（と言っても、噂で聞いただけだが。）　クラレさん→僕に唯一死（社会的）を与えられるバーサーカー。ある意味ではデストロイヤー。

……ダメだ。そんな名前ついてても納得してしまう自分がいる。

「『デストロイヤーズ』もカッコイイが、私は『デッド・オア・デッド』がいいと思う！」

それも少年が好きそうな名前だけど！何でどっちも物騒なの!?

『デッド・オア・デッド』ってそれもう会ったら死しか待ってねぇじゃねぇか!?そして以外と僕達のイメージにあってんのが謎なんだけど

!?どゆこと!?
「どちらも良いが、僕は『ジョーカー』がいいと思う。」
うん！これはシンプルに少年心くすぐる奴だ！でもインパクトが足りねぇぇぇ！やはり前の２つのインパクトが強すぎる！
「アルはなにかないのか？」
いや、そんなにポンポン出てこないっすよ。スピカさん。
「いや、特には……。」
「そっか、ならもう面倒だしくじ引きで決める？」
リベンさんがなかなかいい案を出してくれた。……もうそれでいいや。
「「異議なし！」」

くじ引きの結果、『デッド・オア・デッド』に決まった。これは流石に苦笑いしか出なかった。リベンさんも、心なしか顔が引きつっているように見えた……。
「今日はもう遅いですし、２人は泊まっていきく？」
いきなりそんな事言い出したのはシュゼット兄さんだ。いきなり現れたので普通にビックリした。これはみんなも同じだった。
「すみません。ぜひそうさせていただきます。」
「私もそうします。」
ま、別にいっか。家は部屋余ってるし。

……何で僕の部屋？他に部屋あるよね？なのに何でわざわざ僕の部屋？
「良いじゃないか、アルフォト君。男二人きりで積もる話でもしようじゃないか。」
あ、ちなみにクラレさんとスピカさんは別室です。あとその二人は同じ部屋で寝るそうです。
「そんなことしてる暇ないでしょう。明日早いんですよ？」

「わかってるよ。それで、自殺する気は失せた？」
いや……何がそれでなんですか、そもそも話をしてな……って何で僕が自殺しようとしてること知ってるの!?
「いや、初めて会ったときにそう思っただけさ。」
もうツッコまん。こないだは久々に感じたからツッコんだけど、今回からはもうツッコまん。
「いえ、確かに、僕の持っている異能のおかげで自殺のモチベーションは限りなく0に近いですけど、諦めては無いです。」
「素直だなぁ、君は。」
「ありがとうございます。光栄です。」
「でも、どうするの？さっき自分で言ったけど、君は死ねない。そう決定付けられてる。どうやって死ぬつもり？」
「それを依頼こなしながら探すんですよ。僕を殺してくれる可能性を持つものがあれば良し。それに、こういう風に誰かとつるむのも割と悪くないと思ってきたんで。」
「……てっきり集団活動は苦手だと思ったよ、君は。」
「慣れてないだけですよ。何せ、歴戦のボッチなんで。」
「ハハッ、奇遇だね。僕もだ。」
「いや、友達多そうですけど……」
「いや、実はね、僕が住んでたのはかなりの田舎なんだけど、黒髪で赤い目は悪魔の子だって伝承があって、イジメ受けててさ。教会の人も、ストレスが溜まってたのか一緒に嫌がらせしてさ。しかもそいつら、それを神の命令だって言って正当化してたんだ。だから僕は神が嫌いになった。」
「え？でも、正当化ってことは神が命令していなかったって事ですよね？」
「いや、例えそうだとしても、関係ない。僕は神が嫌いだ。は、神(アイツ)は、許しとか容赦とか言いながら結局は恐怖で従えさせる。」
「その言い分だと、まるで神がそういう事を行った場を見た、ということですか？」
「ああ、見た。あの時、僕の住んでた村に山賊が襲って来てね、その強

盗に神父が立ち塞がったんだ。その山賊は異形の怪物――――――つまりは、使い魔（ファミリア）を使っていてね。その使い魔（ファミリア）が強くて、村のギルドの人はでも足も出なかったんだ。だけど、あの時の神父は簡単に手懐けちゃってさ、その時の気配が、明らかに人間のものじゃなかった。もっと、ドス黒いナニカわからない気配でさ。その雰囲気を纏ったまま言ったんだよ、『異形よ、私は君が私に使えると誓えるなら、許しをこうなら、君を許そう。』って言ったんだ。あれを聞いたとき僕は震えが止まらなかった。」

ん？でも、それが神だとして、嫌う理由は無くないか？

「えっと、ちなみにその山賊と村の人たちはどうなったんですか？」

「山賊は死んだよ。使い魔（ファミリア）に全員殺された。村の人たちは……僕が殺したよ、もちろん、全員ね。」

は？え？

「もう寝ようか、明日は早い。おやすみ、アルフォト君。」

「お、おやすみなさい……」

なんか、なかなか眠れませんでした！やばい、気になる。スゲェ気になる。どうして村の人たち殺したんだ？……うん、グダグダ引きずってても仕方ないし、進もう。しかもココ、ギルドの中だし。

僕達はパーティーの名前が決まったからギルドで登録して貰ってる。あと、名前何にしました？って言われて名前書いた名前見せたら苦笑いされた。

「終わりましたよ！登録完了です！」

「ありがとうございます。」

「いえいえ～仕事ですので～コレから、『デッド・オア・デッド』として、活躍してください！応援してます！私の給料Ｕｐのために頑張ってください！」

うわぁ、最後のがなければいい話なのに……。

「じゃ、早速依頼受けようよ。」

「うん！」
「そうね！わかったわ！」
「えぇ！もう受けるんですか!?」
　早すぎない!?
「いやぁ、最近暴れたりなくてさぁ～」
「そういえば、僕も最近は体動かしてないな。久々に戦闘（運動）するか。」
　何かちょっと今違和感あったぞ！
「私も！最近ずっと監禁生活（こもりきり）だったし！鈍る前に動かしたい！」
　バトルする気満々じゃねぇか!?コイツら!?ダメだ、ついてけねぇ！
受付さん！何でもいいから助けて!!
「あ、だったらこんな依頼どうですか？オススメですよ。」
　オイィィィィ!?何してんだァァァァ!!!何戦闘に飢える獣たちに餌
与えてんだァァァァァ!!!
「お！いいのあるねぇ！よっしゃあ、燃えてきたぁ！」
「クラレ、これがいいと思う！」
「おっ！中々目の付け所がいいねぇ、クラレちゃん。」
　もう駄目だ、この人達は……（；ω；）
　……そう思いながらも、こういうのはやっぱりちょっと楽しい
いと思った……

第二章：避けられない面倒事

１１話　思い出話（リベンｓｉｄｅ）

１１話

……僕はいつも悪魔って言われた。だからなんだって話だ。１２年間ずっと聞いてたら流石に慣れるし何より飽きる。両親は去年亡くなった。文句を言いつつも、罵倒しつつも、育ててくれたのはとても感謝している。

…それもこれも、誰が書いたかわからないくらい古いこの村の伝承をまとめてある書物に黒髪赤目は悪魔の子って言う訳のわからない事が書いているからだ。実際に読んでみたらマジで載ってた。どうやって読んだかって？察せ。

それと、なんか僕が今住んでいる村では神？だらなんだかの信仰が凄ましかった。その神とやらは時々一番相性の良い聖職者に憑依して神託って奴を出すらしい。……でも、その神は何も言わない。僕に対して何も触れてこない。命を狙うこともない。何なら僕も神託聞けるし。神殿入れるし。意味がわからない、伝承は神が広げたんじゃないのか？それとも神を気取った誰が言ったでたらめ？そもそも神託は本当に神が言っているのか？なんにせよ、本当に……

「意味わかんないな……こんがらがり過ぎて。」

僕は、そこらじゅう殴られてボロボロなり、地面に寝そべりながら呟いた……

人は、弱い。集まって、群がって、価値を計りあって、誰かを下に見たくて、誰かより上だと感じたくて、今回はそれが僕だった。確かに、都合がいい。誰が言ったかわからない伝承の悪魔の子と特徴が一致し、しかもそれが遺伝ではない、自分の下に置く存在には最適な相手であり、自分の子でもないから情もたいして感じない。性格もあま

り社交的でないと自分でも思っている。全く、運悪いな……僕は。そんな事を、僕は村を歩きながら思った。今は大体の家が昼食をとっているのか人も殆どいなかった。少なくとも無害な人しか居なかった。

「お前、何してんの？」

ふと、後ろから話しかけられた気がした。多分僕じゃないだろう。村の子供達は大体が親から僕に近づくなと言われているはずだ。

「いや、お前だよお前。」ガシッ

肩掴まれた。え？何？お金は持ってないよ？僕。

……振り返ってみると、そこには僕と同じ年くらいで茶髪で茶色の目をした男の子がいた。……見ない顔だな。そもそも皆が僕の顔見ようとしないから見れないか。ハハッ、ボッチジョークが冴えるわ。（´；ω；｀）

「……お前何で急に乾いた笑いして若干涙目になってんの？」

うわぁ、絶対引いてるなあの子。そのまま離れてくれたらお互いのため、僕だってこの子の両親から怒られたくないし、この子だってそれが原因で浮きたくはないだろう。

……それにしても、僕のポーカーフェイスと精神はまだまだ未熟だな、これしきの自虐ネタで涙目になるとは、そしてそれを隠す事が出来ないとは。ま、そもそも自虐ネタ言える友達全く持っていないしこれから友達出来る可能性も皆無なんだけどね。（´；ω；｀）

「まぁいいや、俺、この間この村に引っ越してきたばかりでさ、道案内してほしくて。いやぁ～、良かった良かった。どうせなら同じくらいの年の奴に聞きたかったからさ。」

……あっ、引っ越して来たんだ。道理で見ない顔だと思ったわ。村住んでる子の全員の顔そもそも見てないけど。と言うか見れないけど（笑）

……でもさ、それより思ったのがさ、

「なんでこの時間に？」

今昼飯時だぞ？この時間に出歩いてる奴は僕以外に殆どいないぞ？

「いや、ほらさ。俺めちゃくちゃ不器用なクセして無駄に力強いからさ。物をバンバン壊す可能性があるから引っ越し後の片付けしなくていいから時間潰しに村見てこいって言われてさ。あれ？なんかマズイ時間帯だった？」
　あ～なるほど、納得した。……ヤバい、どうしよう。これは無視するべきなのか、それとも自爆覚悟で案内するべきなのか……駄目だ。頭が回らない。スゲェ緊張してる。え？僕って実は人見知り!?
「いや、その、全然そんなんじゃないけど……」
　駄目だ、なんか全然呂律が回らない。心臓がスゲェバクバクいってる。ヤバい。口から心臓出そうっ！
「なら案内してくれよ。あ、俺の名前はカイムだ！カイム・クロケルだ！よろしくな！」
「え？あ、はい……リベンです……」
　この後、流されてそのまま軽く案内した。裏道使ってなるべく見つからないようにしながら。そんなこんなで、3ヶ月が経った……

――――――――――――――――――――3ヶ月後

「ハッハッハッ！おはよう、リベン君。」
　カイムとの交流は未だに続いていた。その一環でそしてどうしたんだ、そのノリは。頭打ったのか？
「おはよう。……カイム君、頭打った？」
「辛辣！ノリでやっただけなのに！」
　いや、訳の分からんノリに付き合わせられるこっちの身にもなってくれ。
「それで、要件は？」
「いや、今日暇かなって。」
　いや、わざと言ってんだろ。僕が友達いなくていつも暇なの知ってるだろ。……僕が悪魔って言われていることも。
「……ねぇ、僕が悪魔って言われてるの君知ってるよね？何でかまってくれんの？」
「う～ん、いやぁ、正直、俺は安全で、かつ一緒に居て楽しければ悪魔

だろうとなんだろうと良いんだよ。それより、返事をはよ。」
……なんだろう。気が抜けたわ。
「うん。暇だけど……」
「なら、俺の家行こうぜ！」
「うん、わかった。……は!?家!?」
何故いきなり!?
「そんな驚くなよ……いや、単に親にお前のこと話したら会わせてくれって言われてさ。」
「あ、うん。ちょっと待ってて。」
うん！そんなこともあるさ！納得しよう！

「おい、ガキ共。おとなしくしろ、死にたくなきゃな。」
僕の家を出てカイム君の家に向かっていたら何人かの山賊に捕まって縛られた。なんか斧とか剣とか持ってるな。
「おい！一体これはどういう……」
「うるせぇ！」
バキッ！
事態に混乱して抗議した男の子が思いっきり顔を殴られた。鈍い音がした。
「次余計な事喋ったら斬るぞ！」
「おい、この村の家全部探索終わったか？」
ふと、声のした方に顔を向けた。そこに居たのは、ライオンのような見た目の使い魔（ファミリア）の隣にいるデカイ筋肉質な長髪男だった。
「は、はい。ただいま子供を人質にとって捜索中です。」
「そうか、なら……捜索した家の者たちは縛ってここに集めておけ。」
「ハイ！分かりました。」
さっきの男の腰が低い。って事は、この人がボスか……。
ブチッ
ふと、隣で縄が千切れる音がした。隣を見ると、カイム君が腕力だ

けで引きちぎったらしい。ん？ちょっと待て？まさかっ！
「ウォォォォォォォ!!!」
その予感は的中した。カイム君は、おそらくボスであろう男に飛びかかった。あのバカッ！
ゴキッ！
男は、飛びかかってきたカイム君の首に回し蹴りをした。これも鈍い音がした。だが、明らかに骨が折れた音だった。
「ッチ！貴重な労働源が死んだか！」
男は、カイム君の首を触りながら言った。恐らく、彼らは僕らを労働源として使うつもりだったらしい。カイム君が死んだとわかったら無茶苦茶苛ついてた。
「ライオネル、食っていいぞ。」
恐らくあの使い魔（ファミリア）の名前だろう。ライオネルはグチャグチャと音を立ててカイム君の死体を食べた。僕は、目の前が真っ白になった気がした。
「貴様らか、ここを荒らし、挙げ句のはて罪のない子供を殺したのは。」
現れたのは神父だった。その神父は、いつも神託を与える人で、何度も見たことがある。
「誰だ貴様は。」
「私か？私は人が言う神という存在だ。」
「神？ふざけているのか？貴様は。」
「……それはそうと異形よ、貴様は死にぞこないのまま使役されても良いのか？」
「……。」ビクッ
神がそう言うとライオネルは、若干震えた。
「異形よ、私は君が私に使えると誓えるなら、許しをこうなら、君を許そう。そして、その誓いの証として、そこにいる山賊全員殺せ。」
その言葉は、異常なほどの覇気を放っていた。逆らったら死ぬ、そんな気がするほどの。
「ハッ！何をいうかと思えば！くだらない事を。そんなことをするはずないだろう！こいつはしっかり教育して……」

ゴシャッ！
瞬間、男の首が飛んだ。ライオネルがやったらしく、ライオネルの右の前足に血がついていた。
僕は、あまりにもでかいショックで意識を落とした……。

目を覚ますと、僕はナイフを持った男の人が僕に馬乗りの状態で座っていた……。
「お前のせいだ……お前のせいでッ！お前がいたからッ！娘がッ！殺してやるッ！ブッ殺してやるッ！」
僕は、無理やり男を突き飛ばして逃げた。火事場の馬鹿力だろう。普段には信じられないくらい力が出た。
「死ねェェェェェェェェ!!!」
男は僕に追いつき、ナイフを振りかざした。僕は、咄嗟にそのナイフを奪い、首の血管を斬った。
ザシュッ！
血が僕の顔に着いた。
「ガッ！」バタン
男は首を押さえ、すぐに倒れた。それと同時に、物凄い罪悪感に苛まれた。
家に走って戻って見ると、今度は三人が家の前で凶器を持って立っていた。……念の為ナイフを持っていて良かったな。何故か、その時の僕は普通じゃ考えられないくらいの身体能力で動けた。気分は最悪なのに、とても良い気分だ。矛盾している。この感覚はとても気持ち悪い。ぼくは、鍬を持った一人目を先程と同じくジャンプして首の血管を斬り、鎌を持った二人目を下から潜り込んで心臓を刺し、スコップを持った三人目を体制を崩し、その隙に喉にナイフを深く刺した。不思議と、罪悪感は消えていた。
その後も、何度も殺しに来たやつを殺した。
ザクッ！
何度も
ザシュ！

ナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモコロシタ。

アァ、ダンダンココチヨクナッテキタ。

朝、気づいたときには自分を殺しに来たやつは全員死んでいた。

……神殿にでも行こう。

神殿に着くと、神と名乗った神父がいた。

「その血、貴様は……何人殺した？」

「分からないな、それは。ただ、これだけは言える。この村は、悪魔の子によって滅ぼされたって。裁くかい？僕の事を。」

そう言うと、神父は申し訳なさそうに言った。

「いや、今回の件は私にも非がある。村人が貴様を殺そうとするのを強く止めなかった私にもな……」

「カイムの両親はどうしてる？」

「眠っているよ。山賊に殺された。あの少年のように、勇敢に立ち向かい、死んだ……」

「そうか……。」

「貴様は、これからどうする。」

「わからない。……一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「何で僕が殺されそうになったんだ？」

「……人は何でも理由を求める。それがで例えデタラメでもな。災害や事故、殺人なども。お前の命が狙われたのもそれだ。」

「つまりは八つ当たり？」

「そうだな……。」

「……僕は、神が嫌いだ。」

「それでも構わんよ。」

「だから、神だと名乗るお前を殺す。」

「そうか、この体の本来の持ち主が死ぬが、この体も長くは持たない。せめて、魂が寝てる間に殺してやれ。」
「止めないんだな。」
「どうせ、もうじき私は信仰する村人がいなくなって死ぬ。」
「そうか……じゃあな、神。」
ザシュッ！
僕は、殺したやつから奪った鉈で首をはねた。
バタン！
あッ、鉈ボロボロだな。捨てよ。
バシュン！
ん？
何やら、上から題名のない本が落ちてきた。でも感じる。これは僕のだと。最初のページには、栞が挟んであった。それと、何ページかあり、その内容は自分が殺した人間達の情報だった。確信した。これは僕の異能だと。そしてその能力も頭に浮かんだ。
「ハハッ！今まで殺した人間の情報をパクれるのか！そりゃいい！今の僕にピッタリだ！ヨシ！決めた！この異能の名前は『穢れへの崇拝（ネームレス・カルツ）』だ！」
そう言うと、本の題名の欄に、《Ｎａｍｅｌｅｓｓ　Ｃｕｌｔｓ》という文字が浮かび上がった。
僕は、静かになった村を出て、旅に出かけた……。

１２話　従兄弟襲来！

１２話

「貴様ぁ！避けるな！当てる事が出来ないだろう！」

ダンッ！ダンッ！

「あっぶねっ！そもそも魔銃力弾を当てようとしないで!?」

僕は今、久々に会った従兄弟に銃で撃たれそうになってます。

……何でこうなった？

――――――数分前

僕は、パーティーを作って数日。そこそこハードな戦闘任務ばかりこなし、はっきりと思い知った……僕、いらなくね？僕は、はっきり言ってパーティーで一番弱い。と言うか皆が強い。うちのパーティーの戦法としてはスピカさんとクラレさんが突っ込んで、リベンくんは後方支援権残党狩りと言う感じだ。僕は……荷物持ち権財布である。繰り返す、荷物持ち権財布である。あとは、何故かツッコミ役にもなっている。というか、前に何で僕を誘ったのか改めてリベンくんに聞いたことがある。その答えは……「え？困るよ、君がいなくなったら誰がツッコミ役をやるのさ！」ですって。だったらまだ財布か荷物持ちのがいいわ！って、口で言う勇気が無くて目で言ったら、「嘘嘘、冗談冗談。ジョークだよジョーク。」と言ってきた。胃が痛くなったからそのまま帰った。

「アルフォト様、トルテ様が玄関に……。」

「ありがとね、アリスさん。」

どうやら客が来たらしい。ちなみに、トルテというのは僕の父親の弟の息子、つまりは従兄弟だ。昔から何故か気が合う、それも周りが割と引くくらい。

「久しぶり。トルテくん。」

「久しぶりだな、アル。」

割と久々に話すなぁ～いつぶりだ？

「最後に話したのはいつだっけ？」

「半年ぶりくらいだ。……お前それ毎回言ってないか？」

「そう？あ、立ち話も何だし上がってきなよ。」
「そうだな。そうする。」
なんかここまでの会話が全部恒例みたいになってる気がする。
「家には今誰がいるんだ？」
「みんな留守だよ。兄さんたちは出張、姉さんとシャランさんは……どこ行ったか分からない。」
「多分またヤケ酒だろうな……シャランを巻き添えに。」
今度何かをシャランさんに差し入れようかな……。あんま喋ったこと無いから何を渡したらいいか分からないけど。
「……そういえば、なにかあったか？少し疲れているように見えるが……」
「それは……」
話すだけ話そうと思い、これまでのことを話した…
「撃ち殺すぞ？お前。」
「なんで!?」
「あ？だってお前はあの隠れファンが多いスピカ・シャックスとお近づきになったんだよなぁ？」
え!?そうなの!?あ、でもたしかに結構美人だな、スピカさん。でもその程度で？その程度で撃たれんの？痛いからいやなんだけど。
「その上ロリっ娘がメイドだと！うらや……けしからん！」
あんた今絶対ごまかしたよなぁ!?
ガチャ！
「失礼しまーす！アル様ー！フィナンシェ様とシャラン様が帰ってきましたー！」
クラレさんがノックもせずに入って来た。別にいいんだよ？僕の前では、でもさ、客が来てんだよ。……まあ、これから教えていくか。
「クラレさん、ノックくらいはしようか……」
「すみません！忘れてました！」
「……。」
チャキ

え？何で銃を構えてんの？

「貴様……絶対に容赦せんぞ………よりにもよってこんな俺好みの幼女とは………赦さん！」

アンタ本音出てるぞ！と、とにかく逃げなきゃ！

――現在

と、言うわけで逃げてます。………なぜ僕はこんな理由で撃たれないといけないのだろうか…………ヨシ！ムカついたから一発殴るか。それくらいなら赦される。

「見つけたぞ！もう逃さん！」

ダン！ダン！ダン！

多少痛いのは我慢しよう、殴るためだ。

「ッ!!」

撃った球が3発中肩、

やっぱ痛ぇ！でも我慢！

「お、おい？な、何を拳を固く握ってるのかなぁ～？え？ちょ待っ！」

「歯ァ食いしばれ!!!」

バキッ！

ドゴォ!!

思いっきり鈍い落としたな……。せめて傷くらいは治してやるか…………

とりあえず傷を治し、僕たちはすぐに仲直りし………

「貴様は俺を殺す気か？え？よりにもよって思いっきりぶん殴りやがって………」

「お互い様でしょ。え？理不尽な理由で銃向けられるよりかはマシでしょ。」

………てるわけではなく、正直、若干ギスギスしてた。いや、これでもかなり平和な方だ。なぜなら、前なんて殴り合いながら言い合ってたから………

「何してるんですか？」

突然、かなりドスの効いた声がした方向に二人とも振り向くと、

シャランさんがいた
「え？いや、その……」
ヤバイ、この人めっちゃ怒ってる……。ふと、トルテくんを見た。お互い頷き……
「申し訳ございませんでしたぁ!!!」（土下座
お互い思いっきり土下座した。
「すみませんですんだら警察要らないですよね？こんな真っ昼間っから騒いで、ガキですか？それに、廊下の壁もところどころ凹んでますし。」
「え？いや…それはトルテくんが……」
「おい！貴様！裏切るのか!?」
「うるさい……」
「ハイ！すいません！」
え？何？シャランさんってこんなにこわかったの!?
「確かに、発砲して騒ぐ原因を作ったのはトルテさんです、それに、その撃った弾で壁も凹みました、ですが……アルフォト兄さんは不死だから受けることが出来ましたよね？それに……見たところかなりトルテさんも威力を抑えていたようですし、受けきるのは容易のはずです。」
「いや、だとしても痛いのは……」
「受けることが出来ましたよね？」
こ、こわい……
その後、しばらく説教された……

説教のあと、特にやることもなかったからトルテくんと一緒にギルドに行った、最近なんかたよっとだけ足が早くなった気がする。現に、大分早めにギルドについた。そしたらなんか、リベンさんがいた。
「ん？何？この人は？」
「俺はトルテ・グレイロードだ。……貴様は、『神嫌いの聖職者』のリベン・ソロモンか？」
神嫌いの聖職者ってもう二つ名になってんのね。

「お、知ってるんだ、僕の事を。」
「有名だからな。」
「君ほどじゃないよ。『鷹の目』のトルテくん。」
　え？鷹の目？何それ、カッコいい!!
「どうする？一緒のパーティー入る？」
「え？入れるんですか!?」
「ああ、パーティーが四人まで、って言うのは暗黙の了解だから、ルールじゃない、つまり、破ったら変な目で見られるけど…罰せられはしない。」
　ま、マジか……
「いや、やめておく。俺は今のままでも満足だ。特に入る理由もない。」
「本音は？」
「一匹狼ってカッコいいだろ。」
「ブフォｗｗｗなかなか面白い人だｗ」
「では、またな……アルフォト。」
「え？帰んの？」
「一仕事終えてからな。」
「そう、じゃあね。」
　バンッ！
「ッ！」ビクッ！
　突然、ギルドの扉が勢い良く開いた。扉の先には、何人かの鎧を着た騎士が立っていた。当然、周りはざわつき始めた。その時、その鎧着た騎士の中から人が出てきて、僕の前に立ち、逮捕状を持っていた。
　……え？逮捕状？なんで？なんにもしてないよ？
「君がアルフォト・グレイロードだね？」
　騎士たちの真ん中にいた青い髪で青い目の男の人に話しかけられた。……どっかで見たことあるな、この人。
「は、はい……そうですけど……」
「君には、ある村を襲撃し暴行及び殺人未遂の疑いがかけられている。よって、君の身柄を取り押さえる。」

え？全然そんなことした覚えがないんだけど……

「それ、いつの話？」

リベンさんが騎士たちに疑問をぶつけた。勇気あるなぁ～この人。

「一週間前の話ですよ。外見の特徴が完全に一致しているからね。疑いが晴れるまでは拘束する。」

「それだけじゃないでしょ？」

「根拠は？」

「勘だよ。」

勘かよ。

「……簡易的な魔力の鑑定を行った結果、ほぼほぼ同一人物とみなした。だから、詳しく鑑定している間、身柄を拘束する。」

「それだけで貴族の身柄を拘束することは難しいんじゃない？」

「そうですね、ただ、その村のギルド全員で挑んで負けてますからね。それほどの実力者である可能性を秘めているなら、厳重に拘束し、鑑定の間に逃げられないようにするべきととりました。」

「なるほど……アルくん、仕方がないサクッと捕まって無罪証明してサッサと戻ってきてよ。」

「は、はい……」

僕は、胃がめちゃくちゃ痛くなった。

１３話　どんなに言われようとやってないものはやってない！

１３話

胃が、胃が痛いです……

「……。」

「……。」

シーン

だってさっきから事情聴取って割には静かなんだもん！

僕は、鑑定が終わるまでしばらく拷問室の中で待ってろと言われた。対面になる形で座っているのはさっきの青い髪で青い目の人。言いにくっ！名前くらいは聞いとくか……

「えっと、あなたの名前は？」

「僕の名前は、パラド・アビンスだよ。アルフォト・グレイロードくん。」

「そう、なんですね……」

バンッ！

突然扉が開いた。結果が出たのだろうか、かなり焦った様子で出てきた。

「落ち着いて、ゆっくり、それで？そんなに急いでるってことは結果が出たんだよね？」

「は、はい……け、結果は……アルフォト・グレイロードと同一人物と出てきました。」

そう言って、彼は結果の紙を見せてきた。その上には確かにアルフォト・グレイロードの名前と、一致したという結果が書かれていた。

「は？」

おかしい、僕はこんな事はしていないし、一週間前は屋敷で爆睡してたはずだ。そのはずが…なんで？

「アルフォト・グレイロード。器物損壊、暴行、殺人未遂で逮捕する。」

……おわった、僕の人生。

俺は、困惑していた。簡易的な鑑定でも当たる可能性は７０％は超えている。つまり、アルフォトは事実上逮捕されたのだ。訳が分からない。さっきまで雑談して、軽くじゃれ合ってた従兄弟がいきなり犯罪者なんて、本当に訳が分からない。だが、それと同じくらいわけのわからない奴が目の前にいる。

「君、誰だっけ？どっかで見たことあんなぁ～」

コイツ、アルフォトに似てる。顔だけじゃない、魔力の気配もそっくりだ。だが、俺が知っているアルフォトとどこかが違う……

「まずはそっちから名乗ったらどうだ？礼儀だろ。」

「僕？僕はね、アルフォト・グレイロードだよ。」

は？どういう事だ？でも、よくよく見たら似てる気が……いや、でもちょっと待て。

俺は、『鷹の目』を使いコイツを観察した。

「お、『鷹の目』を持ってるんだ。いやぁ、見ても何も出ないよ？」

見てみて分った。コイツはアルフォトではない、少なくとも、俺が知ってるアルフォトでは無い。顔のつくり、魔力、身長、手足の長さ、どれをとっても全く同じだが、筋肉の付き方、あと、若干右に傾いていた重心が真っ直ぐになっている。とりあえず、アルフォト（仮）でいいだろ。

「それで？君の名前は？」

「トルテ・グレイロード……」

名乗ると、アルフォト（仮）は少し考えているかのような仕草を見せた。

「うーん？どっかで……あ！思い出した！トルテくんか！」

「????」

な、なんだ？

「ああ、なるほど……って事はここは過去か。過去の僕に悪いことしちゃったな。」

は？過去？頭でもぶつけたのか？コイツ。

「ねぇ、僕……いや、もう一人のアルフォト・グレイロードはどこにいるの？」
「なぜそれを答える必要があるんだ？」
「そっか、なら……手合わせして、君が勝ったら僕が覚えている範囲で君が気になりそうな情報あげるよ。僕が勝ったら場所教えて？」
「いや、ちょっと待……」
「ヨーイ、始めっ！」
「話を聞け！」
まだうんともすんとも言ってねぇぞ!?
ブォン！
「お、過去でも使えるんだ、コレ。便利だなぁ……」
突然、空中に黒いゲートが出てきて槍が落ちて来た。さらに？を増やさないでくれ、頼むから。とりあえず、相手は長物だし、後ろに退きながら撃って様子を見る。運が良けりゃ誰かに加勢を頼むか……
ダンッ！ダンッ！
「ハハッ！狙いが正確だなっ！」
ガインッ！ガインッ！
「ッチ！」
槍で防がれた！コイツッ！改めて見ると結構強い！間合いに入ったら最後いつ死んでもおかしくない！格が違う！
……こりゃ本格的に加勢頼むか……戦力的にはアルフォトの５０人分くらいはほしい。ギルドから距離は１ｋｍくらいか……走れば間に合うか？
ダッ！
「あ、逃げんの？待て待てー」
ダンッ！ダンッ！
ガインッ！ガインッ！
こうやってある程度の距離まで近づいたら撃って（しっかり急所狙ってる。）足止めする。わずかしか稼げないが、別に良い。
ブォン！
またゲートが現れた。槍をしまって出したのはブーメランだった。

はぁ!?ブーメラン!?
フォン！
「ッ!!」ダッ！
思いっきりブーメランを投げてきた。頑張ってサイドステップ避けたが……これ戻って来るときに追撃食らうよね？鷹の目で見るか？いや、鷹の目はめちゃくちゃ集中しないと使えない……なら常に警戒しなきゃな。
ダンッ！ダンッ！
ダンッ！ダンッ！
あ、危ねえ……咄嗟に弾に弾ぶつけなきゃ危なかった。にしてもえげつないな……すかさず銃で追撃とは……ブーメランに気を取られ過ぎたら弾でやられ、かと言って対処に夢中になり過ぎるとブーメランでやられると……えげつない、コイツ。でも、ガキでも思いつく発想をすぐできるってすごいよな。
ダンッ！
とりあえず一発撃っとこ。
「あ、ヤベッ。」
「イッ！」
肩に命中。どうやら弾に弾ぶつけて防ぐやつ出来ないんだな……安心したぁ。
フォンフォンフォン！
「あ？」
突然、風を切る音が聞こえたから目を向けてみると、そこにはさっき投げられたブーメランが向かってきていた。……進行方向変えながら歩くべきだった。言ってるそばからブーメランの警戒解いてた。ヤバイ。
……一瞬だけ異能使お。
フォンフォン！
スッ
「え？」
アイツは驚いていることだろう。何故ならブーメランが当たる軌

道にあるのに当たってないからだ。
「……。」バシッ！
やっぱ普通に掴んだか、ブーメラン。今度俺も使おうかな、ブーメラン。

「え？あれ何？どゆこと？」
……僕は、教会に戻ろうとして、面倒くさいから近道を使って教会に向かっていたら、何かさっき会ったトルテくんが走っていた。
「助けてくれ！いきなり襲われたんだ！」
とりあえずしがみついてこないで。
「どゆこと？」
「ハハッ、待て待てー」
ダンッ！ダンッ！
「糞がぁ！」
ダンッ！ダンッ！
……どうやら銃弾と銃弾をぶつけたらしく、お互いが弾かれてどっか飛んでった。うん！この時点でおかしい！銃の腕イカれてんのかこの人！普通できねぇから！……まさか僕が普通って言葉を使うとは思ってなかった。でも、そう思うくらいにはおかしい。ただでさえイカれてるのにしがみつきながらそれをやれるのはもっとイカれてる。反動くるからしがみつきながらはやめてほしい。
「はぁ～痛い。」
そう言って、なれた様子で肩の傷から銃弾を取り出し、傷口にポーションぶっかけてた。……あの人アルフォトくんにむちゃくちゃ似てるんだけど。双子？
「あの人誰？」
「いや、本人がアルフォト・グレイロードって、過去がどうとか。とにかくめちゃくちゃ強いんだよ！助けてくれ！」
「助けてあげるから離れて。」
「感謝する！では、俺は後ろで援護射撃するから頑張ってくれ！」

あの野郎、サラッと押し付けて帰る気だな。って速っ!!足音しなかったぞ!
「今度は君が相手?」
「ハァ、めんどくさい。」
仕方ない、約束は守んなきゃな。と言っても、どこまで通じるかはわからないけど……。
ブォン!
何かデッカイ斧が出てきた。
ダッ!
速ッ!間合いに入る前に避けるかガード!あぁ、えっと、無いよ!無いよ!無いよ!あ、あったよ!
『瞬間移動(テレポート)』!!
バシュ!
ドゴン!
「あ、外した。」
よっしゃ!まだ生きてるぅ!どんだけ重いんだよあの斧!当たったら頭蓋骨砕けんぞ!
「やっぱ狭い場所だと使いにくいな、これ。無難に剣にしよ。」
ブォン!
今度は剣が出てきた。……もうやだよ……。

１４話帰っていいですか？

１４話

「ハハッ、オラオラオラァ！」

剣を乱暴に振り回してきた。何とか避けれた。

「ッ！」

何なんだよ、この人！気持ち悪いくらい戦法がコロコロ変わる！しかも場所や使う能力によって頻繁に変えてきやがる！恐らく僕と同じ相手によって戦法を変えるタイプ。となると、読み合いになるな。今のところは異能しか使って無い。だから戦闘技術等はパクれる事に恐らく気づいてない。というか、そうあってほしい。手札が全部バレたら単純な読み合いになり、その読み合いは経験の差が出やすい。恐らく彼の言葉を信じるなら彼は未来のアルフォトくんだ。かなり経験を積んでいてもおかしくない！正直うぜぇぇぇぇ!!!!

……よくよく考えたらアルフォトくんに僕の能力教えてたよな？え？それ覚えてたらまずくね？ま、まあ、手札全部は多分わからないということを祈ろう。もういいや、先手必勝！えーっと確かこのページに……あった！

ダッ！

とりあえず間合いに入る。

「螺旋撃！」

昔、どっかの有名な格闘家の自称一番弟子に喧嘩売られてうっかり殺しちゃったやつの技！そして練習したら割と強くなった技！

ドゴォ！

「グホッ！」

アルフォト（未来）が３ｍくらい吹っ飛んだ。

「やったか！」

うん！３ヶ月ぶりに使ったけど、精度は落ちてないな。帰ろ。

「ハハッ！やるねぇ、君。」

「マジでかぁ、もうやだよ……。」

どんだけしぶといんだよ、この人……。

「パ、パラド団長！大変です！」
ぼくが人生の最後を悟ったとき、連絡を受けたであろう騎士が叫んだ。
「どうかしたの？」
「村を襲ったと思われる人物が近くにいるという匿名の通報ありました！背格好、容姿も、更には使う武器も一致してます！」
「なんだと!?てことは彼は無実か。」
「そ、そうなりますね……」
そうなの!?ヤッター！やったぞぉぉぉぉ!!!!
「すまなかった。どうやら誤認のようだ。」
あ、でも待て、もしかしたら……
「え？いや…こんなこと言ったらなんですけど、まだ特定するのは早いんじゃ……」
「いや、武器をどのような物を使っていたかは一部の人間しか知らない。」
あーなるほどね。理解理解。
「そうなんですね……では、僕はこれで……」
「え？君も行くんだよ？」
え？
「え？」
あ、ヤベッ口に出ちった。
「いや、戦力は多い方がいいし、それに……君ギルドに入ってるでしょ？だから緊急事態に僕たちに手を貸すのは当然の権利だ。」
え？それって権利だし義務じゃないんじゃ……
「とにかく、行くよ。」
「ハイ……」
周りの圧力に負けました。

ほんっとに！コイツ押し付けてきたトルテくんはマジで許さない！今度会ったら螺旋撃食らわせてやる！そのくらい怒ってるよ！僕

は今！
「『時間の右手』！」
右手でアルフォト（未来）に触れる。動かなくなったが、3秒ほどで動いた。
……大体止められるのは3秒が限界か……割と長いな。なら、止められる3秒で魔術を打つ準備をするか。簡単なの位は出来るだろ。
……まあ、そんなに簡単に出来る魔術何て知らないけど……。なら言うなよって話だよな、ハハッ。
「なんかもう飽きてきちった、もう決めていい？……答えは聞かない！」
理不尽！シンブルに理不尽！
ブォン！
剣から斧に変わった、一撃必殺狙いか？
ダッ！
速ッ！一瞬で目の前に！間に合わなっ――――
ガキンッ！
突然、斧が横から弾かれ、その弾かれた斧の重量に体が引っ張られ、アルフォト（未来）は横転した。
は？どゆこと？あの威力から考えて魔力弾であることはわかるけど、こんな視界の悪い場所で狙撃なんか出来るはず……まさかッ！
「危機一髪だな。リベン。」
どこからともなく、トルテくんが現れた。
トルテくん！見直したよ！君にもこんなカッコいいところがあるなんて！
「ハハッ！めちゃくちゃやるなぁ、トルテくん。痛いじゃないか……」
「……。」ガクガク
「あの、大丈夫？膝めっちゃ震えてるけど。」
「だッ、大丈夫だッ！問題ない！」

「あの……なんで出てきたの？怖いなら。」
「そのほうがカッコイイと思ったからだ！異論は認めん！」
いや、実際かっこよかったけど台無しだぞ？
「安心しろ、応援連れてきた。」
「え？誰？」
生半可なやつだったら役に立たないぞ？
「それはな……かの有名な『勇者』だ。」
「え!?」
まじか……嘘だろ？あの有名な？……てかちゃっかりアルフォト（未来）も驚いてんのね……
「本気と書いて大マジだ。」
「で？その勇者本人は？」
「今来たぞ？ちょうど。」
ドンッ！
わぁい、真上からド派手な登場。もう分けわかんなぁい。
「君か？村を襲ったのは。」
「襲った？なんの事？」
「君が一週間前に襲った村だよ。」
……え？どゆこと？僕たち空気？
（ほっとけ、俺達は余計なことして足引っ張らないようにな……）
コイツ、直接脳内に!?？って、なんで僕が振り回されてんの!?こういうのは今のアルフォトくんの仕事じゃない!?
～～その頃のアルフォト（現在）～～
「ックシュン！」
「どうかした？」
「いや、なんか悪寒が……」
それとととてつもなく不本意なこと言われた気がする。
「そう、風邪引かないように気を付けてね。」
「それより……なんで移動方法が歩きなんです？」
「いや……馬車は今は違うところが使ってて……」
「いや、来たときに使ったのはどうです？」

「あの馬たち今寝てる。」
「いや……起こせば良くないですか？」
「よくよく考えてみな？それが原因で馬たちが一斉にストライキ起こしたら困るでしょ？」
「あ…ハイ……。」
世知辛いなぁ……。
～～リベン視点に戻る～～
「ハハッ！マジかぁ！君アレかぁ！僕の事を殺せる可能性持ってるやつかぁ！」
「ああ、かもね。」
軽口叩き合いながら戦ってる。と言っても、勇者は「ああ、かもね。」しか言ってないけど……。でも、明らかに違うのはアルフォト（未来）は明らかに剣を避けてる。現に、今は槍で戦っているのだが、乱暴に攻めない。ある程度のリーチを保って戦っている。僕たちにはなかった動きだ。だが、やはり総合的な実力はあちらの方が上らしく、勇者は攻め切るに攻めきれておらず、逆にじわじわ追い詰められている。
ブォン！
勇者が剣を振り下ろした。
ダンッ！
何故かアルフォト（未来）は屈み、槍で受け止め、いつの間にか出した銃で勇者を撃った。
急いで離れるが、遅い、銃弾はもう既に目の前に……
ダンッ！
……と思ったらリベンくんが横から魔力弾を当てて弾いてた。
やっぱり技術がおかしいよ、この人。
「感謝するよ。ありがとう。」
「フッ、気にするな……コッチが押し付けたんだ。援護くらいはしないと俺の体面的に悪いだろ。」
うわぁ、最後のがなければカッコよかったんだけどなぁ……。

「今度、何か奢らせてくれ。」
「ならいい店紹介してくれ。」
「了解。」
「ではな、俺達は影で援護してる。」
「……。」
それ、捉え方によっては「僕は戦いたくないからアナタが代わりに戦ってください、せめて援護はするんで。」って事じゃない？
（捉え方も何もそう言う事だよ。）
コイツ、また直接脳内に⁉？
「トルテ、貴様は魔術を使えるか？」
「いや、ある程度のは……」
正式には使える人を殺して奪った。先に襲って来たのはアイツ等だ。正当防衛だ正当防衛。
（その考え、ものすごく悪党っぽいな。）
コイツ、またまた直接脳内に⁉？……って、もういいよ！
ハア、アルフォトくん、戻って来てよ、そんで僕も振り回す側に入れてくれよ……とまぁ、我ながら割と最低な事を思った僕であった……

１５話　え？何この状況。

１５話

ヤバい……どうしよう……調子乗りすぎた。

ガチィン！

現在進行形で過去の勇者と打ち合ってます。わりと僕が押してます。

何でこうなったんだっけ？最初はただただ困惑してだけで、カツアゲにあったから返り討ちにして、そしたらやり過ぎちゃったせいでそこの村のギルドの人たちに勘違いされちって、ハイになってたから弁解なんてしようともせずにそのまま全員ボコっちゃって、んでそのまま流れに流れて今勇者とバトってると。

は？意味わかんねぇな。……ていうか勇者くん絶対僕のこと殺せるよね？僕の不死すり抜けられるってことは血が出るよね？痛いよね？やだよ。一思いに殺ってほしいよ。注文多い？うるセェ！何年生きても痛いのは怖いんじゃァ!!!!

さっきの弾丸だって普通に痛かったんだからね!?なんなんだよ!?あのイカれた銃の腕!?狙い正確すぎんだろ!?

いや……不死のバフがあるときは血が出ないし死なないから痛みは若干鈍いよ？だからこそ痛くても多少は我慢できる。でもさ……不死すり抜けられたらさらに痛いじゃん？若干鈍くなってギリギリ我慢できるだけなのにすり抜けられたらもう我慢できないよ？泣くよ？下手したら。

「まだまだ世界は広いですね……勇者と言われている僕を軽くいなせるほどの人が居るとは…少し、自惚れてたかもしれません。」

何言っているんだこの正統派イケメンは。君の剣をまともに当たらない…むしろ掠りもしないようにめっちゃ神経使ってんだよ。軽くじゃねぇんだよ、結構キツイんだよ。……もうトンズラかこうかなァ～

ダンッ！

銃声が聞こえたので、ほぼ反射でそれを首を傾けて避けた。

ッチ！
弾丸が頬をかすった、冷や汗が出た。（＊。ロ。）えっ？
……今、ヤバくね？狙い正確すぎない？
……ん？あれ？マルクくんじゃなくね？今の弾。トルテくんのは……もっとこう……当てること重視というか…多少ズラす程度だと意味がないというか…少なくともちょっと首を傾けた位で掠りはしない。むしろ当たる。頬の肉がっつり貫通してる。
「よっ！勇者！」
「あんたは……」
この人は……!!

「「「誰？」」」
「ッ！」ガクッ！
その場にいた全員がツッコミ、新しく増えたイカツイ白髪のオールバックの無駄にダンディーなオッサンが膝から落ちた。
「そうだよなぁ！全員俺に会ったこと無いよなぁ！」
「……なんか、すみません……」
謝りだす勇者。　ダメだよこのパターンは謝っちゃ。
「クソオオオオオ!!!」

案の定、オッサンは叫んだ。思ったより悲痛な叫びだった。ただひとつの問題点は……

……今戦闘中だよ？逃げていい？

「私、帰ります！それでは！」

「ハッ！おい！待て！おいボウズ！お前腕に自信あるなら手伝え！」

ダンッ!!ダンッ!!

「(分かった！)めんどくさい！だが、仕方がないから殺ってやる！」ダンッ!!ダンッ!!

「本音と建前逆だよトルテ君！あとやるってイントネーションがおかしいよ！」

「……逃がすかぁ!!」

「いや無理があるだろう!!それで誤魔化すのはあまりにも無理がありすぎる!!」

「……何やってんの？このガキども？なぁ、勇者くん。」

「サァ？あとあなた誰ですか？」

「……ノーコメントで。じゃ！アイツも逃げたし俺も去るぜ！アデュー！」

「ちょと待ッ……って、いなくなったか……。」

「「ハァ、ホント……なんだったんだ？」」

「……もう調子乗って変なことする前に元の世界戻る方法考えなきゃ……」

「「あ」」

突然、視界に入った二人組……一人は昔どこかで会ったような人。もう一人は…間違いない。過去の……この時間軸の僕だ。それをみたとき――

「フヒｗｗｗアヒャｗｗｗヒヤッｗｗｗ」

何故だか笑いが止まらなかった。

え？なんか笑いだしたんだけど……それも言っちゃ悪いがかなりキモい笑い方。でも、それが自分とほぼ同じ見た目してると

なると、少し不安な気持ちになる。なんだ？この微妙な気持ちは……

「……とりあえず、何で笑いだしたかとか、何で血が出ないとか、何で僕の隣に居るアルフォト・グレイロードと同じ背格好、容姿、魔力の波長なのかはおいといて……君？村を襲ったのは。」

結構緊張感のある言葉と共に、笑い声が消え去った。空気を察したようだ。

「いや……襲ったって言うか……喧嘩売られたから仕方なくと言うか……」

「うん、確かに喧嘩した跡はあったし、証言でも最初はいさこざ程度だと聞いてるよ。では何故、そのギルドに居る人一人残らずボコって戦闘出来なくしちゃった訳？少なくとも全治1ヶ月とかだよ？ひどいのは全治半年。やり過ぎだよ。明らかに」

うわァ、思ったよりやってるよ。この人。

「いや……その……成り行きと言うか……とにかく帰って良いですか？僕は……アレなんで、未来から来たんで。」

「え？ダメだよ？理由は後でゆーっくり聞くから。帰るなら一通りおわっあとね？」

うわ……逮捕確定。アーメン未来の僕。願わくばマシな監獄人生を……！

「……じゃ！」

ダッ!!

「「……。」」ぽかん

うっそだろアイツ！この空気でトンズラかくの!?ある意味肝が座ってやがるよ！

「追うよっ！」

「ひゃい！」

ヤッベッ！噛んだ！

「逃がすかよぉ！『信頼の証（シンボル）』!!」

そうパラドさんが唱えると、手から光の剣が出てきた。おそら

く異能だろう。そして、その剣をおもいっきり未来の僕に向かって投げた。
「あっぶね！」
間一髪で跳んで避けた。そこにさらに……
「『炎の槍（ファイヤランス）』!!」
魔法で作った炎の槍をぶちこんだ。さっきから投擲ばっかだなこの人。
「この人投擲ばっかだな!?」
言っちゃダメだよそう言うことは、煽ってんのかアンタは。そして避けるんかい！むしろ空中でアレ避けられんの!?スゲェ!?
「もうめんどくさい！ここら一帯吹っ飛ばす！」
え？
「ちょ……まっ！」
「『魔弾（マジック・キャノン）』！」
……ゴリッゴリの無属性魔法でした。しかも魔力固めて打つ奴。あれめっちゃ魔力食うで有名だよな。
「クソォォォォ!!『魔弾（マジック・キャノン）』!!!」
ウォォ！相殺した！スゲェ！
「……なかなか一筋縄では行かないね…」
……これ僕要る？要らなくない？
「戦うのはもうやだなぁ……」
「なら大人しくお縄についてくれ。それならこちらとしても無駄な体力使わずに助かる。」
「捕まえられる前提かよ……。」
「当たり前だ、まだまだ武器は出せるし、もう少しすれば遅れて応援も来る。楽勝とは行かなくてもほぼ確実に捕らえる事は可能だ。」
「いつの間に応援なんて……」
「いやぁ、手元にこんなのがあってね。」
そう言って、彼が懐から出したのは通信機器だった。どうやらリアルタイムで情報交換していたらしい。
「……こりゃ急いで逃げなきゃ」

「逃がさない！」
「『透明化（カメレオン）』」
消えた!?一体どこに!?
「どうやら彼が未来から来たのは本当らしいな……まさか現代で研究中である透過の魔法を使うとは…」
「え？でも、魔道具とかでも透明化出来るマントとかありましたよね？良く知りませんが…」
「それは古代魔道具（アーティファクト）だよ。現代じゃ失われた技術ゆえに、そのマントなどは国家が管理している。最も、古代魔道具（アーティファクト）の中では量産されたらしく、様々な国の人が持ってるけどね……噂によれば、どっかの国のお偉いさんもオークションで買ったらしい。」
マジで……仮にもとは言い古代魔道具（アーティファクト）を？絶対バカみたいな値段するよ。
「君の財力なら生活費を少し崩せば買えるんじゃない？オークションであんまり競い過ぎなければね。」
「マジですか!?……それより、これからどうします？逃げられたんですけど……それと、帰って良いですか？」
「これから話し合うよ……それと、君にはこれから話があるからね、帰っちゃダメだよ？」
「ええ……」
……めんどくさいしややこしくなってきたなぁ。

１５話　僕は明らかに被害者な気がします。

１６話

「必要な書類は書いたし、もう帰っていいよ。」
その言葉を聞いたとき、僕は飛び上がるくらい嬉しかった。

「そんなわけなんで依頼受けます！一人でも受ける奴ありません？」
「……切り替えのスイッチイカれました？昨日の今日ですよ？」
「仕方ないじゃないですか……リベンさんとトルテ君は休み、スピカさんとクラレさんは修行とかで珍しく暇なんですよ。……何より現実逃避したいです。ボッチ特有の無力感に苛まれているからどんな小さくても達成感がほしいんだ！」
「……意欲的なのは良いことです！はい、『ダンジョンにある呪われた道具の回収』です。その武器は出回るわけにはいかないから持ち帰りですけど。」
「エ？マジ？そんなもんギルドに任せて大丈夫？」
「逆です、ギルドだから大丈夫なんです。現に、騎士団が保持していたところ、罪人が脱獄中に盗んで使ったりしますからね。呪われた道具って呪いの魔力のせいで魔力探知機が壊れやすくて…罪人が入ってきても気づきにくいんですよ。人を置くにもそんなことで人員さけませんし。だからと言って壊せる物は極端に少ないし……じゃあもうある程度信頼の置けるギルドの人に持ち帰らせようと。」
「……納得出きるような出来ないような……ってかそもそも僕って信頼出来るか出来ないかかなりグレーゾーンだと思うんだけど……」
仮にも同じ見た目の奴が問題起こしてんだぞ？
「そこら辺は問題ないですよ。パラドさんがフォローしてくれたらしいですし。」
え？あの人にそんな優しい一面が？
「今度感謝しなくちゃな……じゃあ、それ受けます。」

「あ、一応壊せるかも知れないんでまず教会行って下さいよ？あと、この書類書いて下さい。あと、これとこれも。」
「……また書類かぁ～。当然だけど。」
「まぁ、下手すりゃ国家滅ぼせる武器の所有権持つんですから……当然使用後にも一々書類書きますよ？あと、手に入れたあともどのような効果がありどのような副作用があるとか。」
「ちなみにその呪いの道具ってどうやって検知するの？」
「なんか、国家が所有する魔道具にそういうのがあるらしいですよ？それで検知されると一番近いギルドで信頼出来てなおかつやりたい人に探させて出来れば壊させるんですよ。さっきも言った通りほとんどが持ち帰りですけど。ま、ほとんどの人が書類がめんどくさくてやりたがりませんけど……でもよかったですよ～やってくれる人がいて。これめんどうな分ボーナス上がるかも知れないんで。」
あんた絶対それ目当てだろ。
「それで？やります？」
「……やります。」
まあ、暇潰しついでに良いか……

僕は、ぶっちゃけ暇潰し感覚で来たことを後悔した。だって……明らかにダンジョンの見た目がヤバイんだもん。でも今さら断るわけもいかず、勇気を出してダンジョンに入る。
「……暗いなぁ、あと怖い。(((　；。Д。)))」
暗いのはヤダ。この歳になってみっともないとか言う人がいるけどみっともなくて良いから僕が暗いところが怖いのを肯定はしなくて良いから認めてくれ。
ガタッ！
「ヒィィィ!!(((　；。Д。)))ガクガクブルブル」
怖い！帰りたいヨォォォォ!!!!
「ったく、ここどこだよ！面白そうだと思ったけどここどこ!?」
誰かの話し声が聞こえた。ゴ、ゴーストじゃないよね!?
「お、お前！昨日の暴れん坊！なんでここにいんだよ！」

なんか知らないダンディーな人に話しかけられた。
「え？・え？・誰!?」
思わずそう言った……仕方ないじゃん。そんなこと言われても全くもって会った覚えが無い人に言われても困るよ。……まさか未来の僕か？まだ問題起こしてたの!?
「……いや、でも雰囲気違うな…そんなに昨日みたいに強そうじゃ無いし…」
アンタ聞こえてんぞ!?そういうのは本人の前で言っちゃいけないんだよぉ！せめて心のなかに留めるかある程度離れてから言え!?
「お前、昨日会った奴の双子かなんか？」
「え？……」
ヤバイ、これ何て言えば良いんだろう……正直に言う？いや、信じるか怪しい。僕だって最初は信じて無かったし、周りから言われてやっと飲み込んだって感じだ。
「そうか、悪かったな！勘違いして、俺の名前はガーダ・オルフェス。お前の名前は？」
「アルフォト・グレイロードです……」
……こういうタイプの人は流れに任せよう。その方が良いと僕の勘が言ってる。
「お！あの割りと有名な坊っちゃんか！噂だとスゲェわがままとか無類の女好きとかギャンブル狂いだとか言われてるあのアルフォト・グレイロード!?」
いやなにそれ!?最後のはトルテ君と賭博誘われたから行って割りとハマってたから別に良いよ。事実っちゃ事実だ。だけど前の二つは……いや、わがままだけは心当たり無いわけではないな……でも、女好きは覚えねぇよ！
「えっ？他に何かありました？悪い噂。」
場合によっちゃ泣くぞ。
「あ～、あとはロリコンとかだな。」
グホッ！よ、よりにもよって否定しきれないのが最後に……
思わず僕は膝から落ちた。

「大丈夫か？噂何て気にすんなよ！気楽にいこうぜ気楽によ！」
心配そうに声をかけてくれた。……でもなんでそんなに親しげ？
さっき会ったばっかだよ？
「ありがとうございます……でも、ガーダさんは何でここに？依頼受けたんですか？」
さすがにフランクすぎない？と思ったが普通にそんな言葉をかけてくれたのは嬉しかったので言わずにさっきから気になっていた疑問をぶつけた。
「いや？なんとなく給料下りたから放浪としてて……で、このダンジョン見つけたから何があるか気になって入った。」
「……そういうのって勝手に入って良いんですか？僕は呪われた道具の回収で来たんですけど、めんどうな書類書かされたんですけど……」
「そういうある程度危険な物を持ち帰ったりしなければ別に良いんだぞ？ただでさえダンジョンって魔物が多いんだから。腕試しとかで来る奴多いぞ？まぁ、それで怪我とかしても自己責任だけどな。」
へぇ～初めて知った。
「よかったら一緒に回るか？一人より二人の方が精神的に楽だろ？」
「是非！そうさせていただきます！」
よかったぁ！これで一人で暗い場所にいるという恐怖から逃げられる！

……やっぱり怖いです。助けてください。
「……お前、暗いの怖いのか？」
「……ノーコメントで。」
バレました。まぁ、良いんだけどさ…
「お？宝箱あるぞ？もしかしたらあの中にお前の探してるものあるかもな」
「……はは、そんなわけ無いじゃないですか……。」
そう言いながらも、とりあえず宝箱を開ける。
ガチャ

……中には鞘に入った双剣が入っていた。そしてその双剣には、ご丁寧に名前であろう「Ｋａ―ｓｕｔｓｕｉ―ｒｕ」という文字がそれぞれ刻まれていた

「……マジで？」

思わず、といった感じで二人とも声を発する。

えっ？はっ？こんな安直に？……製作者は何を考えていたんだろう。と、二人とも割りとマジで思った。

「よかったじゃん。簡単に見つかって。」

「は、ハイ……ありがとうございます。それで、あなたはどうするんですか？」

「うーん……まぁ、しばらく適当に回るよ。まだ魔物一匹も狩ってないしな。しばらくほっつき歩いて、見つかんなかったらそのまま帰るよ。」

「狩ったあとどうするんですか？」

これは単純な疑問。

「そりゃ売るよ？金稼ぎたいし」ニチャァ

そういうと、彼は笑いながら人差し指と親指をくっつけて金を表す仕草をした。

バコン！

「は？」

後ろでかなりデカイ音がしたので振り返ると、かなりデカイゴーレムがいた。

「……これ、なんとかなります？僕の武器は大きさを変えられる鎚ですけどここそこそこ狭いんで有効打は与えられそうにないです。」

「……俺も銃だからな～無理だ」（ゞノ・∀・、）

つまりはお互い有効打を与えられるのが関の山、死ぬ可能性（僕は例外）は大有りと……

「逃げるぞ？」

「ハイ。」

僕たちにはもうこれしか残されていない。

『Ｇａａａａａａａａａａ!!!』

ダッ！
ゴーレムが咆哮を上げるとともに僕は、いや、僕たちは一斉に逃げ出した。

１６話　逃げることは罪では無いと心のそこから思う。

１７話

ヤバいヤバいヤバい!!引きこもりにいきなり全力疾走維持して走る何て無理だよ!?肺が痛い！止まれ？死なないからいいだろって思った人。痛い思いをしたくないから却下。

「オイ！俺は逃げるの慣れてるからいいが、お前大丈夫か!?」

逃げる事になれてるってあんたどんな人生送って来たんだよ!?もしこんな状況ばかり味わってんなら大層いい人生送ってることだな!?（皮肉）

「ッ！」

返事しようにも出来ねぇや。つらすぎて。

「オッケー余裕は無いと。なら隠れんぞ！」

え？どこに？

『Ｇａａａａａａａａａａ!!!!』

それも今叫んだ巨大なゴーレム相手に。しかもバッチリ視界に入ってるし。

「簡単だ。囮を使う！」

そう言うと、ガーダさんの数が増えた。

……ん？増えた!?
「俺の異能は自分の数を増やす異能！それは本物であり偽物でもある！」
「その名を『偽物か本物か（リアル・ミラージュ）』!!!!」
なに言ってんだ？この人。
「で？どうする？どっちが死ぬ？……よし、アルフォト。お前が決めろ。どっちを足止めに使う？」
何て選択押し付けてきてんだこの野郎。え？え～
「ミッ……みぎで！」
「オッケー！行ってくるよ俺！」
「おうよ！できるだけ時間稼げよ！」
「分かってるよ！お前もせいぜい金稼いで満足してから死ねよ！」
そう言うと、右の方で走ってたガーダさんはUターンし、ゴーレムに向かって走って行った。……え？何この死ぬ前提みたいな別れ。泣くに泣けねぇや。
「……さて、アイツが時間稼いでる間に打開策見つけなきゃね。」

「え？ほっといていいんですか？」
「良いんだよ、死ぬ前提だし。あのまま何も出来ずに死ぬよりは良いだろ。人間は誰しもカッコつけて死にたいもんなのよ。特に男はねッ！」
……言っちゃ悪いけど死ねない僕にこれは当て付けかな？こんな時に死にゆく姿をカッコイイって思わせないで？僕悲しくなっちゃうじゃん。

そんなこんなで、僕たちは偶然見つけたスペースに隠れこんでます。ダンジョンが迷路の形してて良かったよ。……まぁ、そのおかげでゴーレムに見つかるのは時間の問題……何なら歩く音で近くに来てる事分かる距離までいるんですが。
「……そいやお前あの武器使えないか？ほら、あのデカイ宝箱に入ってた双剣。お前の懐にあるやつ。」
「……ほんっ……とだっ！」
ヤバい、息が荒れて上手く喋れない。でも必死な時って割と気づかない物だな。正直どんなデメリットあるのか気になるが……使うしか無さそうだ。
「……とりあえず水でも飲んで落ち着け。俺今水持ってないけど。」
ならポーション飲も。
ゴクッゴクッ
ぷはぁ！生き返るぅ！疲れたときのポーションもとい水はしみるなぁっ！
「……始めてみたわ。水代わりにそこそこ質のいいポーション飲むやつ。俺もそんな事をしてみてぇよ。」
「……さて、行ってきます。」
「おうよ、俺は逃げるかもしれねぇから。」
「それでも良いですよ……僕、死にませんし。」
第一、初対面でここまでしてくれたことに感謝だ。思えば、最近は

気のいい人ばかりに会う。ガーダさんも含めてね。
「ハッハ！もしホントなら生きて再開したら飯奢ってやるよ！そんなに高くないやつをな！……俺が奢るのは珍しいぞ？」
「そういうの自分で言っちゃうんですね……まぁ、期待して待ってます。」

『Ｇａａａａａａａａａ！！！！』
……とうとう目の前まで来てしまった…しかも返り血浴びてる…絶対あの人のだよなぁ……にしても、もう逃げられないな。腹くくろう。
僕は、鞘から双剣をそれぞれ取り出した瞬間、僕の体は熱くなり、そこそこ溜まった疲労がまるでなかったかのように感じた――――――――が、
ドクンッ！
「ぐぁ！」
突然、体を激痛が襲う。ものすごく痛い！……だが、その痛みも次第に消えてった。コレナライケルッ！今はなぜだか知らないが、勝てるビジョンしか浮かばない！
「ッ！」
僕は思いっきり踏み込んだ。僕でも驚くほど速くゴーレムの眼前に接近し、スローに見えるゴーレムの動きより速く、ゴーレムの腕を斬りつけた……が、流石に硬く、傷をつける程度で終わる。
ドクンッ！
「がぁ！」
またもや突然全身に激痛が走る。だがやはりすぐに収まるが、思いの外隙が多かったらしく。ゴーレムの反撃を食らうが、とっさにカースツイールで受け止める……が、やはり衝撃自体は殺せずに、僕は吹っ飛んだ。
ドゴォ！
凄くでかい音がしたわりには背中がかなり痛くなかった。というか、それよりもカースツイールがあのゴーレムのパンチを真正面から

食らって全く傷ついていない事に驚いた。
『Ｇａａａａａａａａａａａ!!!!』
ゴーレムがまた襲いかかってくる。
……斬れないけど傷は付けれるか。なら、削るか。
ガリガリガリガリッ！
僕は高速で双剣を振り回し、まずは右腕から徐々に削っていくように攻撃する。……にしても凄いな、全く刃こぼれしてない。普通するよね？刃物ろくに扱ったことないから良う知らんけど。こういうものなのか？
ドクンッ！
「～～～ッ！」
またもや激痛が走るが、流石に慣れて削る作業を続行した。
……やっぱり効率悪いな、これ。普通に斬るか？
『Ｇａａａａａａａａａａａａａａ!!!!』
ゴーレムは、ガードするように構えていた右腕をそのままに、左腕を振りかぶる前動作をする。
「あ、ヤベッ！」
バコンッ！
今度はもろに食らう。
ドゴォ！
壁に思いっきり背中をぶつける。
「カハッ！」
……ヤバい！何でこの感覚を忘れていた？痛いって感覚を！自分には無理だって感覚を！くそったれ！こいつのせいか!?
僕は、カースツイールを見た。
この感覚は、酒に酔ってるのと同じだ！……自分が強く感じるけど、その分油断が多くなり、慢心が強くなる！……今回ばかりは、小心者の僕に感謝だな。
……僕は間違っても自分の実力以上の見栄は張りたくない。それが僕の意味不明なプライドだからだ。
僕は、生き様は死に様に直結まではいかなくても、そこそこ繋がり

はあると思う。
それに、死んだ後にせめて僕と仲いい人くらいは墓参りしてほしいから！だから僕は実力以上の見栄張って、失望されたくないから！黙って従えよ！
僕に要らんことさせんなよ……、カースツイール。
……ところでさ、今めっちゃ恥ずかしいんだけど。何一人でこんなこと言ってんの？
ああ、これがゴーレムの目の前じゃなかったらのたうち回ってるな。
『Ｇａａａａａａａａａａａａａ！！！！』
……どうしよう。何も思い付かないや。異常に固いんだもん、コイツ。……あ、いいこと思い付いた。
ダダッ！タッ！
僕は、助走をつけて思いっきり跳び、鎚の頭部をゴーレムの背中辺りでダンジョンのスペースいっぱいに無理やりでかくして、姿勢を無理やり崩した。
……やっぱりあったな首辺りに間接部！
ガイン！
首の間接部に思いっきり刃をたてる。やっぱり硬い！でも、腕よりはマシ！一応挟めたから、後は思いっきり差し込んで梃子の原理で首をもぎ取る！……カースツイール折れないよね？大丈夫だよね？信じてるよ、君。
ググググッ
「ふんっ！ぬァァァァァ！！！」
「Ｇａ!?Ｇａａａａａａａａａａａ」
「暴れんなッ！……フゥー、いっせいのっ!?!?!?せッ！」
ビキッ！ビキビキッ！
大丈夫だよね!?これ大丈夫だよね!?カースツイールの音じゃないよね!?ゴーレムの音だよね!?
……考えても仕方ねぇ！もうここまで来たらもう殺るしかねぇんだよ！やけくそだこのヤロォオ!!行くぞコラァァァァァ!!!

「ふんがぁ！」
ビキッ！ビキビキビキッ！
バキンッ！
『Ｇａ――――』
ゴーレムの首が思いっきり吹っ飛んだ。
……よ、よかったぁ…折れたのが剣じゃなくて。
僕は、心のそこからそう思った。

１７話　人に奢ってもらった飯は妙にうまい。

１８話

ふと、違和感を感じて掌を見る。

「うわ……なんだこれ……」

手が一瞬消えかけてた……すぐにもとに戻ったが。

「僕に近くなったのか？いや、それとも……」

ちょっとめんどうなことになったな……

「お、生きて帰ってきたか、アルフォトきゅん。」

「まぁ、なんとか……後その呼び方なんですか？」

初めて言われたぞ、その呼び方。

「ってか、待ってたんですか？」

「いや、最初は帰ろうとしたんどけど……なんかここでも響くようなお前の雄叫びが聞こえたからな。気になって待って見た。」ニヤニヤ

「……さいですか。なんです？その軽くおちょくるような顔。」

「おちょくってはないサ～意外だっただけ。お前もあんなに男らしい（笑）姿があるなんて。」

あんた見てたの!?

「ああ、やっぱ心配で……必要なかったけどな。」

ヤベッ！声に出てたッ！

「その謝罪の意も込めて、こいよ、飯おごってやる。店は……俺の決めた場所で良いよな？」

え？マジで奢ってくれんの？……そういうこと初めてだから地味に嬉しい。

「え、ええ、別に構いませんが…」

でもやっぱり慣れねぇ！

「ＯＫ！じゃあ行くぞ！」

「ちなみに、どこ行くんですか？」

「酒屋だよ、つー訳で、今日は飲むぞ～！」

「あ、ハイ。」
……酒初めてなんだけど、僕。

「あ、そいやお前飲むの初めて？」
「そう……ですね。前々から飲んで見ようとは思っていたんですが……なかなか勇気が出なくて。」
「あ～なるほどな。分からなくはないよ？そういうのは。ま、俺はソッコー手ぇ出したけどな。」
ガチャ
「ハァ……」
扉を開けた瞬間、ジョッキ持ってため息ついている人を見つけた。
……こういう声って聞こえやすいよね。僕だけかな？そういうの。
「あちゃ～空いてねぇな。仕方ねぇ、空いてる席に座らせてもらうか。……ねぇ、ちょっと一人だったら座って良い？」
そういって、唯一集団席に一人で座ってた人に話しかけてた。……他に席が空いてなかったのかな？にしても、ガーダさんのコミュ力スゲェな、尊敬する。……ん？その人さっきため息ついてた人じゃね？
「……どうぞ。」
「お、サンキュー♪お兄さんいい人だね～オレ惚れちゃう。」
「……」
うわ、対応がめんどくせぇって顔してる。……なんか誰かに似てね？この人。
「ワ～オ、すべっちった？おじさんショッキ～ング!!」
「うわ……地味にうぜぇ…」
「君たちわりとドライ……お父さんはそんな子達に君たちを育てた覚えはない！」
「いや、育ててもらった覚えはないんですけど。」
「オレもだ……後アンタとはオレの記憶が正しければ初対面だ。」
「クソ！正論だ！何も言い返せねぇ！」
……むしろあの対応か乗っかるかしか言うことなくね？ならどち

らにしろ返すの無理じゃない？
「ところで、君は何て名前？俺はガーダ・オルフェスこっちはアルフォト・グレイロード」
「ど……どうも……」
「……ナハトだ。」
「そ、よろしく」
……う～んやっぱり誰かに似てるな、ナハトさん。
「ま、それより座って飲もうぜ、アルフォト。」
「あ、そうですね。」
確かに、いつまでも突っ立ってては邪魔だろうな……反省反省。
「ンで、なに頼む？」
「いや……その……おすすめとあります？ナハトさん。」
「なんでオレに聞いた？」
「……いや、まぁ、何となく。」
ちょっとガーダさんだと不安だからです。
「……分からないな、酒は人によって向き不向きがあるからな。最悪メニューから適当に選べ。」
じゃあ最悪を使おう。……ガーダさんには失礼だけど。
「そうですね、分かりました。」
「あ、すいませーん！」
「俺はでウィスキー、ロックで。」
「じゃあ僕はエバークリアのストレートで」
「かしこまりました～」
「……お前、嘘だろ？」
「え？」
「おまっ、それ初めてで飲むにはハードル高すぎるぞ？」
「……ゴフッ!?!?!?」
なんかナハトさんが明らかに動揺してるんですが…吹いてるし。
「そうなんですか？」
「いや、そうだろ！」

「いまからでも遅くはない！取り消せ！幸い、混んでるときは来るのは遅く……」
「お待たせしました～」
「「嘘だろ？」」
そう言った時には、もう酒は置かれ、飲むしかない状況が出来上がった。
「お、おい、どうする？オレ飲めないぞ？これ。」
「オレも自信がない。……もう水頼んで割るくらいしかないだろ……」
そんな不安を煽るのやめて？怖くなっちゃう。……ま、出されたもんはもんは飲むけどさ。もうめんどくせぇ、一気飲みだ一気飲み。
ゴクッゴクッゴクッ
「マジか……」←ドン引き
「あ、思ったより軽いですね、コレ。」
「ハァ!?マジでいってんの!?」
「コイツ……初めてとは思えない。」
「？早く飲みましょうよ。」
あ～でもちっとめまいがするな。というか眠くなる。
「……もう良いや、飲もうぜ！もう飲んじまおう！」
「……ヤケクソ気味になってるな……てか何でオレも参加してんだ？」

そこそこ飲んだあと、割りとすぐにお開きになった。ちなみに、ナハトさんは先に帰った。
「ンじゃ、会計してくる。」
「え？良いですよ、僕結構持ってますし。」
「良いって良いって、俺が良い度したんだから。……初っぱなからエバークリアのストレート飲むとはさすがに思わなかったけど。」
「あれそんな異常なんですか!?」
「何かしらで割ってたら良いけど、ストレートだとな～下手すりゃ結構な酒豪でも危ないぞ。」

「マジですか……」
　そりゃ異常だわ……
「ッてなわけで、先帰って良いぞ？」
「あ、ハイ。分かりました。」

　あ～疲れた～眠っ。馬車とかつかえたら良いけど、僕の立場上難しいんだよなぁ～妾の子なんてそんなに珍しくないんだけど……何で僕だけ？まぁ良いか、好き勝手やらせてもらってるし。
　ドッ
「あっ、すみません。」
　やべ、だれかにぶつかった。完璧に不注意だな、気を付けないと。
「いえいえ、こちらこそ……あれ？アルフォト君？」
　え？この人実は知り合い？
「え～っと～」
「え？覚えてない？」
「あ～すみません。名前が出てこないのと顔が見えにくいです。」
　周り暗いし軽く酔ってるからね、仕方ない。
「ほら、君が冤罪かけられたときにいた」
　あ！思い出した！
「あぁ、ジルさんですか。書類持ってきた。」
「違うよ!?何でそこ言ったの!?何で割りと目立たないかつ顔隠してた人覚えてて顔隠してない人覚えてないの!?顔見合って話したよね？僕と君。」
　だよね、こんなに明るいオーラ纏ってなかったもん。クローズ・ヘルメットで見えなかったけど。間違いなくこんなに明るいオーラ纏ってなかった。めっちゃ暗いくて気怠そうなオーラ纏ってた。
「あぁ、パラドさんですか。……でもあんまり部下のこと目立たないとかいったらダメな気が……」
　確かに影は薄いけど！でもいい人だぞ！前に会ったとき話がめちゃくちゃ合ったし。ボッチトークがお互いめちゃくちゃ弾んだわ。
「そ、そうだよね……迂闊だった。まぁ、でも確かに君たち休憩の時結

構仲良く話してたもんね。記憶に残りやすくて当然か。」
「すみません……忘れてて……」
僕がボッチなのこれが原因の大部分占めてね？そんな気がしてきたわ。
「あ、そろそろ行かなきゃじゃあね、また会おう。」
「アッハイ、また……」
そう言うと、僕はパラドさんと逆方向に歩き始めた。
……ん？ところで、何でこんなとこにパラドさんいるんだ？あの服装もどっかで見たことあるし……うーん、上手く頭が回らない。聞くか？いや……さよならって言っちゃったしなぁ…本人も急いでるって言ってるし……もういいやぁ、帰ろ、眠いし。疲れたし。

１９話　ゲシェタルト崩壊

１９話

「……まだ、書類あるんですか？」

「ハイ！バリバリあります！だから一緒に頑張りましょう！給料のために！」

僕は今、受付の人と一緒に書類書いてます。なんの書類かって？まずは一つ目、これはダンジョンの調査後の書類…具体的にはなにに出会って何を拾ってそれがどこにあったのか。これだけでもめっちゃ字が多い。……なんで書類ってこんな文字数多いんだろう、普通にめんどくさい。

二つ目はカースツイールと名付けられた双剣所有権の書類、そしてその効果など。あのあと、とりあえずカースツイールを壊せるか調べたら、ムリだった。物理的には当然ながら、浄化もやってもらったけど普通に弾かれたらしい。ちなみに、今カースツイールは詳しく効果を調べてもらってる。だから、とりあえず僕は白紙に使ったときの感想を書くだけらしい。詳しい効果などの欄は調べた機関が書くらしいから実際は僕が書く書類は所有権の書類のみ。

これだけ聞くと少なそうに見えるでしょ？実はね、違うんですよ……ななんと！二種類しかないくせに文字数が大量！更には似たような書類だけで書類が嵩張ってます！ＨＡＨＡＨＡ！……えぇ、どうやら、なんか内容同じでも送る機関……正式には見せるが違うらしく、それを一々書かなきゃいけないらしいです。魔法でコピーとかできないの？って、思いましたよ？当然。聞きましたよ？当然。そしたら……

「私もそれを思いましたけど、なんか魔法で複製するといくらでも偽装出来るってことで信用されるために全部手書きです。」

「……。」

もう何も言えない理由ですね。ド正論です。反論のしようがありません。

「それより、さっさと手を動かして書いてください。幸い、おんなじこ

と書くだけでいいんで。一回覚えたらあと楽ですよ？」
ちなみに、受け付けの人は僕の書いた書類にサインしてます。どうやら受け付けのサインが必要らしいです。……まぁ、ちゃっちゃと僕が書くより先にサインしてますけど……もう終わりそうだし。
「そういうのって、先にサインして大丈夫なんですか？」
「う～ん、よく読んでからないとやめた方がいいですねぇ～普通に。」
え？3秒もかかってなかったよね？もしかして一瞬で読み終わるの？そういうもんなの？僕がおかしいの？僕もうあれだよ？読んでるうちに何行目読んでるかわからなくなってきてるよ？
「慣れですよ、慣れ。」
本当に、当然のように心読んでくる人多いよね。僕の周り。
こんなことしてる暇はそんなにないな。さっさと始めよ。
――――数分後
なんだろうな……これってこんな字？あれ？あれ？あってるよね？あってるよね？
「バリバリゲシェタルト崩壊起こってるじゃないですか……」
「すみません……」
ついでに、普段字とか書かなくて、汚くてすみません……
「そこはもう仕方ないですよ。それより、後はこの数枚だけです、頑張って下さい。」
――――さらに数分後
……やっと、やっと終ったアァァァァァ!!!
「おめでとうございます。じゃあ、これ出しに行ってきてください！」
「分かりました！行ってきます！」
「え？」
「ん？」
なんで不思議そうな顔してんの？僕おかしなこと言った？
「あ、そういえば……場所どこですか？」
「そっちかい！一人で行くことになにも突っ込まないのかい！」
「え？これ僕の書類でしょ？僕が行くのは当然では…」
「くそ！これだから世間知らずの坊っちゃんは！」

「ええ……」
　何かおかしなことしたのか？
「イヤ、普通ついていかないの？とか聞くでしょ!?だってあなた薦めたの私ですよ!?行って当然でしょ!?むしろ普通の案件ならあなた行かなくても良いくらいですよ!?」
「え？そうなんですか？」
　てっきり一人で行くのかと思った。
「……行きましょう。めんどくさい人たちの巣窟へ。」
　どこだよ、そこ。
「ギルドに出す書類はこっちが出すので、騎士団と教会へ一緒に書類を出しに行きましょう。」
「えっと……それで、どちらから先に行きます？」
「距離的に騎士団ですね。その後教会に行って、書類出して、そのついでにあなたが発見した武器を返してもらいましょう。」
「ハイ、分かりました。」
　よかったぁ～、迷子になる心配なくなったぁ～
「そういえば、めんどくさい人たちの巣窟ってどこのことですか？」
「あ～、それは教会ですね。話通じる人少ないんで。」
「そうなんですか？」
「ええ、イエスマンか保身バカしかいません。」
「ホントにめんどくさそうですね……」
「ええ、ホントにそうですよ。ま、保身バカの数人はきちんと話通じるし、イエスマンはプライベートなら結構好い人揃ってるんで、嫌いではないんですけど。仕事だと……」
「あ～、なるほど。そういうことですか？」
「そういうことです。」
　一部はプライベートだったら構わないけど仕事では関わりたくない、一部はプライベートでも仕事でも関わりたくないってか感じか。
「さて、さっさといい行きましょう。」

　とりあえず受け付けの人は出しに行って、僕は武器取り行こうって

ことで別行動になった。
「ん？あぁ、アルフォトくん。良く会うね。」
武器をとりに行こうと聖杯堂行ったらリベンさんが居た。
「リベンさん、居たんですか？」
何で最近ほぼ毎日会ってんだよ。いや、嬉しいよ？知り合いがいるのは。ただ、あまりにも会いすぎててしかもそれが偶然となると……ねぇ、
「……たまたまね。」
ちと怖くなってきたなぁ、偶然出会いすぎて。
「それは僕も思った。」
わぁ、ほぼ僕しか効かない読心術も健在と。
「ところで、君はどうしてここに？」
「え～っと、呪いの武器取りに来ました。」
「……君はいつも意図せずとも神の道逆走してるね。」
「え？そうなんですか？」
「そうだよ？逆に、呪いの武器を個人が管理するのを教会が良い顔すると思う？メリットがギリ多いから最低限手伝ってるだけだよ。現に、反対派も少なくないしね……だから書類が多いんだよ。」
「えぇ……まじですか。」
「そもそも、君の境遇とか、異能は教会から嫌われやすいよ？境遇は言わずもがな、君の異能なんて『儚い生命に対する冒涜だ！』って言ったりする人多いよ？ま、これは僕の想像だけどね。」
ホントに言われそうで怖いんですけど……。
「まぁとにかく、はい。これ君のでしょ？」
リベンさんがどこから出したのか白い布に包まれた双剣を渡してきた。
「あ、ありがとうございます。」
「いいっていいって、仕事だから。……それより、それ僕個人でも調べて見たけどなかなかトチ狂った効果持ってるね。ヒャッハーってなって死ぬって……」
うわ分かりやっす。そしてそう聞くとシュールだな、字面的に

……。
「まぁ、よかったよ。君の場合は異能で早く違和感に気づいてヒャッハーになりきってなくて。」
だから字面よ字面。あとそれと異能がなぜ関係が？
「えっと、なぜヒャッハーになりきれないのが異能と関係があるんですか？」
「あぁ、それはね……まずは君の不死の話だ。僕は、最初は君の不死は単純に生命力が無限にあるのかと思ったんだけど……そしたらいつまでもヒャッハーになってないとおかしい。」
「そ、そうですね」
ヒャッハーになるって動詞存在すんの？ハイになるって言わない？……アレ？ハイになるって動詞も存在しなくないか？
「そこで、僕が新たに建てた仮説は、君の身体は生命力がある程度減ると、あらかじめ用意してあるセーブポイントの時点の肉体に戻るんじゃないかってね。」
「ハ、ハァ……」
ヤバイ、分からん。そして何でテンション上がってんのこの人。
……この後、僕の異能の仮説等を2時間近くたっぷり聞かされた。
（尚、3分の2以上は聞き流した。）

２０話　拗ねた人はめんどくさい。

２０話

「あ～、辛かった～」

聞き流すの初めてだからキツかった～そして僕が目の前に来た瞬間に一部の人の目が曇ったんですけど。さっきまで受け付けさんと話してたのに一気に無表情になったんだけど。

「ホントホント、失礼ったりゃありゃしないよな～」

「あ～、そうです…何!?」

何か当然のように部屋に未来の僕いるんですけど!?

「あ、今は戦う気ないから止めてね?」

「いや、どちらにしろギルドか騎士団に連絡を……って、通信魔法使えないし魔道具持ってないや。」

「うん、知ってた。知ってたから来た。」

「性格悪いなぁ……僕の未来。」

「いやぁ、僕もうすぐアイディンティの消失により消えそうだから最後に暴れて一花咲かせようかなぁ～って。要は宣戦布告よ。」

「えぇ……」

最後まで何がしたいのアンタ。

「いやぁ、僕さぁ。殺されようと思って、僕を殺せるような強い奴に挑戦できるように強くなるじゃない?そしたらさ、何人かポックリ逝っちゃうし、何人かは衰えちゃって勝っちゃうし、残りは普通に勝っちゃうさ。しかもその後は僕より強いのは現れないし。退屈だよ。でも、ここにはまだ何人か強いのいるだろ?だから一人一人相手するのめんどくさいから数日後指定した場所に実力者全員一気にかかってこいやぁ!ってことで挑戦状送りつけてきた。ついでに実家返ってきた。」

「え?てことは意図的に来たんですか?」

「いや?偶然よ。この案もつい昨日思い付いた。」

スゲェ、その行動力スゲェ

「え?でも死ぬだけなら別に自分より強い必要ないんじゃ……」

「え？やだよ。なんで自分より弱い奴に殺されなきゃいけないんだよ。」
あ、コイツめんどくせぇ。絶対拗ねてる。いや、境遇考えたら分からなくはないけどなぁ……何か手段が目的ごっちゃになってそうな気が…
「それって、手段が目的とごっちゃになってません？」
「かもねぇ、僕も長生きしすぎて変なプライドできちゃったかもね。」
「……」
「まぁ、それはさておきさっさと僕は戻るよ。……君も来るといい。違う道を進もうとしている僕が、僕自身の過去とどれだけ強さが強いのか……そうだね。やっぱり来るといいじゃなくて来い。命令ね、答えは聞かない。」
「エッ、拒否権は……」
「無い。ってか答えを聞かない時点で察せ。」
理不尽極まりないな……
そう思い、思わず項垂れた。
「ハァ……あのですねぇ、せめて答えくらいは……いねぇ。」
顔持ち上げたら音もなく消えていた……え？とことん人間止めてね？未来の僕。どんな訓練したんだよ……
「……ホントに僕も行く羽目になったりして……」

え～、結論から言います。なりましたよ、行く羽目に。え？僕弱いのに？荷物持ち兼財布なのに？
「仕方ない。パーティー単位で呼ばれたんだから。」
「え？本当は何ですか？」
「君は候補から外れてたんだけど君がいたら面白くなりそうだから条件として付け足した。」
「え？そんなの飲んでくれるんですか？足手まとい一人つれてけって言ってるんですけど……」
「そこに関しちゃ大丈夫。戦闘経験の浅いクラレはともかく、僕やスピカは貴重な戦力だからね、むしろ足手まとい一人つれてくだけでそ

の二人がつれるなら別にって感じかな。」
「えぇ……」
　そんな理由かよ……
「当然、ただの足手まといなら連れてかないに超したことはない。君が不死ってことと、後、一番大きかったのは君がカースツイールを手に入れて、ゴーレムを一人で倒したってことかな。そのお陰で戦力に期待できそうだからギリギリ黒字かなって上が判断しただけ。」
「え？ゴーレムってそんな強いんですか？」
「あぁ、君が出会った個体は上位個体のプレーン体だよ、それを倒したってことは相当だからね。いやぁ、驚いたよ。まさか上位個体の残骸を持ってくるとは。」
　実は後日取りに行きましたよ、ハイ。そしてそれは武器屋さんに頼んで鎚を強化してもらってます。一瞬白目向くほど驚いてたけどむっちゃ目が燃えてたなぁ……
　～回想～
「すみませーん。」
「あら、いらっしゃいアルフォトちゃん。珍しいわね。アナタがここ来るなんて。あの時以来かしら？」
「あ、すみません。せめてもう少し顔を見せておくべきでしたか？」
「良いのよ、ここに来ないってことは、私のあげた武器に何にも問題がなかったってことでしょ？ならいいわ。」
「すみません、単刀直入なんですけど……少しいいですか？」
「いいわよ、聞くだけ聞いてあげる。」
「あの……来れ使って僕の鎚を加工できます？」
　ゴト
　僕は、ゴーレムの残骸の頭部を置いた。体の部分はギルドに渡した。
「エッ……」（*゚・д・）
　……渡したら固まったんだけど、大丈夫？
「え……ええ、ごめんなさいね、アルフォトちゃん。とても珍しい素材を持ってきてたから……」

「は、はぁ……そうなんですか？」
「フッ、燃えるじゃない……三日以内に仕上げるわ。これはワタシのプライドをかけた大勝負！ありがとうね、アルフォトちゃん。こんな良い舞台用意してもらって！」
「あ、ハイ。」
～回想終わり～
めっちゃ燃えてたなぁ…武器屋の人。
「それにしても、よかったよ君がいて。居なかったら元々邪念込めてた祈りにさらに邪念込めるとこだったからさ。」
それで良いのか聖職者……ってかなにこのデジャヴ。
「で？他の部隊はどうしたんです？今のところ僕たちのパーティーしかいないんですけど？」
「ハハ、それなんだけどね……僕たち以外は先に見つけて行っちゃった。」
「え？今日ですよね？作戦会議ィ!?」
何でこんなに驚いてるだって？話しかけてきたのがリベンさんじゃなくてマルク君だったから。
「何でいんの？マルク君。」
「いや……僕勇者……バラン君と同じパーティーだし。」
「え!?マジで!?」
「そんな驚く!?」
「いや、だって存在感薄いし……」
「酷い！そんなことないよね!?アルフォト君!?」
「いや……ウン。」
「オィィィィィィ!!???フォローしてくれよぉぉぉぉぉ!!!」
だってホントにうっすいんだよ。どのくらいかって？作者が忘れかけてるくらいかな。出てきたのも12話ぶりだし。（メタ発言）
「酷い！僕は本来こんなキャラになる予定なかったのに！（メタ発言）」
「……それはともかく、他のメンバーは？」
「バラン君は遅れてくるって。他の二人は……来たらラッキーって感

じかな。」
　言うて僕たちもクラレさんとスピカさん来てないけど。
「いやぁ、ゴメン！遅れちった！」
「あ、噂をすれば。スピカ来たね。」
「アル様！やっと来れました！」
「クラレさんも来たね。あとは……」
「すまないね、遅れてきた。」
「バラン君もキチンと来たね。」
「すまないね、マルク。そして君たちは……とりあえずリベン以外は初対面だね。始めまして、バラン・オーダーだ。『勇者』と呼ばれているけど…出来れば名前で呼んで下さい。」
　……この人、イケメンだ。トルテ君みたいな残念なイケメンじゃなくて、普通の……正統派のイケメンだ！そんな気配がする！
「他の人はしばらくしたら来る。そのついでに僕たちの手札を明かし合おう、連携のためにね。」
「そうだな、それが良い。俺もいい加減自分の異能を自慢したい。」
「……いたんだね。トルテ君。」
「あぁ、俺はフリーだから一人だけ呼ばれた。」
「そうなんだね…」
　二回目だ、慣れた。慣れるのが早くね？と思った方。僕は慣れることに慣れたんだ。
「まずは言い出しっぺの僕から…僕の異能は『審判の剣（ジャッジメント）』僕の異能は僕が間違ってると思う外的要因を斬れる。例えば、結界等を否定すればあとは結界に向かって剣を振れば強度関係なく壊せる。基本は剣しか使えないかな…」
「次は俺だな！」
「え？あ、ドウゾ（　。∀。）つ」
　ついに司会進行みたいなこと始め出したマルク君。
「君はいったいどんな珍しい異能を持っているんだい！」キラキラ
　リベンさんはめっちゃ眼をキラキラさせて話を聞いてる。
「俺の異能は俺や俺の魔力を纏ったものの存在そのものを歪ませ！あ

らゆるものを透過させる！その名を……『歪曲の幻影（ノンホールター）』だ！基本は銃による白兵戦や異能や『鷹の目』をフルに使った狙撃がが主だ。」
「おぉ！素晴らしい！そのような空間に直接作用する能力は珍しい！しかもその能力の特性上、何の動作も必要ないんだろう？」
「あ、あぁ……そうだな。」
　若干引いてんな、こりゃ。
「ますます珍しい！普通は能力の規模が大きかったりすると必要な動作が多くなる傾向にあるんだが……今回は空間に直接作用しているのに全く必要な動作がない……奥が深いなぁ……」
「えっと……次はリベンさんから言ってもらって良い？」
「あぁ、僕の能力は『穢れへの崇拝（ネームレス・カルツ）』…殺した相手の情報を本に記す能力だよ。出来る事は色々。色々な種類の魔法だったりあとは大体の武器や……他には近接格闘とかも出来るには出来る。」
　うん、知ってた。場が凍ることくらい。あまりに聖職者に向いてないもんね、リベンさんの能力。
「ぼ、僕はせいしきには異能はもってないけど、一応『剣神の加護』で剣術は多少……非力すぎて木刀しかもてないけど。」
　何か、剣『神』って聞いた瞬間にすゲェ嫌そうな顔してるなぁ……
「最後は…アルフォト君だね。」
「え？」
　あ、ヤバイ。僕も言うこと忘れてた。一番最後今朝する～！
「え、え～っと、僕の異能は『永遠の犠牲者（エターナル・ヴィクティム）』です。効果はとにかく死なないですね。血も出ません。武器は……いまはもってないですけどサイズを自在に変えられる鎚とバズーカと呪いの双剣ですね。」
「……ずいぶんマニアックだね……特に武器。」
「双剣はとにかくバズーカや鎚はなかなか聞かないですからね。」
「まぁ、扱いにくいからね～。基本は剣とか槍とか、たまに斧とかよね。」
「まぁ、それが基本だな。」
　……僕って薄々思ってたけど使ってる武器珍しかったのか

２１話　殺さない縛りで５０対１！……さあ、殺せないデスゲームを始めよう！

２１話
～ある森の中～

「良いか！相手は強敵だ！油断するなよ、容赦もするな死ぬことが出来ないらしいから殺す気でやれ！」
「あの……」
「何だ？」
「いや、勇者さん達や『デッド・オア・デッド』の方達とは合流しなくて良いんですか？強いんでしょ？彼ら。僕たちは５０人くらい集まってるとはいえ烏合の衆ですよ？返り討ちにされるんじゃ…」
「……お前の言いたいことは理解できる。……だがな、どちらも強すぎるから問題なんだ。いや、正式にはどちらもそこそこの規模の軍隊戦は無経験、その上強い。だから問題なんだ。それに、片方は信用が出来ない。勇者は信用出来るが……基本は単独戦だ、前線が一流なら、後方は相互理解が深い関係か、お互いに一流ではないと足手まといだ。」
「なら、トルテさんはどうです？彼なら奇襲やゲリラ戦や軍隊戦得意でしょ？」
「……アイツがいると銃の腕の次元が違いすぎて銃兵の指揮がダダ下がりだから駄目だ。……弾丸に弾丸ぶつけるって正気沙汰じゃないからな？……おかしい、おかしいよ！アイツはおかしい！バカじゃないの!?『鷹の目』使わないで六発全弾ど真ん中命中だぞ？狙いを一々定めずに連続でだぞ？心折れるよ！アイツみた瞬間銃兵辞めようって決心固めたよ。１５年も使ってたのになぁ……あんなの間近で見せられちゃったらなぁ……」
「実際に会ったことなんすね……」
「バカやろう、銃兵十人がアイツの腕見せてみろ？１０人中絶対８人は銃兵辞めるわ。そのぐらいだよアイツは。……まぁ、それでギル

ド辞める理由が出来てウキウキの奴もいるにはいるが……クソ！あの野郎！毎回毎回！幸せ自慢しやがって！いまじゃ結婚してんだぞ!?子供２人いるんだぞ!?こっちは独身だよチクショウ！」
「……どれだけあるんですか、トルテさん関連のエピソード……」
「片手じゃ数えきれん。両手両足使ってギリ数えられる程度だ。」
「えぇ…まぁ、それより、それに関して上の許可とってます？」
「もちろん、とれてる。トルテに関しては『あ～、分かるわぁ…』って顔で言ってる奴が結構いた。」
「そういえばギルドの運営って確か元ギルド所属でしたよね。」
「あぁ、銃兵がいてもおかしくない……」
「えぇ……それより、ここ本拠地ですけど、そろそろ攻めます？」
「そうだな、そろそろだろう。攻めるぞ！」
『オオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!』
――――――――――その頃のトルテ
「ッション！」
「いきなりくしゃみはやめて？ビックリするから。」
「悪い……誰か噂でもオレの噂でもしてんのか？」
まぁ、確かに噂されててもおかしくはない……のかな？

……え？数多くね？……さては全員暇だな？まぁ、冗談はともかく、殺さない縛りで５０人はちときついか？
……さて、気合い入れよっと！
「いたぞぉ！一気に攻めこめぇ！」
……これ行ける？峰打ちで。……骨２、３本は許せ、若者。
あ！そうだ！殺さないなら殺せなくすれば良いんだ！
「魔術領域を展開、領域名、『不死不殺の闘技場（アサーナトス・デス・ゲーム）』」
「なっ！……あくまでも殺す気はないって意味か？それとも殺すまでもないってかぁ!?」
「いや～、ウォーミングアップで本気出すバカいないでしょ？それと一緒だよ。」
「ケっ！舐めやがって！」

「……僕、ウォーミングアップでも本気出すタイプなんですけど……」
「え？……」
……こういう時って気まずいよね～、反応に困る。
「と、とにかくかかってこいやぁ！」
「よ、良し！行くぞぉ！」
「この空気で攻めれん…「るせぇ！」カハッ！」
「!?」
余計な事言う子には辻斬りを！……ついでに毒を。
「う……グッ！ど、毒かッ！」
あ、それ言う奴初めて見た。集団戦だからかな？それよりじゃんじゃん斬ろう！そして毒を盛ろう！そして一人にたいして集団で挑む卑怯者達に鉄槌を！大義名分は我に在り！アルフォト、行っきま～す！
ダダダダッ!!
「ハァ!?ちょっと待て！何であんな大量のゴーレムが居るんだよ！」
あっ、いっけね～、うっかり中位のゴーレム２０体位出てくるように設定してたの忘れてた～。いやぁ、そういえば昔は魔力ゴリゴリ食ったのに最近はあんまり魔力食われた感覚なくなってきちゃったなぁ……
『Ｇａａａａａａａａａａａａ!!!!』
……やっぱこっちにも来るかぁ～……ヨシッ！久々にぶっ放そう！
「『贋・戦神の槍（グングニル・ゼノ）』！」
あ、魔力込めすぎた。
チュイン！
バコン！
「お、おい……嘘だろ？」ざわざわ
「あまり固くなかったにしろ……頭を一瞬で!?」ざわざわ
「ば、バケモノだ……」
「お、おおオレは逃げる！こんなバケモノと戦ってられるかよぉ！」
「逃がさんよ、さっき拾ったもう一発！『贋・戦神の槍（グングニル・ゼノ）』！」

ザシュ！
「グホッ！」バタッ！
一応貫いたからね。直ぐ治るよ……痛みはあるから意識はないだろうけどね。……もう良いや。この武器飽きた、違うの使お。……ゼノシリーズはもう良いかなぁ～、もう使う意味ないし、めんどいし。あ～、でも槍は投げとこ。もう必中効果つけなくて良いや。魔力を込めずに拾ったらひたすら投げる！とられたらどうするのどって？このさいもう良いや！（全然良くない。）それ以外は基本は毒塗りの剣で斬り裂けぇ！どうせし死にゃあしねぇんだ！やりたい放題だぜぇ！安心しろよ、満足したらこの闘技場から出してやるよ。そしたら毒も治ってるよ！ヤッタネ！合法的に暴れられるぅ！
「くっ、クソォォォ！どうすりゃいいんだよぉぉぉぉぉ!!!ガッ！」

狙撃！不意打ち！毒！素晴らしいコンボだ！ソイドクコンボと名付けよう。ハッピィバァスデェイ!!ほら、耳を済ませてご覧なさい。ゴーレムとゲームの参加者達の喝采の声が聞こえてきます……
『Ｇａａａａａａａａａａａａａ!?!?!!』
「やべぇッ!!毒が回ってきた……」
『……Ｇ……ａ…』
「クソ、クソ、クソォォォォォォォォォォォ!!! やってやるよォォォォォォォォ!!!」
――――――数時間後――――――
あ、さすがにやり過ぎた。
シーン↑２０体すべてのゴーレムの残骸と５０人全員分が無傷で倒れている。
……毒塗りの剣と槍投げのひたすらのラッシュはさすがに悪いなって今更ながら思った、もしかしたらこの闘技場がトラウマになってたりして……やめてね？それはマジでやめてね？
「あ、闘技場消さなきゃ。」
バシュウウウウウ……
「……寝よ。」

困ったら寝よ。あ、それより前に新しい拠点に場所変えなきゃなぁ～……めんどくせぇ……

「ん？また会ったな…アルフォト・グレイロード。……ん？前会ったときとだいぶ気配が違な。」

「……誰？このおっさん、なんで僕の名前しってんの？」

ん～、何かみたことあんな～、このおっさん。

「誰がおっさんだ。まだ２８だ！……それより、お前何者だ？」

あ、２８なんだ。若いな……ま、僕からしたら１００歳でもまだ若いんだけどね。

「それよりさ、君。結構強いでしょ？なら相手してくんない？ちょっと不完全燃焼気味なんだよね。」

「ちょうど良いな。俺もお前の強さが気になってたところだ。」

「ありがと、どっかであったこと在りそうなおっさん。」

「だから俺はまだ２８だ！それに俺にはハント・ハーペンという名前がある。……この名前を聞かれたからにはお前は殺さなきゃいけないな。」

いや、君から言ったんでしょうが。

「……今から能力の効果時間か……ちょうど良い、最初から全力で行かせてもらう！」

「そこまで気にしてたのかよ、おっさんって言われたのが。」

「そういう事じゃない！全力を出しても問題がない相手だろうから言ってるんだ！」

あ～、そゆこと。嬉しいね～、それととても期待出来る。

あぁ、今めっちゃ表情筋緩んでる気がする……久々にとっておきを出すか……

22話　同じ失敗を繰り返す大人ってどうよ？

22話

ッチ！コイツ、やりにくいな……『贋・戦神の槍（グングニル・ゼノ）』使ってんのに全く歯が立たない。……能力がかなり厄介だな。恐らく異能は剣に触れたあらゆるものに移動した方向と方向に圧力をかけるのか？多分投げても失速して威力でないな、基本は相手まで一直線で起動読みやすいし。クソ！異能の種が分からんから迂闊に攻撃できん！こんなことなら一騎討ち乗るんじゃなかった！戦士の血って騒ぐと厄介だな……

「（不味いな……今は異能をフルに使いさらに種が十分にバレてなくて拮抗している状態……このままでは時間が過ぎて異能の時間切れとなり、使えないとバレた瞬間に殺られる。……今からでも逃げるか？いや、恐らくあの槍を投げてくるな。あの槍……一度資料で見たグングニルの贋作そっくりだ。出来る限りこの状態を保ち、出来れば逃げるという方針で行こう。こんなことなら多少ムカついたからってことで一騎討ち望まなきゃよかった……）」

「しょうがない。……あんまり使いたくないけど、アレだそう。『贋・雷神の雷霆（ケラウノス・ゼノ）』！」

「なっ！ケラウノスだと!?あり得ない、そんなもの、資料にはなかったぞ!?」

これ嫌なんだよなぁ……常に魔力をの操作に気を取られるし。……それに久々に使うからなぁ…

「（ッチ！伝承通りなら、いや、それは流石にないにしろ、重力でも、雷は曲げられない！しかも剣を伝って感電する！……逃げるしかない！）」

ダッダッ！

「あ、逃げた。ってか、速いなぁ……」

シュウウウウ……

ん？手でも焼けたか？……

ん？おかしいな、何か輪郭がぼやけて……眼がつかれてんの？

シュウウウウウ……
「あるレェ!?『贋・雷神の雷霆（ケラウノス・ゼノ）』が消えタァ!」
まじデェ!?聞いてないよ!……あ、そういえば僕も前に右手だけ薄くなってたなぁ…
だとしても、だとしてもだよ!アレめちゃくちゃ苦労したんだよ!
100年前にヤッッッッッッッと手に入れた武器よ!?何でだヨォォォォォォ!!!
「この世界の、馬鹿ヤロォォォォォォォォォォ!!!これが高齢者にする事かよぉぉぉぉぉ!!!」
注…普通の高齢者は調子乗って蹂躙したりしません。

今、僕たちは未来の僕を倒す会議をやっているわけですが……
「……ダメだな、全然勝てるビジョンが浮かばない。」
この通り、全然全く進んでません。
「トルテくんの射撃の腕は以外は各々の得意分野で負けてますからね……」
そもそも得意分野すらない僕はどうしろと?
「君は……アレだよ、肉壁?」
チャキ
僕は、無言でカースツイールに手を掛け……
「待て、流石にここで暴れられたら困るからやめて、リベンさんも、流石にあの言い方は僕でもあぁなる。」
「あれは流石に酷いわよ……もっと言い方あるじゃない、パワー要因とか。普通できないわよ?あんな鎚をでかくして振り回すの。」
「クラレでもムリです。それは誇って良いと思うのです!」
……それ、励ましてんの?それとも逆にコイツそれしか取り柄なくね?って貶してんの?
「「………。」」(´・ω・`)
………あの、やめて2人とも?悲しそうな顔するの、『お前色々苦労してんだな』って顔するの。無駄に響くの。心に。
「それはさておき、どうするんだ?これから。」

「そうだね……やはり彼女に頼むか……」
「え!?まじで言ってます!?あのキチガイに!?」
　エ、何かマルクくんが分かりやすいくらい嫌な顔してるしバランさんもなんとも言えない顔を……どんな人だ？
「ふーん、そんなに協力するのに渋る人なんだ、どんな人？」
「……いや、決して君たちが思っているような理由で協力を渋っていないんだ……寧ろ、依頼者に対して真摯過ぎると言うか……」
「依頼者？ってことは傭兵？」
「うん、そうだよ。」
「『不屈の魔術師』って言えば、分かるとは思う……」
「あっ、」
「あぁ、そういう……」
　え？なに？なにそのカッコいいあだ名。ぐらいの感想しかでないんだけど。
「……噂だと、依頼者の依頼には絶対に答えて、そのためには過労死も辞さないとか……」
　何で生きてんだよ、じゃあ。
「それには彼女の異能に深く関わっていてね…」
「どんな異能なんだ！気になる！」
「まぁ、それは本人に聞いた方が良いだろう、何なら自慢しながら話してくれるとは思う。」
「あ～、それはありそうですね。」
　こうして僕たちは、『不屈の魔術師』のもとへ向かった……

「ううっ、ぐすっ、何できえんだよぉ…」
　僕は、移動しながら『贋・雷神の雷霆（ケラウノス・ゼノ）』が消えたのを思い出し、再び泣いた。
　……ん？殺気？いや……でもなぁんかおかしいなぁ～、普通、心が乱れてるのに寧ろ安定してる……でも、感じ取れるってことは心を落ち着かせながら殺気を放ってんのか？……やるなぁ、コイツ。でもさ……

「でもさぁ、どちらにしろ殺気には変わりないんだよねぇ、感じ取れるってことはさ。ダメだよ？ちゃんと殺気も消さなきゃ。……ったく、人が傷心中ってのに……でてきなよ。」
　でてきたのは、恐らく技術だけなら先程の男より上であろう青年だった。
「……誰？君。」
「悪人に名乗る名前ってあるのか？親から貰った名前が汚れるからやだよ。」
「……。」イラッ
　え～、なにこの子～めっちゃ嫌いなタイプだぁ～
「あのさぁ、初対面の人を悪人って決定付けるのはどうかと思うよ？絶対友達いないでしょ君。」
「友達はいる。そして……お前のことは知ってるよ。見てたからな。」
「へぇ、見てたんだ。つまり君は自分が漁夫の利を狙うために何人もの人を見捨てて来たってことか……君の方が悪人じゃない？」
「いや、そのときは単純に遠すぎて手は出せなかったが、でも、今は違う。安心しろ。お前は誰も殺さなかった。それに免じて、殺しはしないさ。ただ…全身骨折くらいは覚悟しろ？」
　ダメだ。落ち着け、できるだけ言葉をオブラートに包もうか……
「は？なに言ってるの？例えば、僕が悪人だとしよう。でも、悪人の事情は全く聞かないってことはないんじゃない？情状酌量って言葉、君知ってる？親から教育され直してこいよ。クソガキ。」
　あ、ヤベ、一瞬本音でた。
「悪人の事情は関係無い。どんな事情があるにしろ、悪に手を染めた以上、それは排除する！」
　ッチ！急いで『贋・戦神の槍（グングニル・ゼノ）』を！……ってアレ!?ない!?……クソ！なら、あれは……あった！
「『贋・竜殺しの剣（バルムンク・ゼノ）』！」
　僕は、とっさに斬撃を放ち距離を取った。
「……危ないじゃないか。いきなり襲ってくるなんて。」
「悪人は容赦なく潰す！…お前の場合は峰打ちですませるがね。そう

じゃなくても、戦いに手段を選んでる暇なんてない。ましてや悪人なんかにはな！」

　ブチッ！

　その瞬間、なにかが切れた……

「さっきから……」

「さっきから悪人、悪人、ウルセェェェェェェェェ!!!!」

「大体、そっちから襲って来たんだ！故に、大義名分は我にある！なら、お前が悪人だろ！いい加減にしろ！」

「……確かに、いきなり襲ったら悪人は俺と見られても仕方がない、か……すまない。お礼に、名前を教えよう。俺の名前はアリュシナ・ホイヘライだ。だが、だからと言ってお前が悪人だということが変わることはない。こちらの比は認めるが…だとしても、無力化はする。」

　コイツ、メッッッチャメンドクセェェェェェェ!!!!

　大体、何だよ！悪人、悪人って！世の中善でも悪でも無い人がほとんどだっての！決まったな！コイツ、ゼッッタイ友達少ない！これは断言できる！寧ろ、決定事項だ！

「やってみろよ、クソガキィィィィ!!!」

２３話　そうだ！逆に考えるんだ！サブタイトルなんて、捨ててしまっても良いさ……

２３話

ダァァァァァ!!!もう！コノやろう何で見かけによらず強いんだよ!?僕疲れてんだよ！それにさ！

「……。」

コイツ急に黙り出したと思ったらもの凄く死んだ眼で見ながら僕に殺気向けてるんですが……？ちょっと怖いんですが？

「オイオイどうした？話す余裕無くなった？」

「……。」

無言だと!?クソ！場の雰囲気が悪くなる！ネタに走れないじゃないか！こうなったら！手段は選ばん！何としてもネタに走る！

注…戦いに集中しろとか思った方、それが普通です。

僕は、剣劇のなかで、クソみたいにどうでも良いことを考えていた……

「えっと…ここですか？『不屈の魔術師』がいるところって…」

そう、僕たちは今『不屈の魔術師』がいるという屋敷にいます。

「ああ、そうだね…」

どんな人なんだろうな……スピカさんみたいな人か？

「……で？何でこのメンバー？」

一応、全員で行くわけにはいかないので何人かは留守番して貰った。メンバーは…バランさん、トルテくん、リベンさん、そしてなぜか僕だ。クラレとスピカさんは……話がややこしくなりそうだから待機らしい。マルクくんは苦手だから会いたくないと言って聞かない。

「……あの、何で僕呼ばれたんですか？」

ホントに何で？

「面白そうだからかな？」

「え？そうなんですか？」
「いや、あの人は呪いの武器とかに興味ありそうだったからな……話の種に良いと思って。」
「あぁ、なるほど。交渉の前に軽い雑談を……という感じか？」
???単刀直入じゃダメなの？
「色々めんどくさいんだよ。交渉とかってさ、第一どんなに条件が良くてもこの人の依頼なら受けても良いなって思わなきゃ受けてくれない。」
「つまり、雑談はそう思わせるための準備段階だと？」
「そ。…でも、前に一緒に仕事したなら別にそこまでしなくて良いんじゃない？」
「いや、前回は違うやつが交渉してくれたからね。しかも、仕事中特に話さなかった。呪いの武器に興味があるというのもその人から聞いたんだよ。」
「なるほど。そういうことね、理解理解。」
コンコン
「こないだ一緒に働いたバランだ。今いる？」
『ちょっと待ってくれ。今行く。』
なんだろう……やな予感がするなぁ……

僕は悪人が嫌いだ。そして分かった。アレは悪だ！だからぶちのめそうと思った…だが……
「ヘイヘイヘイ！どうしたどうした？バテてきた？」
攻めきれない！技術だけなら同じでもそれ以外がほぼ全て負けてる！そのなかでも経験の差は顕著に出てる。だけど負けない。正義は勝つとかは思わないし、自分が正義なのかは分からないけど……悪は消えるべきだ。それより、一つ気になることがあるな。
「……お前、何人殺した？始めてじゃないだろ？対人戦はそのなかで何回か人を殺したはずだ。答えろ、何人殺した？」
「う～ん、百超えてからは覚えてない。でも、戦士と戦士の戦いだ。負けたら礼儀として首を差し出す、勝ったら敬意を表して殺す。それが

当然じゃない？」
　確信した。コイツは何人殺してもなにも感じない。今はまだ良いが、これが悪化して無抵抗な人達を大量殺人等をする可能性を拭えないし、そもそも……もう峰打ちで押さえられる相手じゃない。
「前言撤回だ、君を殺す。」
「ハハッ！良いね！殺す気で来いよ餓鬼ィ！お前が勝ったら僕は黙って首を差し出してやるよぉ！」
　ダッ！
　ダッ！
　お互いが踏み出して、僕の剣の間合いに相手が入り、斬ろうとしたとき……
「『贋・竜殺しの剣（バルムンク・ゼノ）』」
　斬撃が僕を斬った。
「!!??」
「ハハッ！ひっかかってやんの！ダメだよ？ちゃんと覚えなきゃ。……ま、運が良かったね。傷も浅い。もう帰ったら？見逃してあげるよ？」
　まずい、油断した。熱くなり過ぎて剣の効果をすっかり抜け落ちてた。……でも、まだいける。
　ダッ！
「エ!?ちょっ！」
　ガィン！
「人の話し聞いてた？これ以上怪我する前に帰れっていったんだけど？」
「……まだ、まだ動ける！お前が完全な悪人になる前に！その前にお前を殺して止める！」
「（ヤバイ、どうしよう……（^ ―^ ;）引けるに引けない状態に……）あっそ！ご勝手に！」
　コレが正面から蹴ってきたので、剣で受け止めてその反動で距離を取ったその時…
「……楽しそうだな、俺も混ぜてくれ。」

ふと、声が聞こえてきた。
「誰だい？君。」
その方向には、黒髪黒目で騎士団長のパラドさんに似ている男性がいた。
「パラドさん？」
いや、違う。彼の髪は青い。目もそうだ。なら他人のそら似か？
……いや、それにしては魔力の感じが似すぎてる。親兄弟……双子ですらこんなに似てはいない。
「パラド？あぁ、違うぞ？俺は……ナハトだ！」
ダッ！
次の瞬間、気付いたら彼が目の前にいて……
ドゴォ！
僕の意識は落ちた。

「ハハッ、まじで？」
完全に気を抜いてたとはいえ彼を膝蹴り一撃ノックアウト？
……強いなぁ
「フゥ、次はお前だ。」
ダッ！
「ッ！」
はやっ！瞬発力だけなら僕の倍は速い！
ドゴォ！
僕は、現在気絶している……アリュシナだっけ？がやっていたように剣で防ぎ、反動で距離を取った。
「へぇ、今のを防ぐのか？」
「まぁ、目の前で一回見てるんでね。……『贋・竜殺しの剣（バルムンク・ゼノ）』！」
と、もう容赦なく斬っちゃいます！
「っと、……ハァ、良いよなぁ……そんな良い武器持ってて。俺にくれよ。」
げぇ、今の避けんのかよ。そしてあげねぇよ！

「あいにく、これはお気に入りでね。あげられないな。」
「そうか、それより、お前は酒場にいたやつか？ずいぶん雰囲気が違うが？」
「あぁ、ちょっと複雑でね。僕は君の知ってる僕じゃない。」
「なるほど……じゃあな。」
「は？いきなり？」
「あぁ…そうだが？」
　そういうと、彼は去っていった……
「彼なんでここきたの？なんでコイツ気絶させてんの？……寝よ。」
　そうだ。理解できないならしなくて良いのだ。良く分からなくなったら寝るのが一番。……あ、その前に寝床探さなきゃ。……てか最近寝てばっかじゃね？

「はじめまして、セリュー・ゼルドナーだ。」
　と、言うわけで今、僕たちは『不屈の魔術師』もといセリューさんの家にいます。どう言うことだって？さっき招かれました、以上。
「こちらこそはじめまして、アルフォト・グレイロードです。」
「トルテ・グレイロードだ。」
「リベン・ソロモンです。」
「知ってると思うが、バラン・オーダーだ。」
「あぁ、バランに至っては久し振りか……それで？用件は？」
「単刀直入に言うと、力を貸してほしい。」
　……ん？雑談は？しないなら僕要らなくない？
「相手は？」
「最近暴れてる奴。ほら、村の人を何十人か戦闘不能にした人。」
「あぁ、アレか。……んで？報酬は？」
「俺の報酬から支払う。」
「……具体的な数字は？」
「５０万。足りないなら言ってくれ、幸いにも、金はあまり使わないから有り余ってるんだ。」

「なら８０万だ。一人で数十人も戦闘不能にする奴相手に５０万は安い。……特に傭兵にはな。これでも譲歩したぞ？ほんとなら１００万とってもおかしくないからな。」
「なら１００万払ってやるぞ？」
「……そういう意味じゃない。」
　アレ？もしかしてバランさんって冗談通じない？
「まぁ、それはそれとして……その剣、見せてもらって良いか？」
「え!?あぁ、どうぞ…」
　いきなりは話しかけないで下さい。びっくりします……
「なるほど、面白いな。ちょっと使わせてくれ。」
「え!?の、呪いの武器ですよ!?」
「ハハッ！安心しろ！これで私が死んだら自己責任だ！……まぁ、しっかり監視しとけと言う輩も居る……と言うかそれが多数を占めてるだろうがな。」
「ならなおさらやめて下さい！バランさんも何か言ってくださいよ！」
「まぁ、その……諦めてくれ？たぶんその方が楽だ。」
　……まさかこういう意味での不屈？ある意味悪い予感的中してるんですけど……

２４話　職人の魂！信念！プライド！出でよ！青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）!!!

２４話

「え？ホントにやるんですか？」

「当たり前でしょ？何のためにここ出たと思ってんの？」

ハイ、僕は今カースツイール奪われた（本人曰く返事聞くまえに借りた）挙げ句そと出されてます。何か、カースツイールはお前のだからお前もついてこいってことらしいです。

「…僕なにも武器もってないんですけど…」

鎚もまだできてないだろうし。

「お前武器片方強化して貰ってるって言ってたよな？どこのところだ？」

「え？あぁ、ギルドの近くのところです。」

「あぁ、ジョリーのところか…何日前に預けたんだ？」

「3日前くらいですかね。」

「あ～、ならもう終わってんだろ。送ってやるよ。えっと、ちょうどここら辺に……あった。」

そういって足元に突然魔方陣が光出した。

「気を付けろ、飛ぶぞ？」

「え？」

バシュン！

……え？

「あら、アルフォトちゃんと……珍しいわね、セリューちゃんが来るなんて。」

「あぁ、コイツの鎚、強化終わってんだろ？」

「何でその事……まぁ、良いわ。出来てるわよ。」

「ええ!?」

「は？そんな驚くことじゃないだろ。コイツの腕はかなり良いからな。1から作るならともかく、強化程度なら余裕だろ。」
「まぁ、始めて扱う素材だったから、もうちょっと時間かかるかと自分でも思ってたけどね？」
「なにを素材にしたんだ？お前が扱ったことないって相当特殊な金属だろ？」
「上位ゴーレムのプレーン体よ……それも頭部のね。」
「……ホントか？誰がやったんだ？」
「……僕です…」
「……どうやって？」
　え？それ聞くの？いいけどスッゴいシュールだよ？
「ゴーレムって、首のところに繋ぎ目あるじゃないですか。」
「あぁ、あるな。」
「そこにカースツイール突っ込んで、後は梃子の原理で……」
「…お前、バカなのか？」
「初めて聞いたけど、何かスッゴいシュールね……」
　いや、酷くない？特にセリューさん。
「まぁ良いわ、とにかく…これ、外装として纏うのも考えたんだけど、鎚の能力の性質上そういうわけにもいかないし。で、混ぜて作り直したのよ～、そしたらなんと大成功！大きさを変える能力の他に、違う能力も付与できたわ～、運良いわね～アルフォトちゃん。コレ、場合によっちゃ元々付与されてた能力も消えちゃうのよ？」
　ほえ～、そうなんですか…
「それより、肝心な付与された能力は？」
「う～ん、それがねぇ…ワタシの異能は能力を付与できたってことは分かるんだけど…肝心な能力は使ってみないと分からないのよ～」
「……なら使わせりゃ良いんじゃないか？持ち主居るんだし。」
「ダメよ！試してもない良く分からないもの渡すなんて、職人として失格よ！キチンと安全性を確かめ、その上で価値を把握し、適正価格で売る！それがワタシ魂！職人として信念！そしてプライドよ！」
　……僕不死だから安全性関係無いと思うけど…いや、言わぬが花か

…
「それは悪かったな……なら、ちょっと扱ってるところはせめて見せてくれないか？」
「う～ん、それならギリギリＯＫよ…」

……てなわけで、鎚の性能を試すために森に来てます。
「よし、試しにこの木をぶっ叩くわよ！」
「まぁ、この辺なら大丈夫だろうしな。」
「早速いくわよ！」
そういうと、武器屋さんは鎚を大きくし、おもいっきり振りかぶった。
「フンッ！」
ドッゴォン！
わぁ、スッゴい……木にヒビが……さすがに倒れはしないな、手加減したのかな？倒れたら危ないし。
「ン～、やっぱり硬度は上がってるわね。それと……何かまだ違和感あるわね……使う魔力が前より若干増えてるわね、素材的に魔力の効率は良くなるはずなんだけど……」
「おい、何か鎚が魔力纏ったままじゃないか？」
「んん？言われてみれば……解除するわね。」
ドォン！
武器屋さんが鎚に纏わせてる魔力を解除した瞬間、もう一度木に衝撃が来たらしく、音と共に木に入ったヒビが広がり……
ドォォォォン！
木が倒れた……
「どうやら魔力を込めて鎚で衝撃を食らわせると鎚が魔力を纏った状態になって、それを解除するとまた衝撃が来ると……威力から見ると二分の一かしら？」
「すごいですね、一回見ただけでそれだけ分かるって。」
「自分が作ったものだからね、能力を見抜く目は磨いたわ。」

「は、はぁ……」
「それより、セリューちゃんには気を付けなさい…あの娘なかなかイカれてるから……」
「はい、それはもうすでに存じてます。」
うん、呪いの武器を躊躇なく取る時点でイカれてる。
「なら良かったわ。……あと、あの娘みたいなのはくっつくと苦労するから……それを肝に命じなさい。」
「……いや、くっつくつもりはないです。」
なに言ってるんだこの人は。
「あら、そうなの？意外とお似合いだと思うわよ？」
「えぇ…」
いや、胃が痛くなりそうだから良いです。セリューさんだからじゃないそもそも異性と居るのが胃にきます。……最近は衝撃的なのが多かったからなぁ……
「私はアルフォトの事はあまりタイプじゃないな。……嫌いって訳ではないが。」
「あら、こういう話に当事者は首突っ込まないのが鉄則よ？」
「至近距離で話されてら嫌でも耳にはいるだろ。」
「まぁ、そうですね……」
僕も良くその話を堂々と当事者の前で話せるなと思ったよ。小声ならギリ分かるけど……いや、聞こえたらやだなぁ～あれはキツかった。目の前でコソコソ言われるのは胃にすごく負担がかかった。しかも会話の内容が聞こえてきてそれが恐らく僕の事言ってるであろう時は……ホントに……言及すると被害妄想扱いされ、わざとらしく離れると笑われる。しかもバリッバリ僕の話をしてたときはもう泣きそうでした。思えばそれから異性が苦手になったなぁ……みんなも陰口はして良いと思うけどせめて本人がいないときにしようね！（切実な願い）……なにを言ってるんだ？僕は。
「よし、ならもう行こうか。」
「あら、もう行くの？なら代金払ってちょうだい？」
「あぁ、はい、分かりました……どのくらいですか？」

「そうねぇ……大体……」

はい、あの後代金払ったりその他諸々し。今ダンジョンの前にいます。

「よし、いくけど準備は良い？」

「……ハイ…」

え？ホントにカースツイール使う気？

「あの……本気で使う気ですか？それ。」

「あぁ、私は自分で体験したこと以外は基本疑う質なんだ。」

「そうですか……」

もう良いや！（ヤケクソ）幸いあんまり仲良くないから死んでもたぶん飯が不味くなるだけだ！……いや、ダメだわ。楽しみが失くなるわ。

「そういえば、武器屋さんと親しげだったんですけど何かあるんですか？」

とりあえず少しでも死なせない理由をつくるため、ちょっとでも良いから仲良くなろうと話題をふる。

「あぁ、武器屋……ジョリーは私の従兄弟だぞ？」

「え？」

「まぁ、ちょっと歳は離れてるけど。」

え？ええ！Σ（Д。；／）／……衝撃なんですけど…

「そうなんですか？」

「あぁ、私の母の兄がジョリーの父親らしい。」

「なるほど……ちなみに、セリューさんって歳いくつですか？」

「……お前、失礼だぞ？私はまだ良いが、基本女性は歳聞かれたら嫌な顔するから気を付けろ。……ちなみに２４だ。」

「えっと、武器屋さんっていくつなんですか？」

「その質問は間違っても本人に聞くなよ？私の記憶が正しければ３０だ。」

「いつから傭兵になったんですか？」

「１９の時だな。」
つまり傭兵やって五年間か……
「それより、さっさといくぞ。」
「あ、ハイ。」
流石にもう行くか……頑張ろ。

２５話　実験と遊びと不意打ち

２５話

はい、ということで今ダンジョンにいます。……めっちゃ不安だ……

「しっかりしとけよ、じゃないと魔物に食われるぞ？」

その場合って僕死ぬのかな？……もしかして生きたまま消化されたり……うん、やめよ。考えるのは

「そういえば、魔物と使い魔って何が違うんですか？」

正直そこ曖昧だと困るな……

「知らない。って言うかよく分かってない。」

「え？ホントですか？」

「あぁ、上が隠してるとかがなければ今のところは分かってないな。」

「そうなんですね……」

「それより、さっさと魔物でてこないかなぁ…時間が惜しい……」

僕としては魔物に遭遇せずにさっさと帰りたい。

『ギャァァァァオオオオ!!!!』

「いま、声聞こえたよな？」

「そうですね……」

ばっちし聞こえました。

「よし、声の方に行くぞ！」

……あぁ、やっぱりそうなるのか……

「なるほど……ドラゴンベースの魔物か……面白そうだ」ニチャァ

「ハハ……一周回って笑えてきますよこれ……」

よりによってドラゴンなのかぁ……しかも一回死んでるからかグロい……

『ギャァァァァオオオオ!!』

「借りるぞ……お前のカースツイール」

「あ、ハイ。」
ハハッ、もうどうとでもなれ。
ザシュ！
その瞬間、セリューさんが魔物を切り裂いた。
「やはり魔物になってるからか少し脆いな……腐敗が少し進んでから魔物に成ったのか？……それともカースツイールの切れ味たとてつもなく良いのか……」
「ギャァァァァオオオオ!!!!」
あれ？僕より早くない？……素の身体能力が違うってことなのかぁ……悲しいなぁ…
「ハハッ！今なら誰にも負けない気がする！」
そういうと、セリューさんは魔物に突っ込んだ。
『ギャァァァァオオオオ!!』
次の瞬間、魔物が炎を口から出した。
「あっ……ドラゴンって炎吐き出せるの忘れてた……」
「セリューさァァァァァァァァん!!?!?」
……セリューさんは消えてた。カースツイールを残して……それを見て僕は……
「いや、呆気な！」
……泣けなかった。イチッツミリも涙が出なかった。
「……なるほど、カースツイールは身体能力向上と精神の昂らせる効果があるのか……その変わりに理性的な判断がしにくくなると……」
と、思ってると後ろからセリューさんが……セリューさん!?
「うお!?ビックリさせないでください！」
「あぁ？あぁ、ごめん。」
「……なんで無傷なんですか？」
アレ確実に直撃したよな……掠り傷ひとつもないのはおかしい…
「え？あぁ、一回死んだから。」
「……はぁ…」
「私の異能は『現存する魔力（マジック・アライブ）』、私の命は１０まで増える。つまりあと、ライフは９だ！」

「ハハハ……バカげてるなぁ……それよりなんで下から生えてくるように復活したんですか？」
　そもそも魔力を命の代わりにするって意味分かりません。
……死なない僕が言うのもなんだけどさぁ……
「いや、その方が都合が良いんだよ。色々と、まぁ、それよりカースツイールもう返す。試したいことは試した。というわけで……一気に決めるか……範囲を指定、属性を指定……魔法を指定、それを二乗。『炎弾（フレア）』」
　詠唱が終わると、でっかい火球がでてきた。
『ギャァァァァオオオ!!!!』
　魔物も炎を出すが、押し負けて焼かれた。……最初からそうしとけと思った僕は野暮なのだろうか？
「よし、帰るか。」
「ハイ……」

「……ただいま帰りました。」
「お、思ったより遅かったな。もうババ抜き三週目突入したぞ？」
「クソ……今度こそ！今度こそ上がる！さぁこい！」
「あ、揃った。」
「エ!?また最下位……だと」
「……運なさすぎない？トルテくん。」
「クソ！インチキだ！やり直しを要求する！」
「クックック負け惜しみを！」
「……人の家で何騒いでンだコイツら……」
　……止めてあげようよ、セリューさん……毎回最下位ならそうなるのもおかしくないって……
「言ってやるな……他に暇潰しがでてこなかったんだ……あとトランプは自前だから安心してくれ。」
「そうか……まぁ、多少は常識を持ってるようで安心したよ…庭で戦闘とかされるよりはトランプの方が全然良い。」

「あ、君たちもやる？」
「たまにはこういうのも良いかもな。せっかくだし参加させて貰う。」
「あ、じゃあ僕も……」
「ヨシッ！」
なんかトルテくんがガッツポーズしてるんだけど……ちょっと不安……

アルフォトたちが参加してくれたお陰でだいぶ最下位にならない確率が上がった。最下位時刻から脱獄できる！……と思ってた時期が俺にもあった。
「あ、上がった。」
「あ、僕も」
「……俺もだ……」
等と次々と上がって行き……ついにはアルフォトと俺だけになった。俺にジョーカーはない。つまりジョーカーを持ってるのはアルフォト、ジョーカーを引かなきゃ勝てる……
「……」
「……」
手を右の方のカードに向ける。表情に変化無し。
手を左の方のカードに向ける。表情に変化無し。
……コイツババ抜き全く表情変わらないタイプの人間だった!!
「ッ！」
スッ
ＪＯＫＥＲ
ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”
俺は必死に自分の手元にあるカードをシャッフルし、アルフォトの前に出した。
「……」
アルフォトは最初ジョーカーの方に手を伸ばしたが、瞬間、オレを何かを察したような可哀想なものを見るような目で見たあと、直ぐに

ジョーカーを取った。
……え？気を遣われたの？今。……貴様、そういう情けはかえって人を傷つけるぞ！
スッ
アルフォトは、右の方のカードを少し上にずらした。……このカードを取れと？
……いや、待て、コイツは意外と性格悪いから上げて落とすつもりかもしれない！左だ！左を取る！

……なん……だと!?
は、図ったな!?こ、コイツ……ッ！
先程と同じで、アルフォトがジョーカーを取る。アルフォトは今度は左の方のカードを上げた。
……フッ！同じ手にはかからん！上げてる奴を取る！
ＪＯＫＥＲ
「図ったな……貴様ぁ！」
「何が!?」
もう騙されん！　同じ手は食わんぞ！
――――――同じ動作を繰り返し１０分後……
「……もうなんか良いや。」
僕は、いい加減この攻防に飽きてきたので恐らくジョーカーで無い方を引いた。
「クッ！」
案の定、そのカードはジョーカーではなかったため、僕は上がった。
「ア〟ア〟ア〟ア〟ア〟ア〟ア〟」
トルテくんのむちゃくちゃ悲痛な叫びが聞こえてくるけど無視しよう。
「……良くもまぁそこまで悔しがられんな……ガキか？」
「まぁまぁ、男はいつまでも少年の心を忘れない生き物だから。」
「そういうもんか？」
「そういうものだよ、セリューさん。」

うん、恐らく……
「ところで……もうカチコミに行かない？」
え？いきなり？
「別に良いが？」
「まぁ、反対する理由もないが……その前にダンジョン行ったばかりなんだ。少し位は気遣ってやれ。」
「そうだね、どうすｒ「は？行けるが？」そう……」
「……僕も行けます。」
体力的には余裕。だってそこまでの距離歩いてないもん。
「ヨシッ！ならカチコミに行くゾォぉぉ!!」
「……良し、行くか。」
「そうだな。」
「あぁ、時間が惜しい。」
「……寂しい…」
「……ドンマイです。」

「……寝れん！」
あぁ、寝れないなぁ……まぁ、さんざん寝たし当たり前田のクラッカーか。……つまんね。
「はぁ、なんか面白いこと起きないかなぁ……」
それこそ後ろから不意打ちとか。
バコン！
「グボヘッ!?」
頭殴られた!?今!?一瞬砕けたかと思った！
「あ、ホントに気付かれなかった。」
後ろを向くと、全く見覚えの無い鎚を持った過去の僕がいた……

２６話　意地と信念と最後の勝負

２６話

「いきなり不意打ちとは……酷いじゃないか……！」

ダッ！

「ならもっと酷いことするんで……『発射（ブラスト）』！」

バシュ！

ドガッ！

「ッ！」

こ、腰が……ゴキッっていったぞ今!?

「ッ～～過去の僕……なんてキチガイ戦法してるんだ！本来魔法の弾道安定させ飛ばすためにある『発射（ブラスト）』を自分に使うって正気の沙汰じゃないだろ!?」

「ハハ……なんででしょうね！」

普通にそれ以外の魔法がほとんどつかえないからだよ！

「アルフォトくん！下がって！」

「ハイッ！『発射（ブラスト）』！グボヘェ!?」

今度は、『発射（ブラスト）』を腹の方にやって移動手段として使う。……うぷ…気持ち悪い…一瞬五臓六腑がウェーブしてた……

ダンッ！ダン！ダン！

「ちょ！まっ！」

ガインッ！ガインッ！ガインッ！

「まじかよ全部弾きやがった……」

「というか酷くない!?何でこんなに畳み掛ける……の！」

そういうと、後ろから回り込んで攻撃しようとしていたバラン君の方に体を回転させながら剣で斬りつけた。

ガイン！

「クッ！すまない、失敗した！」

いや、今のを反応して防ぐだけ凄いよ……

「属性指定、それを３乗！『炎弾（フレア）』！」

ドガァン！

「ッチ！厄介な！」
「戦闘とは常に相手の嫌がることをすることだろ？」
「ハハッ！良いね、なぜか納得できる！」
……どうも、役目が終わった置物です。バズーカでも構えてよ。
「ふぇくしょん！」
あ、やべぇ……
ドオオオオン！
「え？」
「は？」
ドッガァァァァァァン!!!!
……やべぇ、やべぇよ……バズーカ構えてくしゃみしたらセリューさんごと未来の自分を吹き飛ばしちゃったよ……助けて下さい。
「ゴホッ！ゴホッ！……お前！貴重な一回を無駄にするな！あと８回じゃないか！」
「す、すみません！」
「（うわぁ……あの野郎。やりやがった……）」
「（魔力弾とはいえ弾丸をまともに食らったり、人間大砲もどきしたりした時点でだいぶはちゃめちゃだなとは思っていたが……これほどとは……）」
「「（（コイツ、今さらだがかなりヤバイやつでは？））」」
「で？セリューさん。もう一人は？」
「たぶん吹き飛んでる。」
「追う？」
「追おう。今のチャンスを逃してたまるか。」
「ハイヨ～。」
「分かりました……」
「まぁ、それが妥当かもな……」
「オレはここに待機してる。……正直オレは近距離戦はムリだ。」
ヘタレだもんね、トルテくん……僕も人の事言えねぇけど……

どうも、置物になれなかった爆発物です。
「グホッ！」
ばたん
え？なんかバランさん倒れたんだけど？
「……ふぅ、厄介な方消せた……あれ？過去の僕はともかく君は何で生きてるの？」
「そういう異能なんでね。」
「なるほど～、んじゃ、ご退場ネガイマ～ス！」
「お断りだ！こちとら仕事だからな。」
……ん？これ僕要る？要らないね。そうね、そうだよね……隅っこに体育座りして待ってよう。
「『発射（ブラスト）』。」
「は？」
ドゴォ！
未来の僕は、『発射（ブラスト）』を自分に使ってその勢いを利用しラリアットを食らわせた。……え？今きれいに入ったよね？……ヤバくない？
「さてと、次は君だよ！リベンくん。」
「ハハ、キッツ。」
ダン！
「っと！」
ガイン！
「俺を忘れて貰っちゃ困るな。」
と、トルテくん！よ、よかった！このままだとヤバかった！
「ありがと。」
「礼なら後で奢ってくれ。」
……ナンだろうなぁ…試合観戦してる気分。みんな真面目にやってんのに僕だけ端っこで体育座り……でも参戦しても邪魔なだけなんだよなぁ……
「ハハッ！敵を前にして後の話しとは……余裕だね！」
……ここに敵を前にして試合観戦してるやつがいるんですけど……そこはどうお考えで？

「……多分、一撃で決めるしかないよね？」
そう言って、リベンさんはいつの間にか手に持ってたグレートソードを持つ。……どこから出したの？それ。
「だろうな、心技体ほぼ全てが上回ってる相手だ…長引けば長引くだけ不利。」
今度はトルテ君が腰の辺りにつけている短刀を逆手に持った。
「クックク！せいぜい楽しませてくれよ！」
未来の僕は、右手に斧、左手に剣を持った。……マジで？あの重そうな斧を片手で？
「『発射（ブラスト）』！」
未来の僕は、『発射（ブラスト）』で一気に加速する。
「『発射（ブラスト）』！」
それとほぼ同時に2人が『発射（ブラスト）』を自身の体に使い、お互いの武器をすれ違いさまに振りかぶった。
「カハッ……」バタッ！
「グホッ……」バタッ！
倒れたのは、リベンさんとトルテくんの二人だった。
「ハァ、ハァ、ハァ、クッ……結構良いの貰ったね。ハハッ！普通なら死んでるのになぁ……なんで死ねないんだよ！」
未来の僕は、普通なら致命傷の傷を負っていた。具体的に言うと両方の鳩尾が抉れてた……すごく…グロいです……血が出てないから傷口がモロに見えて……
「最後は君か……過去の僕？」
「あ、ハイ……」
これ行ける？……ムリでしょ。いくら消耗してるとはいえ素の実力に差がありすぎる……
「さて、行こうか……」
未来の僕は、先程と同様に斧と剣を構え、前に出た。
「まぁ、暇潰しくらいにはなるように頑張りますよ……」
僕は、そう言いながらカースツイールを構え前に出た。
「呪いの武器か……面白い。そういえばそういう武器持ってる人と

戦う機会はあまりなかったな……」
「ハハ、こうでもしないと手負いのあなたにも勝てそうにもないんで。」
うん、手負いでも負ける気がする。
「そうかい、なら怪我はこのままにしておこう、幸い不死だからね、敗血症とかも期待できない。」
「それはお互いさまで……しょ！」
ヨシ、もう突っ込みましょう。
「ッ!?」
ガイン！
やっぱり防がれた……まぁ、これで良い！
「『発射（ブラスト）』！」
僕は、限界まで魔力を込めて『発射（ブラスト）』を使う。
ドガガガガ！
「ンヌ！」
「グホッ！」
『発射（ブラスト）』の効力が切れた辺りで振りほどかれました。
「ハァ、ハァ、チッ！剣が逝った！」
ヨシ、最低限戦力は削げた、あとは何の武器を出すかだけど……
「……もしかして、もう武器あまり無いんですか？」
ここで一つ疑問が出た。未来の僕の性格は恐らく遊べるところはギリギリのラインまで遊んで、ヤバくなったら少し本気を出すタイプ……のはず、まぁ、これまでの言動からの考察だからあてにはならないけど……
では先程は？リベンさんとトルテくん相手のと気は明らかに後者の状況。今ここにいるってことは先に来た僕たち以外の部隊を全部全滅させたってこと。なら、個人の技術だけじゃどうしても足らない……何かしら切り札的な武器を持ってるはずなのに、依然としてそれを出す気配かない……考えられる理由は使うのを渋ってるか、使うのにものすごいデメリットがあるか、今何かしらの理由で使えないかだ。

「さすがだねぇ……過去の僕。洞察力だけなら僕にも劣って……いや、僕より上か……やっぱり最近あんまり人間観察してないからなぁ……」
「茶化さないでくださいよ、気になりすぎて今夜は八時間位しか寝れなそうですよ。」
「十分快眠してるじゃないか、まぁ、その疑問には回答しかねるね……」
「……そうです……かっ！」
「おっと、危ない」
　ガイン！
「ハハ、流石にさっきはいきなり早くなってビビったけど…二回目も通じないよ？」
「チッ！『発（ブラ）――『遮断（シャウト）』」
　パァン！
「!?」
　なっ!?弾かれた!?
「ふぅ……危ない危ない。流石にあんなものを二回も連続で食らったらキツいからね……それより、さっきのは相当君にも負担がかかるはずだけど……平気ってことはその武器のおかげかい？……なんにせよ、甘い。」
「ッ～～～」ダッ！
　ドゴォン！
　降ってきた斧を間一髪で避ける。
「仕返しですよッと！」
　僕は、隠し持ってた鎚の頭部をでかくし、なおかつ持ち手も長くした。
「うおっと！危ないねぇ……」
「ッチ！」
　避けられた！でも畳み掛けろ！全てが負けてる僕の勝機は初見だましのごり押しくらいしかない！手札を見せきる前に押しきる！
……まずはある程度距離を取って……

「『発射』！」
距離を取ってからすぐに『発射』を使う。今日はなぜか僕や周りが乱発してるなと思うけど些細な疑問だ！
「だからまた同じ手は通じないって……」
「『発射』」
重ねがけして速度をハネあげる！
「うぉっと！」
もういっちょ！
「『発射』」
とにかく加速しまくって一撃で頭を削ぐ！カウンターで沈められたら終わりだが……それは賭けだ。元々実力差がひどいから、賭けてなきゃやってけねぇよ！
「『発射』」
「クッ！」
ガガガガガガ!!
これ以上加速させるのは危険と判断したのか、今度は受け止める。武器同士でぶつかってるからもはや火花が散ってる。こっちの武器はカースツイールだからともかく……あっちの武器はどうして壊れないんだ？……まさか強化をしてるのか？いや、それ事態は驚くべきじゃないけどここまでの威力をもろに受け止めることができるほどの武器の強化なんて……
「うらぁ！」
ガイン！
「ッ!?」
クソッ！弾かれた！
「ハァ、ハァ、ハァ、さっきのは、ちと危なかったかなぁ？良くやったよ、その実力でさ……手負いとはいえ僕をここまで追い詰めるなんて……殺す……はできないから斬首くらいで勘弁してあげるさ！」
クソッ！体が動かない、ここまでか……
未来の僕は、手に持った斧を降りおろし……
ボト

「は？」
何があったのか見上げると、未来の僕の右腕が消えていた。
「は？は？何故？……まさか、もう時間切れかよ！ふざけんな！誰かに殺される訳でもなく！どうでも良いときに消えていくでもなく！こんな良いところで消えるなんて……！普通なら死ぬ傷を負いながら、死ぬ訳でもなく消滅だと!?こんな終わり方ありかよぉ！」
「……。」
今の僕がこの終わり方をした時、僕はどう思うんだろう。
そんなどうでも良いことを、未来の僕が消えるまでの時間でずっと考えていた……

あれから数日後……僕は今病院にいます。といっても、入院しているのは僕ではなく……
「リベンさん、トルテくん、お見舞いに来ました。」
「お～、ありがとう」
「フッ、すまないな。アルフォト、いつもいつも。」
二人ともどうやらそこそこの重症と、後は『発射（ブラスト）』を身体に直に使ったことによって起こった腰痛らしいです。腰の骨にヒビ入ったとか言ってたな……
「あとどれくらいで退院できます？」
「あ～、あと1ヶ月くらいかなぁ～僕は。」
「オレもそれくらいだ。」
わりと早いな。……おっと、不謹慎か。
「頑張って下さい、リベンさん。……あと、頼むから歩くときに松葉杖どこおいたか忘れるとかやめてね？トルテくん。」
「なっ!?何を言ってる!?そんなこと一回しかないぞ！」
「一回あんのかよ……」
「あ、セリューさん、すみません。起こしました？」
セリューさんも軽傷ですけど入院してます。ホントは自殺して無理やり怪我治そうとしたのは記憶に新しいです。

「あぁ、別に良い。」
「そうですか……僕はこれで。」
「お？もう帰るの？」
「色々あるんで……」
　主に家に帰って寝るだけだけど。
「まぁ良い、じゃあな。また来てくれ……次は良い果物持ってくることを期待しているぞオレは。」
「はいはい。分かったよ。」
　僕は、家に向かって歩いていった……

第三章　僕の周りには変人が多い

２７話　調査と不運と変人と

２７話

「依頼ですか？」

病室に見舞いに行ってからしばらくし、なんとさっそく依頼主が僕を指定してきた。

「そうですね。いや～、物好きもいるものですね！」

「否定はしません。」

だって僕まだ評判悪いもん。

「…で？誰からの依頼ですか？」

「騎士団です。」

「え？」

「騎士団です。」

「……え？」

「騎士団のパラドさんの部隊です。まぁ、別にあなた居なくても問題ないけど念のためってことでしょう。」

「…ホントにそれだけですか？」

「私の予想だと人気ないなかで実力が高い方で頼みやすいからだと思いますよ？同じ条件満たしてるリベンさんとトルテさんは入院してますし…」

「なるほど……」

バランさんとか人気そうだなぁ～

「はぁ～、分かりました。行ってきます。」

「そもそも拒否権基本ないですけどね～」

「クソ！ブラック企業が！」

「ｗなんか最近はっちゃけて来ましたねｗあと、待ち合わせ場所は……」

と言う訳で依頼主から指定された待ち合わせ場所に向かった。

と言う訳で今僕は待ち合わせ場所の森の近くにいる。
「まさかあなたからの指名とは……パラドさん。」
「いや、ごめんね？……でも、信用できて実力もそこそこあって暇な人って君くらいにしかいなくてね？」
それ地味におちょくってると思う僕はひねくれているんだろうか……
「はぁ、まぁ良いですけどね？……なんか周りが怖いんですけど。」
なんかスッゲェ歓迎されてない雰囲気が漂ってる…
「いやぁ、ごめんね？本来は自分たちで十分できるのに何で部外者いれるのかってことで……」
「あぁ、なるほど…」
うん、それは僕も思う。
「パラド団長！やっぱり僕は反対です！戦いとは常に完全調和が求められる！あなたも言っていたじゃないですか！」
え？そうだったっけ？
「確かにそうだけど、メンバーが急に足されたり、変更になることは良くある。だから誰とでも連携できる柔軟さを持たないとダメダメだよ。それとも、いざって時の言い訳に『今回はいつものチームじゃないから失敗したんだ。』とでも言うつもりかい？残念だが、それを許すほど僕は甘くない。」
足手まといってことは否定しないんですね……そして意外と辛口だな、パラドさん。
「ぐっ……しかし！」
「うるさいよ。」
「……すみません。」
あ、黙るんだ。
「さて、そろそろ仕事の話をしようか。」
「そういえば、まだ何やるか聞いてないですね。」
「やって貰うのはこの森のなかにあるダンジョンの調査だよ、最近ここで何人帰って来てないからね。」

……そんなとこに足手まとい連れてきて良いの？
「じゃ、さっそく進もう。」
『ハイ！』
パラドさんが号令をかけると、それにしたがってゆっくりと進んでいった。……何で僕先頭？後から少なくない数の視線を感じるんだが？……そういえば、視線を感じ取れるようになるって……成長しんだなぁ…僕。
等と自分でも良く分からない成長を実感し、目的地についた。
「特になにもなかったですね。」
「まぁ、ここら辺は魔物少ないからね。それに大人しいのが基本だから、縄張りに入んなければ襲ってくるのはあんまりないんだよ。」
「へぇ……」
初めて知ったな。やはり生態系？は大事だね。今度調べてみよ。
「そんなことも知らなかったのか？」
「まぁ、外出する機会がなかったんで…」
「……お前もやっぱり貴族なんだな。」
「どう言うことです？」
「サァ？自分で考えろ。」
「ほら！そこ！無駄話しない！」
「あ、すみません…」
「……申し訳ありませんでした。」
当然の事ながら怒られました。そんなに怖くなかったけど。けどこれは注意の方が近いのかな？
「ほら、中入るよ。」
『ハイ！』
僕は、さっさと進んで帰ろうと足を前に踏み出したとき……
カチッ
何かの音がした。
ガパッ
アレ？何か空洞になってない？
……もしかしてヤバいスイッチ押した？

「アアアアアアアアアア!!!」
僕は、反射的に叫び、目の前が真っ暗になった。

「…ッ!!」バッ！
意識がハッキリした時、そこは先ほどのダンジョンの前でなく、おそらく地下室らしきとこだった。
「ッテ……ここどこだ？誰かいないのかな？」
若干痛む体を起こし、辺りを見渡したが、誰もいなかった。
「……とりあえずポーション飲も。」
ゴクッゴク
「あ～……何か最近ポーション使うのに躊躇しなくなってきたなぁ…」
前はこれくらいの怪我ならちょっと躊躇してたんだけど……まぁ、首と腰が痛いから仕方ないか。
ドゴオオオン！
「!?」
突如、ものすごい轟音が響いた。
「あ、いたいた。アルフォトくん。」
パラドさんでした。まさかのまさかの着地してきやがった。……足大丈夫？
「あの……足大丈夫ですか？」
「強化して骨と皮の強度上がってるから体に振動が若干残っていること以外は問題ないさ。」
「それ、結構大丈夫じゃないですよね？」
「ハハ、ホントに大丈夫だよ。」
「そういえば、他の人は？」
「それはね、別行動にしたんだよ。調査は正直十分すぎるくらいいるし、さすがに部下をあの高さから落とすほど鬼じゃないからね。とはいえ、緊急事態ってのがあるからね……合流はした方がいいね。」
「僕たちが戻ってくるまで待機とかは…」

「う～ん、考えたんだけどね…正直効率悪いし、僕はこのダンジョン入ったことないから道なんて皆無だし。そもそもなるべく早めにって急かされてるからね…」
「なるほど…理解しました。」
「と、言うわけでまずここから出ることなんだけど……君、壁壊せる？」
　いきなりなに聞いてんだこの人。
「いきなり何言ってるんですか？」
「いや、ここの壁向こうが空洞になっててさ、壁壊したら出られるじゃん？」
「なるほど、正直に言うと出来るんですけど……僕鎚なんでちょっと二次被害がすごそうです……バズーカで吹っ飛ばします？」
「あ～、君鎚かぁ～、あとバズーカはやめて。なら仕方ない、なら僕がやるか。『信頼の証（シンボル）』」
　そういうと、パラドさんの手にどこからか出てきた光の剣が握られた。
「せ～のッ！」
　シュイン！
　そう言い、光の剣を振ると壁が綺麗に斬られた。岩の壁がよくもまぁあんなにスパスパ斬れるなと思った。
「…さて、来なよ。アルフォトくん。」
「あ、ハイ。」
　カチッ
「……今何かカチッって音しましたよね？」
「したね。」
「……コレ、ヤバくないですか？」
「ヤバいね。」
　そう、下らない話をしてる間に……目の前が真っ暗になった。

「……落とし穴の次は転移かぁ……」

「う、うぅ……」
「ん？」
何か今声が聞こえたんだけど……一応行ってみるか？
行ってみたところにいたのは…赤髪で長髪を後ろに纏めている女性だった。
「み、水…水をくれ！」
「え？あ、ハイ。じゃあ、その代わりに道教えてくれません？」
「そんなのいくらでも教えてやるから水をくれぇ！」
「アッハイ」
怖い、怖いよこの人…
そう思いながら、僕は水代わりのポーションを渡す。……仕方ないじゃん。水無いんだから。ポーションの方が楽なんだから。
バッ！
ゴクッ、ゴクッ
「あ～ッ！ありがとぉ！ついでに傷も直してくれるとは……！感謝！」
「え、あぁ、とりあえず道案内してもらって良いですか？」
「構わない！というか私は道を知らない！」
「え？」
「だが安心しろ！私は恩を仇で返すような真似はしない！」
「は、はぁ……」
どうやら僕はまためんどくさそうな人と知り合ったらしい……

２８話　違和感と遭難と変人達

２８話

「ところで少年よ！名前はなんだね？」
「え？なぜいきなり？」
「当然じゃないか！初対面ならまずは自己紹介だろ？」
「は、はぁ……」
なんだこの人。……いや、言ってることは正しいと思うけども。
「アルフォト・グレイロードです。」
「そうか。私はカドル・カーリーだ。よろしく頼む。」
…何か僕の名前聞いて大した反応しない人始めてみた。
「……さて、行こうか。アルフォト君。」
「どこにです？」
「どこかに。」
「……。」
あ、この人そういう系ね。……探検とかで方向音痴と絶対に組ませちゃ行けないタイプの人ね。
僕は思わず上を見上げたが、そこにあったのはやはり空ではなく、洞窟らしき物の天井だった……

パラドｓｉｄｅ
「アルフォトく～ん？どこにいるの？」
アルフォトくんが消えた後、僕はアルフォトくんを探しながら歩いていた。
う～ん、最悪の場合、アルフォトくんは放置してみんなとの合流を最優先にするか？我ながら最低だとは思うが、正直不死であるアルフォトくんを放置しても、後でみんなで探せばいいからだ。
「ハァ、こんな時……アイツだったらどうするんだろうなぁ……ナハト…」
そんなこと、知るよしもないか。

そう思いながらも、僕は足を進める。
『グギ、グギャャャャ!!!』
『ギャャァ!』
「ハァ、魔物かぁ……ついてないな…」
そう言うと、目の前にいる数匹いる猿型の魔物と退治する。
……なんで洞窟に猿がいるんだろうなぁ……普通森じゃないかなぁ……
「そんなこと、行ってられないかッ!『信頼の証(シンボル)』!!」
手元に光の剣が現れる。今回はロングソードか。丁度いい。
「一気にぶった斬る!」
ジャキン!
まずは一匹目。そうすると、警戒を強めたのか何匹かは僕から距離を取り始める。
……でも、ちょっと遅い。
ザシュ!
「そんなに遅いと危ないゾッ!ッと。」
シュパッ!
後ろから一匹を串刺しにして、一気に振りかぶって吹っ飛ばす。
ベチャッ!
うわぁ…グロ。
さすがに元々死体だったとはいえ……いや、だったからこそ脆くて壁に叩きつけられるとすぐにぐちゃぐちゃになった。……具体的にはトマトの内側くらい。
「さてと、あと四匹か。…逃げる前に仕留めよう。」
まず、一匹の正面に回り一気に首を斬る。
スパン!
『ギ――――』
二匹目は肩から袈裟斬りに
ザシュ!
『ギョェ――――』
三匹目は胴体を真っ二つに

スパッ！
『グギ――――――』
最後は……遠いな。投げるか。
シュッ！
『ギギャ――――――』
ドシュ！
ドシン！ドシン！
「ん？」
なにやら音が聞こえてきたので見てみると……
『グォォォォォォォォ!!!!!!』
鎧を着た三メートルはあろうゴリラ型の魔物だった…
「だからここは森じゃないんだよなぁ……しかもなんで猿の後ゴリラなんだよ……」
…というか鎧を着てる時点でもうダンジョンに手を加えられたの濃厚だなぁ……
「これはさすがにヤバイなぁ……」
『グォォォォォォォォ!!!!!!』
ドドン！ドドン！ドドン！ドドン！
僕は、勢いよく向かってくるデカイゴリラに向かって剣を構える―

「……マジか、ここで変わるか？普通。」
そう言うと、僕の意識は落ちた。

「……ん？この道何回か通ってないか？」
「え？あぁ、言われてみれば確かに……嫌なんで!?」
ホントになんで？僕たちまっすぐ進んだよね？
「……あ、分かった！ここだ！」
ジャキ
「え？え？なんで剣構えてるんですか？カーリーさん？」
「せぇい！」

そう言うと、おもいっきり壁を斬りつけた。
パリン！
「え？え？なんで!?」
「やっぱりそうだったか～コレ、何か方向感覚狂わせる結界の中だったみたい。」
「え？マジですか？」
「大マジ……まぁ、当てずっぽうだったんだけどね。」
ええ…
「さてと……で？どうする？」
だよね！そうだよね！
「歩くしかないでしょう！」
「承知！」
～数分後～
「……」
「……」
「ここ……どこ？」
やっぱり迷った。寧ろこのメンバーで迷うなと言うのは困難を極めると思う。
「……迷っちゃったね。」
「そうですね。」
『キキッ！』
『ギギィ！』
路頭に迷っていたところ、猿型の魔物が現れた。
「カーリーさん。」
「ええ、そうね……」
「ここ森じゃなくない!?」
やっぱり意気投合した。
「ところで……なんとかなります？」
「なんとかなる？……愚問ね！なんとかするのよ！」
なに言ってんだこの人……
「えっと……つまりは？」

「とりあえず…全部斬る！」
ジャキィン!!
『グギッ！』
す、すげェ……完全に背後から来たのに反応してる…
……ん？背後？
……辺りを見渡すと、完全に猿型の魔物に完全に囲まれていた。
「コレ、ホントに行けます？」
「う～ん、一体一体はたいして強くないから良いんだけど……群れてるから面倒。君は腕に自信ある方？」
「いえ、全然全く。」
「にしては動揺してないね。」
「ハハッ、修羅場経験してますから」
未来の僕に比べたら百倍増しさ！
「なるほどね……来るよ！」
僕は、急いで鎚……いや、今回はカースツイールの方がいいな。
ズパッ！
……そういえば、結構久々だな……カースツイールを扱ったのは。
ザシュ！
あぁ、やっぱりなれない。異常に調子が良いのは。
「うぐっ……！」
そしてこの内側からたまに響く鈍い痛みも。
その違和感を抱えながら、時間は過ぎていった……

この後、とにかく狩りまくってたのは覚えていたけど、何匹殺した？とか。どうやって殺したとかは覚えていなかった。
「……君って、意外と戦闘になると性格変わるタイプ？」
「エッ……いや別に？」
「そう、それにしては、ずっと目がギラギラしてるなぁ～と。」
「あぁ、これ実はいわくつきの武器でして……」
「あぁ、なるほど。そういう。いやぁ～、普段と戦闘で全く性格違う人

よくいるからさ。そっちだと思った。」
　やっぱりいるんだ。そういう人
「……そういえば、なんで僕の名前聞いてあんまり反応しないんですか？」
「……え？有名なの？君。」
「……ええ……まぁ……」
　まぁ、ある意味…
「いやぁ～、しばらく武者修行で山に引きこもったり道場破りしたりしてたからなぁ、全然知らないんだぁ。」
「そうなんですね。……って道場破り!?」
「え？普通じゃないの!?」
「マジで言ってますそれ!?」
　どんな環境だよ!?道場破りが普通って！
「え～、おじいちゃんもお父さんもそれで腕磨いたって言ってたからな～」
「マジですか!?」
「マジマジ。といっても、おじいちゃんの記憶しかないんだけど…」
「そうなんですか？」
「うん、お母さんは生まれてすぐ亡くなっちゃったし、お父さんは……恨まれててね、袋叩きにされちゃった☆」
　軽ッ！それはまぁ置いといて…
「ちなみに、そのお爺さんってどんな？」
　気になる！すごい気になる！
「え～、酒と博打が好きな人だったなぁ…」
　……あ、嫌な予感。
「挙げ句にすごく強くてさ、酔っぱらって暴れたら誰も手がつけられないわけ！」
「は、はぁ……」
「でも、なんだかんだ言って世話してくれたし。棒切れ持たされて熊に挑まされたり、気まぐれで稽古って名目で襲われたし。お陰で寝るときに剣話せなくなっちった

。死ぬまで変わらなかったなぁ……あの破天荒…」
あれ？これまずいこと聞いた？
「え、なんかすみません…失礼なこと聞いちゃって…」
「良いの、良いの！私が勝手に言った事だし……でも、ホントにそう思ってるなら君のおじいちゃんの話聞かせてくれない？」
僕のじいちゃんかぁ……
「僕、家庭内では少し特殊で、じいちゃんとはそんなに話したことなかったんですけど、一言で言うと……クズなエロジジイでしたね。」
「へ？」
「しかも僕の前だけで。」
「え？どう言うこと？」
「なぜか知らないんですけど、皆の前だと雰囲気固いんですけど、僕と二人きりだと急に態度変わるんですよねぇ……」

（10年前）
「アル～、おじいちゃんが会いに来たぞ！」
「……？？え？？」
「ん～？あぁ、いつもと対応が違うって？フフン、それはなぁ～君が微ッ妙～な立場にいるから、可愛がっても問題ない！」
「？？？？」
ど、どう言うこと？
「いやぁ～、実を言うとさぁ……俺が教えてあげられるのって処世術だけなんだよね～ところがどっこい！それを教えてあげられるのは君だけ！理由は分かるかい？」
「分からないです。」
「それは君が俺と同じクズの香りがするから！」
…ぶん殴っていいかな、この人。
「よし！では早速教えてイクゾー！まずは覗きの極意だが……」
「何してるんですか？」
「ば、婆さん!?」

「何孫に下らない事教えてるんですか？」
「冗談、冗談だから！」
「しかも理由も酷い……ちょっと説教ですよ。」
「や、やめて、やめッ……い、いぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
……何この人

――――――――――――――――――――――

――――――

「こんな感じで、変な人でした。」
「元気な人ね……」
「……まぁ、色々」
そんな感じの雑談を続けながら、僕たちは進んだ。